富士宮市文化財調査報告書第34集

大中里坂下遺跡

―東京電力株式会社中里線鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2005

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第34集

大中里坂下遺跡

―東京電力株式会社中里線鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2005

富士宮市教育委員会

例　　言

1．本書は、静岡県富士宮市大中里字甲石866－３ほかに所在する、大中里坂下遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、東京電力株式会社沼津工事センターが計画する中里線No.58鉄塔建替工事に伴い、同社が株式会社東日と埋蔵文化財発掘調査支援業務委託をもって、富士宮市教育委員会に調査を願い出て実施されたもので、調査の体制は以下のとおりである。

調査主体者	富士宮市教育委員会	教育長　大森　衛
調査担当者	富士宮市教育委員会文化課	学芸員　渡井英誉
	富士宮市教育委員会文化課	嘱託員　佐野恵里
調査補助員	村野立巳、渡辺敏雄、斉藤之弘、大平美奈子、山崎芙美子	
整理作業員	佐藤節子	

3．調査期間は、発掘調査を平成16年９月13日～10月27日まで行い、整理作業を平成16年10月18日～平成17年１月20日まで行っている。

4．写真撮影は、渡井、佐野が行った。

5．本書の編集は、佐野が行った。

6．本書の執筆は、以下のとおり行った。

第Ⅰ章　渡井英誉
第Ⅱ章　１－(1)、(2)　佐野恵里
　　(3)　小野田晶（富士宮市教育委員会文化課　嘱託員）
第Ⅲ章　渡井英誉
第Ⅳ章　１．佐野恵里
　　２．渡井英誉
　　３．佐野恵里

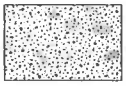
出土資料のうち、石器石材鑑定は、財団法人石の博物館・奇石博物館北垣俊明氏に依頼した。

7．本書を刊行するにあたり、次に記す各氏より、指導や助言をいただいた。（敬称略、五十音順）
植松章八　荻原美広　前田勝己

8．本書に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会文化課で保管している。

凡　　例

1．地形図、遺構実測図中の標高は、全て海抜高度をもって示し、単位はメートル（m）とする。
2．大中里坂下遺跡の調査区は、任意にグリッドを設定した。方位は、日本測地系国土座標第Ⅷ系に基づく国土座標軸国土座標による。
3．挿図中の縮尺は、挿図ごとにスケールで示している。
4．挿図（図４～図９）中の以下のトーンは、撹乱を示す。



5．土層注記及び土器・陶磁器観察表に記載した色調は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会事務局）で補って判断している。
6．土器観察表に記載した色調は、破片面積の最も占有する割合である。また、計測値はセンチメートル（cm）、グラム（g）を単位とする。（　）内で示す数値は、推定値または残存値である。
7．土器観察表に記載した略号は、以下のとおりである。

〈部位〉口縁…口縁部　胴…胴部　底…底部
〈胎土〉繊　　…繊維
英・長…造岩鉱物の内、石英・長石といった無色鉱物
有　　…造岩鉱物の内、輝石、角閃石、かんらん石といった有色鉱物
砂　　…砂粒
金雲　…雲母
赤　　…赤色粒子

8．本調査報告書で使用した地形図は、昭和62年及び、平成８年に建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図（１／10,000）を使用した。また、平成16年度本遺跡調査時における株式会社東日による測量図を、富士宮市教育委員会で加筆して使用している。

目　　次

第Ⅰ章　位置と環境

1．地理的環境 …… 1

2．歴史的環境 …… 3

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

1．調査の経緯と経過 …… 9

2．調査区の設定 …… 10

3．層　　序 …… 13

第Ⅲ章　発掘調査の成果

1．遺　　構 …… 15

2．遺　　物 …… 16

第Ⅳ章　ま　と　め

1．縄文時代 …… 45

2．弥生時代集落の動向（予察） …… 47

3．おわりに …… 56

報告書抄録 …… 57

挿図目次

図１　大中里坂下遺跡の位置 …… 1
図２　遺跡周辺地質略図 …… 2
図３　周辺の遺跡分布図 …… 4
図４　調査区設定図 …… 10
図５　北区全体図 …… 11
図６　南区全体図 …… 11
図７　北区・南区セクション図 …… 12
図８　北区・南区土層柱状図 …… 14
図９　溝状遺構実測図 …… 15
図10　出土土器１ …… 17
図11　出土土器２ …… 19
図12　出土土器３ …… 20
図13　出土土器４ …… 24
図14　出土土器５ …… 26
図15　出土土製品 …… 27
図16　出土石器１ …… 33
図17　出土石器２ …… 34
図18　出土石器３ …… 35
図19　出土石器４ …… 36
図20　出土石器５ …… 37
図21　出土石器６ …… 37
図22　出土石器７ …… 37
図23　出土石器８ …… 38
図24　出土土器６ …… 42
図25　出土土器７ …… 43
図26　滝戸遺跡SB26出土土器 …… 48
図27　泉遺跡出土土器 …… 49
図28　月の輪上遺跡出土土器 …… 50
図29　石敷遺跡出土土器 …… 52

挿表目次

表１　周辺の遺跡地名表 …… 5
表２　縄文土器観察表１ …… 28
表３　縄文土器観察表２ …… 29
表４　縄文土器観察表３ …… 30
表５　縄文土器観察表４ …… 31
表６　土製品観察表 …… 31
表７　出土石器計測表 …… 39
表８　石器素材組成表 …… 40
表９　弥生土器・土師器観察表 …… 44
表10　縄文土器時期別割合 …… 45
表11　縄文土器器種別割合 …… 45

写真図版

図版１　A　北区全景
　　B　溝状遺構
図版２　A　出土土器１
　　B　出土土器２
図版３　A　出土土器３
　　B　出土石器
　　C　出土土器４
　　D　出土土器５

第Ⅰ章　位置と環境

1．地理的環境

大中里坂下遺跡は、静岡県富士宮市の南端部に位置する遺跡で、山梨県から南下する富士川の左岸域に展開している（図１）。富士川までは３㎞程の距離を隔てており、直接関連付けられるものではないが、富士山の麓を流れる潤井川流域を含みながら、富士川下流域の地域的な括りの中で捉えることができる遺跡である。

富士山西南麓は、富士山の重層構造に起因して複雑な地質環境を示している（図２）。その中で、富士宮市の南部は、富士山斜面に位置して、新富士火山の噴出物に覆われる部分と古富士火山の噴出物をその基盤とする部分など各地区で異なる様相を表わしている。市域の南を画するように広がる星山丘陵は、富士根地区から連続する古富士泥流層が潤井川沿いに形成された断層により分断されたため独立丘陵の景観を示すようになったものである。そのため、丘陵内には星山谷などのような富士山頂を基点とした広がりの中で形成された放射谷が見られる。それらの谷の両岸に発達した河岸段丘上には、多くの遺跡の造営を認めることができるが、それらの遺跡は富士宮市の遺跡分布のひとつの特徴を示すもので、市内では比較的多くに遺跡の所在が確認されている地域でもある。星山丘陵は、南側を富士川とその扇状地により区切られ、北側を潤井川により形成された沖積地を挟んで富士山と対峙するが、その西側は富士山の西南麓を扇形に巡る一連の羽鮒・星山丘陵として南に向かって徐々に標高を減じる丘陵地形の中で捉えられている。その羽鮒丘陵と星山丘陵とを画するのは、新富士火山溶岩流（富士宮溶岩流）が富士川まで流れ込んだ沼久保谷である。この区画を境に丘陵は南北方向から東西方向へと大きく方向を違えているとも言える（富士宮市1988）。

富士山の火山噴出物を基盤とする富士宮市内は、古富士火山のそれを基盤とする部分に遺跡の分布が多く、新富士火山の地区には少ないとする傾向を指摘することができる。それは、傾斜地が続き、湧水地など水利に恵まれない新富士火山の噴出物を基盤とする地区の環境に由来するも

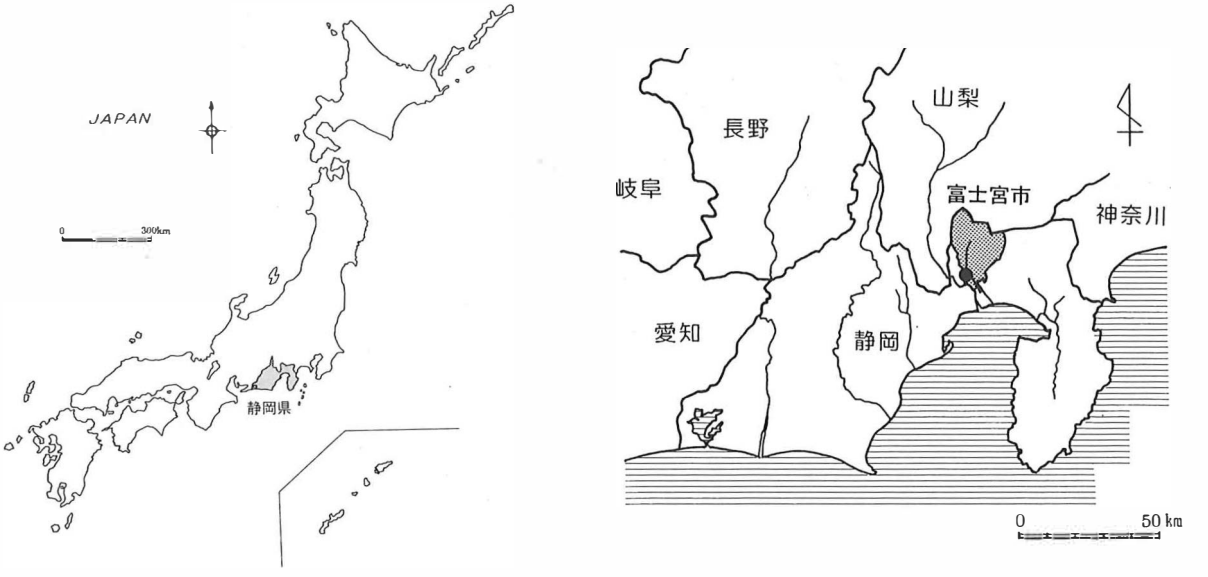
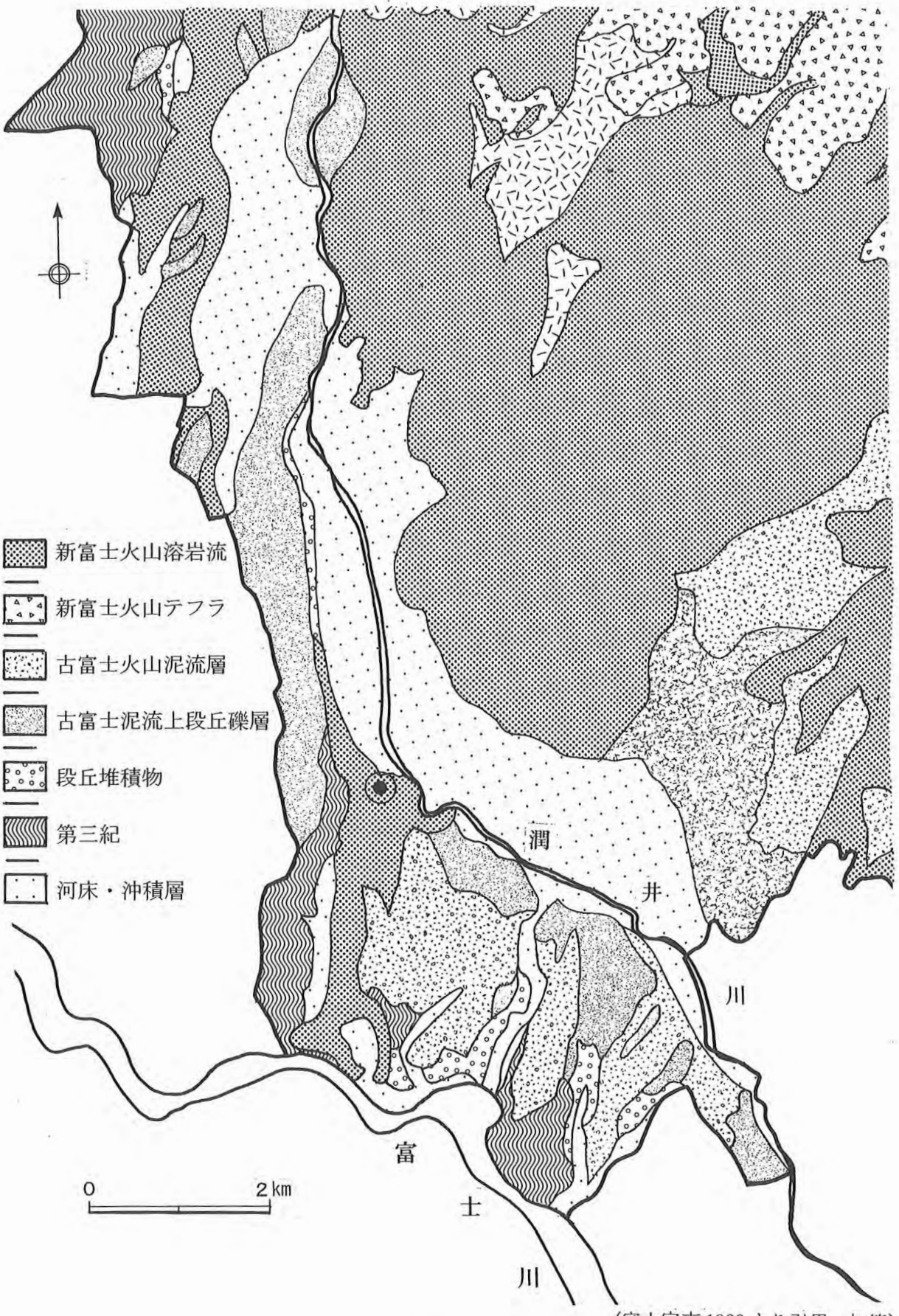


図１　大中里坂下遺跡の位置



（富士宮市 1988 より引用、加筆）

図２　遺跡周辺地質略図

のであるが、大中里坂下遺跡は、新富士火山の溶岩流を地質基盤とする富士宮市大中里に所在している遺跡であり、やや得意な条件下に築かれていると言える。

富士宮市の南部を主体として広く分布する湧水群の内、大中里地区には「大中里湧水群」が広がる。大中里湧水群は羽鮒丘陵の東側を南流し、淀師・大中里に達する地下水が地表に噴出することで形成された湧水群であり、潤井川の両岸にある数箇所の湧水地が確認される。大中里坂下遺跡や大中里坂上遺跡、甲石遺跡などの遺跡は、その湧水群の周辺に広がる遺跡群であり、北東側を流れる潤井川とともに直接それに依存しており、その自然環境が遺跡の営みを促すものとなっている。大中里湧水群のひとつである「よしま池」は、今回の調査地点より東側200ｍほどに位置している。また、この大中里湧水群を水源とする清水川は、潤井川の支流として羽鮒丘陵側から流れる小河川であるが、大中里坂下遺跡や大中里坂上遺跡の北東側を画する河川となっている。大中里坂下遺跡は、この川に向かって徐々に傾斜する緩斜面地に築かれた遺跡であり、今回の調査地点は、新富士火山の溶岩流を基盤とする北側に傾斜する丘陵裾部と清水川～潤井川の作用による扇状地との地形的な変換部分にあたるものである。

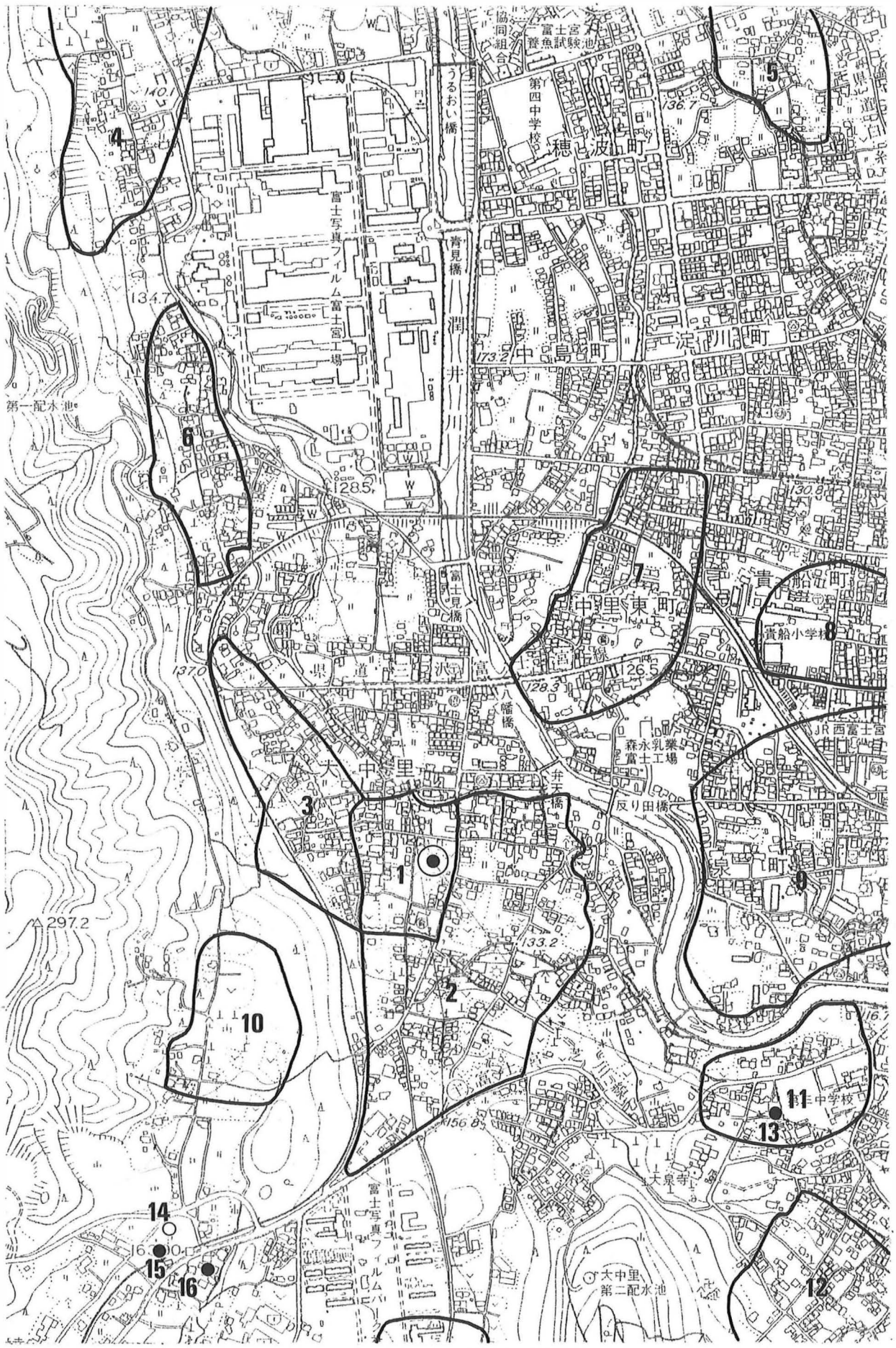
２．歴史的環境

大中里坂下遺跡は、潤井川右岸の丘陵上に位置しているが、周辺には歴代遺跡の広がりが認めることができる（図３）。また、沼久保～安居山にかけて開析する沼久保谷の潤井川側に対する開口部分に広がっており、富士川流域と潤井川流域とを結ぶルートを考えた時、いつの時代でもそこには交通の要衝になる地理的な環境を示していると言える。このルート沿いは、銀象嵌鍔や頭椎大刀の出土が知られる別所１号墳（14）と呼ばれる古墳時代後期の円墳や縄文時代以来連綿と集落等が築かれた滝戸遺跡（11）などあり、遺跡が特徴的な分布を示す地域としても捉えることができる。

大中里坂下遺跡周辺における遺跡の動向を概観すると、まず、旧石器時代終末期の遺跡である芝川町小塚遺跡の登場によって人間生活の開始を窺うことができるようになる。羽鮒丘陵にある小塚遺跡では、後期旧石器時代の石器群が調査されている（芝川町教育委員会1972）。

縄文時代に入ると大中里坂下遺跡の北側に広がる羽鮒丘陵の西側において、芝川町大鹿窪遺跡の衝撃的とも言える定住型の集落の出現によって幕を開ける。それ以降、富士川流域を主体として芝川町小塚遺跡、小松原Ａ遺跡、黒田向林遺跡、奥山地遺跡などの縄文時代草創期～早期の遺跡の分布が認められ、小泉の若宮遺跡で比較的大きな集落を造営するまでになる。また、若宮遺跡に続く縄文時代早期中葉の土坑群が同じ小泉にある石敷遺跡で調査されている。富士川下流域から富士山西南麓の富士地域においてこの大中里坂下遺跡の周囲は、縄文時代草創期～早期の遺跡分布の顕著な地区であると指摘できるものである。

縄文時代中期になると滝戸遺跡（11）における本格的な集落の造営が明らかとなる。それは縄文時代後期まで勢力的な動きとして把握されるものであり、竪穴住居、配石、集石、埋甕などの発掘調査資料を通してその様子が知られる。この造営は直接大中里坂下遺跡と関連するものであり、埋没谷を挟んで近接する両者は時代的に併存していたものである。それは、大中里坂下遺跡と一連の遺跡として考えることができる福伝遺跡（２）において縄文時代後期堀之内式期の遺物包含層が調査されている点からも確認されるのである（富士宮市教育委員会1993）。ただし、この縄文時代の遺跡の広がりも星山丘陵の北端部に合わせたかのように、大中里坂下遺跡～大中里坂



富士宮
養魚試験池
協同組合
うるおい橋
第四中学校
穂波町
富士写真フィルム富士宮工場
青見橋
潤井川
中島町
淀川町
第一配水池
富士見橋
中里東町
貴船町
貴船小学校
県道三沢富士宮線
八幡橋
森永乳業
富士工場
JR西富士宮
大中里
弁天橋
反り田橋
泉町
富士写真フィルム
大泉寺
大中里
第二配水池
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

図３　周辺の遺跡分布図

表１　周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	標高	種別	備考
1	大中里坂下遺跡	大中里字甲石	130	散布地	今回調査遺跡
2	福伝遺跡	大中里字出口他	130	散布地	甲石遺跡を含む。
3	大中里坂上遺跡	大中里字根方	135	散布地	
4	牛ヶ沢遺跡	大中里字牛ヶ沢	150	散布地	石畑遺跡、舞台遺跡を含む。
5	上中村遺跡	淀師字上中村	140	散布地	
6	根方遺跡	大中里字根方	145	散布地	
7	東田遺跡	大中里字東田	130	散布地	
8	貴船町遺跡	貴船町・西町	120	集落跡	
9	泉遺跡	黒田字泉	125	集落跡	西町遺跡、羽衣町遺跡を含む。
10	別所遺跡	安居山字別所	185	散布地	
11	滝戸遺跡	黒田字滝戸	130	集落跡他	
12	野中向原遺跡	黒田字向原	140	散布地	三連甕形土器出土
13	滝戸１号墳	黒田字滝戸	135	古墳	前方後円墳
14	別所１号墳	安居山字別所		古墳	消滅。頭椎大刀、銀象嵌鍔等出土
15	別所稲荷塚古墳	安居山字別所	168	古墳	円墳
16	別所蛇塚古墳	安居山字別所	164	古墳	円墳

上遺跡（３）周辺で分布範囲が一旦途絶えるようになる。ここに滝戸遺跡を中核として野中中村遺跡から大中里坂下遺跡～大中里坂上遺跡にかけて縄文時代遺跡の分布域を想定することができるのである。このような区域は、精進川神田遺跡から千居遺跡にかけての地域、箕輪遺跡から峯石遺跡、大室遺跡の地域、滝ノ上遺跡一帯、天間沢遺跡一帯がそれぞれ挙げられる。そして、これらの遺跡は、その範囲が富士山の傾斜地地形に規制されるなどの要因により、比較的狭い区域に展開する特徴をもつものである。そして、その中で、限られた範囲ながら集住して複合する遺跡である滝戸遺跡の特異性を指摘することができるのである。

弥生時代になると大中里坂下遺跡より一段高い丘陵上に別所遺跡（10）が登場する。この遺跡は、弥生時代中期前葉条痕文式期に比定され、潤井川を挟んで北側３㎞ほどに広がる渋沢遺跡と同時期の丸子式段階のものである。同じ流域の上流にある渋沢遺跡では、その段階の土坑墓群が発掘調査されている。前述のように、沼久保谷が交通のルートとなることは、縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての遺跡である富士川町の山王遺跡とこの別所遺跡や渋沢遺跡を結ぶ遺跡分布域が考えられる。そこには、富士川と潤井川が介在するのであるが、水田可耕地を求める肥沃な平野部の広がりを見ることはできない。このような弥生時代中期前葉の遺跡としては、押出遺跡、上谷戸遺跡、山梨県南二条遺跡などを挙げることができ、富士山南麓～西麓にかけての山間に点在するのである。

この弥生時代中期に一定の分布を示した遺跡は、弥生時代中期中葉以降大半が消失したようで芝川町辻遺跡を唯一の例として、富士山麓では確認できなくなる。それ以後長い空白期を経て、再び遺跡の登場が知られるのは弥生時代後期に入ってからである。

弥生時代後期には、石敷遺跡、月の輪上遺跡、下谷戸遺跡、滝戸遺跡（11）、などが星山丘陵内を主として出現している。大中里坂下遺跡もこの動向の中で捉えられるものであり、星山丘陵の

遺跡群の北端に位置していると言える。また、滝戸遺跡あるいは大中里坂下遺跡の潤井川を挟んで対岸に広がる泉遺跡（９）では、弥生時代後期の環濠集落が調査されている（富士宮市教育委員会1993)。泉遺跡は、潤井川により形成された沖積地内の微高地上に築かれて集落遺跡で、幅１ｍを測る環濠の一部が発見されており、その中から菊川式土器を主体とした外来系の影響を強く受けた土器類が出土している。富士山麓における新たな開発は、雌鹿塚遺跡や的場遺跡など海岸部の遺跡が消失する段階に呼応した本格的な動きとして捉えることができる。それは、愛鷹山中腹に登場する遺跡群と同調したものであり、広域に亘る山間地に対する進出が始まるのである。

遺跡の変遷は弥生時代後期に継続する状況で古墳時代前期となると、月の輪平遺跡の集落や丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓の出現から分かるように、本拠地としてこの富士山西南麓の遺跡群の繁栄を迎える。東岳前遺跡（４)、牛ヶ沢遺跡他（５)、滝戸遺跡（11)、東田遺跡（７)、貴船町遺跡（８)、泉遺跡（９）などにおいてこの段階の資料が採集されており、大中里坂下遺跡周辺でも広く分布する遺跡群の様子を窺うことができる。滝戸遺跡においては、実際にこの時期の居住域と墓域からなる集落跡が調査されている。発掘調査では、潤井川に面した段丘上で竪穴住居跡が９軒発見され、居住域を形成していた様子が知られ、それより一段高い丘陵上では方形周溝墓３基と小形の竪穴遺構からなる墓跡が確認されている。この段階の墓跡としては、南部谷戸遺跡において方形周溝墓群が発見されている。南部谷戸遺跡では４基の方形週溝墓が検出されているが、一辺10mを超える第４号方形周溝墓から１辺６ｍ程を測る第１号方形周溝墓、第２号方形周溝墓まで大きさは多彩である。

富士山麓で発見されているこの段階の墓は、26mを超える丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓を頂点として、一辺13mを測る丸ヶ谷戸遺跡の方形周溝墓、溝幅３ｍを測る南部谷戸遺跡の第４号方形周溝墓とそれ以外の５～７ｍほどの規模を測る一般的な方形周溝墓に大きく分けて捉えられる。そこに墓制から分かる階層性が指摘でき、丸ヶ谷戸遺跡の優位性が際立つものとなるわけである。その中で、滝戸遺跡の方形周溝墓群は一般的な規模を持つもので構成されており、墓域内における格差を認めることはできない状況にある。

古墳時代前期はその後半段階になると遺跡の衰退期に入るようで、その数は減る。月の輪平遺跡はその前段階から継続して集落の造営が窺える。また、隣接する月の輪下遺跡に集落が出現し、月の輪上遺跡においても新たな登場が認められ、星山谷付近では集落の拡大が図られるようになる。また、滝戸遺跡（11)、泉遺跡（９）などでも集落の継続は認められる。滝戸遺跡の丘陵では方形周溝墓が発見され、二重口縁壺、小型器台、小型坩の出土が確認されている。星山丘陵沿いには前期後半段階の集落遺跡が知られ、一定の分布域の形成が想定される。この分布域では、三連の小型甕（三連甕形土器）が出土している野中向原遺跡（12）が所在し、また、全長60mクラスの前方後円墳である可能性を秘めた塚本古墳が位置しているのである。この星山地区の隆盛に反して富士山側の富士根地区の遺跡の所在ははっきりしなくなる。丸ヶ谷戸遺跡を含む地区だけに遺跡数の減少は大きな変化として捉えられ、その衰退は比較的急速に進行している。この地区の集落としては、富士市天間沢遺跡が調査されているが、発見された竪穴住居は、散在する状況であり、継続性の弱い集落として捉えられている。

富士山西南麓では、古墳時代前期後半を過ぎると全域で遺跡の所在がはっきりしなくなる。それは４世紀の中葉以降のことと考えることができるが、その要因についてはよく分かっていない。

遺跡が改めて登場するのは、５世紀の中葉以降になってからである。湧玉池周辺の大宮城跡や浅間大社遺跡でこの時期の遺跡が調査され、大宮城では５～６世紀の竪穴住居址21軒が発見され

ている。また、潤井川を下って、その下流に所在する富士市沢東遺跡では、この段階から始まり６世紀まで継続する大規模な集落遺跡の所在が確認されている。ただし、この段階以降の遺跡の分布は、あくまでも限られた範囲のことで広域的な広がりは見せない。古墳時代後期の遺跡としては、泉遺跡（９）、大宮城跡、箕輪遺跡、木ノ行寺遺跡などが挙げられるが、散在する状況である。

古墳時代後期には小規模ながら群集墳の出現が認められる。大岩の大室古墳周辺の古墳群、滝戸の古墳群、安居山別所の古墳群が現在確認されているが、いずれも調査で判明している群の規模は小さい。滝戸の古墳群は５世紀後半からの造営が窺える初期の群集墳で、その最頂部には全長33mを測る前方後円墳である滝戸１号墳（13）が築かれる。

安居山地区では、沼久保谷の最奥部斜面に別所古墳群（14～16）が築かれる。別所古墳群の内、別所１号墳（14）は、1902年（明治35年）に主体部となる横穴式石室などが発掘され、頭椎大刀、銀象嵌鍔、三葉文透心葉形鏡板付轡、花形杏葉、辻金具、雲珠、耳環、勾玉、小玉、鉄鏃の出土が知られている。年代は７世紀の前半代が想定されるもので、山間地に展開する小規模な古墳群の中においては、比較的優良な副葬品を保有する古墳であることが知られる。

奈良時代になると、その前半期を主体にやや特異な遺跡分布を示すようになる。この段階になると、弓沢川左岸に沿うように遺跡の新たな登場が指摘されるわけであるが、峯石遺跡や上石敷遺跡などで竪穴住居址が発見され、木ノ行寺遺跡や中沢遺跡などで遺物が採集されている。これらは小規模な集落遺跡として捉えられるもので、峯石遺跡で１軒、上石敷遺跡で３軒とその調査面積に比して、数棟の竪穴住居が希薄な状況で分布した構成を示している。それに対して、弓沢川の下流域では、石敷遺跡で竪穴住居１軒とともに倉庫と思われる掘立柱建物が４棟発見され建物群を構成している。権現遺跡においては水路等の機能が考えられる幅2 .2 mを測る規模な溝跡が調査されている。この権現～石敷遺跡ではその広範囲の広がりの中で、倉庫や溝など各種機能を備えた施設としての遺構が発見されており、拠点となる集落構成を考えることができる。ここに拠点となる石敷遺跡、権現遺跡に対して、それに付随する上流域の峯石遺跡など各遺跡と相関する構図が見られる。そして、これらは、奈良時代前半期に限られるもので、後に継続しない極めて短期間の遺跡群として捉えられるのである。奈良時代の遺跡としては、この弓沢川左岸の遺跡群の他に貴船町遺跡（９）において集落跡を確認している。市内においてもうひとつの遺跡分布範囲として重要であるが、その広がりについては、まだよく分かっていない。これらに奈良時代遺跡はその後半段階には姿を消し、律令制下の富士郡の中枢である富士市東平遺跡の周辺へと分布域を変える。富士山西南麓ではこの段階の遺跡として、潤井川流域の富士市天間代山遺跡（富士市1977）の集落跡が調査されている（富士市教育委員会1977）が、富士宮市域の調査例はまだない。

平安時代では、９世紀後半になると新たな動きとして、浅間大社遺跡や泉遺跡（９）で集落が築かれるとともに、富士山中腹の村山浅間神社周辺への進出が見られるようになる。村山浅間神社の立地する場所は、富士山斜面の一部となる緩斜面であるが、そこで竪穴住居１軒が発見されている。広大な丘陵地形を示す地区であるが、確認されたのは竪穴住居１軒と関連する溝１条だけである。一般生活の色合いが薄い集落遺跡であると言える。

平安時代の遺跡は、富士市域の東平遺跡を始めとした富士郡衙関連遺跡群の衰退に合わせて出現するもので、その分布も泉遺跡（９）から浅間大社遺跡にかけての限定された範囲に認められるのである。その中で、稲作などの生産がほとんど期待できない富士山中腹への進出は、極めて

特異な現象として捉えられるのである。そして、この段階には、富士川町の浅間林遺跡や破魔射場遺跡などの登場からも分かるように、富士川下流域の諸遺跡における甲斐の顕著な影響を窺うことができるものであり、その動向の中で富士宮市内の遺跡も捉えられる。

12世紀に入ると大宮の地に富士氏の居館が築かれたようで、富士地区の政治的な中心が富士市域から大宮の地へ移動するようになる。それには、浅間信仰に係る大宮浅間宮の存在が大きく作用しているものであり、ここに政教両面から指摘できる中核地の形成がなされ、大きな時代の変革期として捉えられる段階なのである。以後、富士宮市域でも大宮の地は、富士氏の居館としての屋敷地の形成と大宮浅間宮の発展を通じて、独自の展開を示すようになるのである。

〈文献〉

富士宮市　1988『富士宮市の自然　第一次富士宮市域自然調査研究報告書』
芝川町教育委員会　1972『駿河小塚』
富士宮市教育委員会　1993『富士宮市の遺跡』
富士市教育委員会　1977『天間代山遺跡』

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

1．調査の経緯と経過（図4）

平成15年度に、東京電力株式会社より、中里線鉄塔建替工事に伴う文化財の所在の有無についての照会があり、これを受けて、富士宮市教育委員会では、平成16年３月15日～19日まで、対象地すべてについての確認調査を行った。対象の鉄塔は、No.54～No.58鉄塔である。これらの鉄塔は、No.54鉄塔が滝戸遺跡、No.57鉄塔が福伝遺跡、No.58鉄塔が大中里坂下遺跡範囲であり、No.55鉄塔とNo.56鉄塔は、滝戸遺跡と福伝遺跡範囲に挟まれた遺跡範囲外であると想定された。それぞれの所在地は、以下のとおりである。

中里線No.54　　富士宮市大中里字滝戸644―２外２筆
中里線No.55　　富士宮市大中里字白土1000―６
中里線No.56　　富士宮市大中里字白土976―３
中里線No.57　　富士宮市大中里字甲石846
中里線No.58　　富士宮市大中里字甲石866―３　他

調査は、鉄塔保護のため、限られた範囲でのトレンチ調査を行った。面積は対象地それぞれ約125㎡のうち１～３㎡である。

滝戸遺跡範囲内であるNo.54鉄塔では、表土直下にこの地域の標準土層である、大沢スコリア層、黒ボク土層、栗色土層までの堆積を確認したが、表土下にはすでに岩盤層がところどころ露呈していた。遺物は縄文土器３点のみで、土層堆積状況からは、谷地形の流れ込みに伴うものと考えられた。

No.55鉄塔では、大沢スコリア層～栗色土層までの標準土層の堆積が確認された。南側は急峻な崖地となって、大沢スコリア層は約50cmの厚さで堆積しており、栗色土層から縄文土器１点を出土したものの、流れ込みに伴うものと考えられた。

No.56鉄塔は、表土直下に黄褐色ローム質土を確認したため、既に後世の削平が著しく進んでいると考えられた。

福伝遺跡範囲内であるNo.57鉄塔では、黒ボク土層は確認されなかったものの、大沢スコリア層、栗色土層、富士黒土層に対応する土層の堆積が確認されたが、遺物は出土しなかった。また、層中には、握り拳大～人頭大以上ある溶岩礫が散見され、平成２年度に、調査区より約130ｍほど山よりで行った調査と様相を同じくする。

大中里坂下遺跡範囲内であるNo.58鉄塔では、調査時、表土下に、本地域の弥生時代～古墳時代の遺構覆土とされる、黒色土（スコリア粒を含む）がトレンチ一面に検出された。層中には、古墳時代前期のＳ字状口縁の甕が出土し、遺構との関連が考えられたため、本地点の本調査を実施することにした。

本調査は、平成16年９月13日～10月27日まで行われた。宅地に隣接していたため、宅地に沿って、防御フェンスを設置して行った。期間中は、天候が不安定な日が多く、観測史上類を見ないと言われるほどの数の大型の台風が接近したため、調査は風雨対策に留意して行った。

調査区は、鉄塔工事箇所の124.86㎡と、そこから約12m南側へ離れた位置にある電線借り止め箇所の11.0㎡が調査対象地となった。鉄塔工事箇所を北区、電線借り止め箇所を南区と呼称した。

調査区は、使用中の送電線鉄塔下の調査であったため、安全のため、発掘作業はすべて人力で行った。また、鉄塔脚部の保護のため、鉄塔埋設坑が確認された時点で、埋設坑とほぼ同じ2.5mの保護材を設定し、土流失の防御策とした。

埋め戻しは、10月28日～29日にかけて行われ、総ての作業を終了した。

2．調査区の設定（図4）

確認調査の際、確認された表土層は、北区中央付近、A－2グリッドでは30～40cmの厚さであったため、表土層除去後に任意の5mグリッドを設定した。東西列をアルファベットで、南北列を算用数字で表し、グリッド名は、北西隅の杭名をあてている。遺物は、グリッドごとまとめて

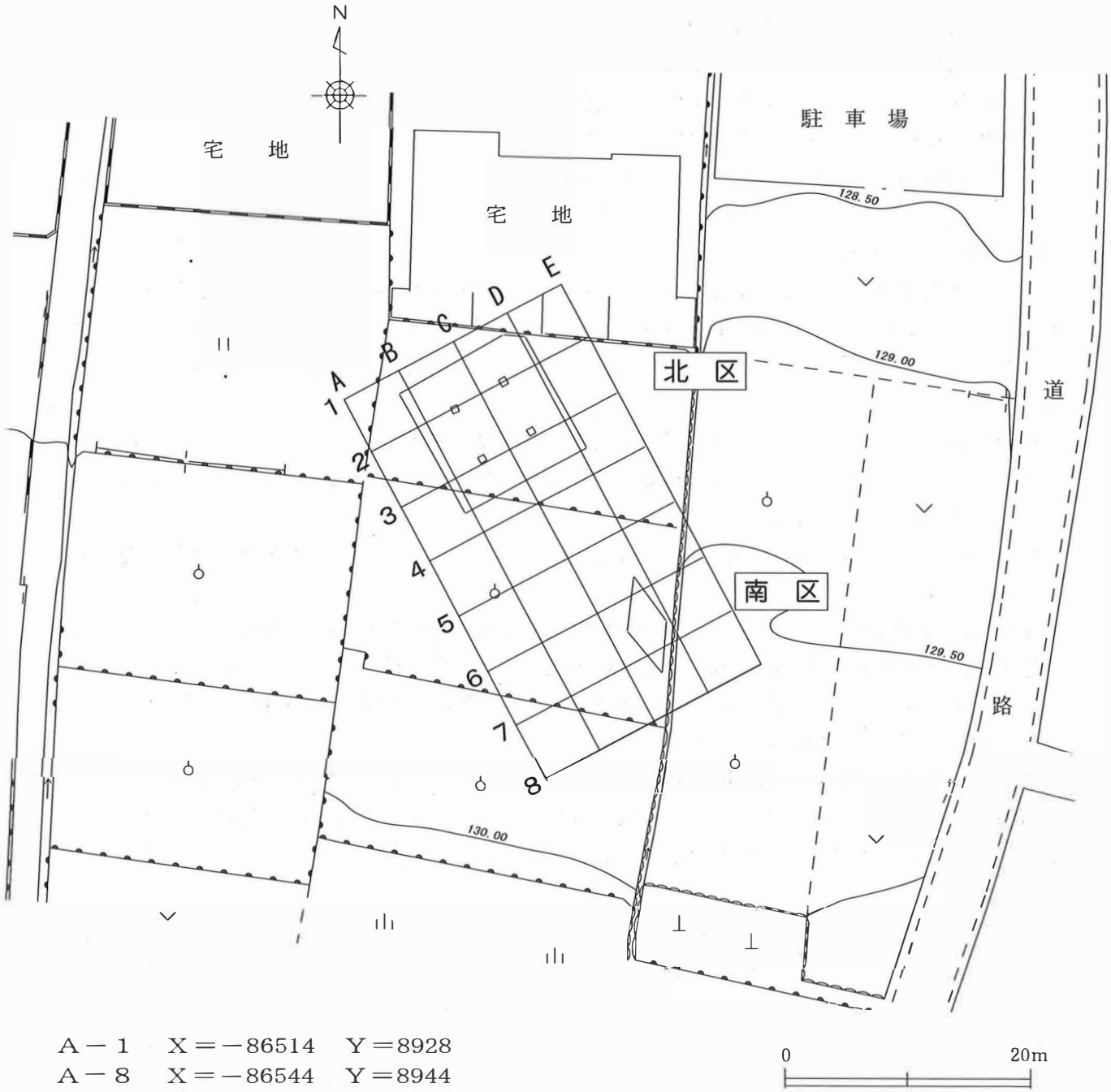


図4　調査区設定図

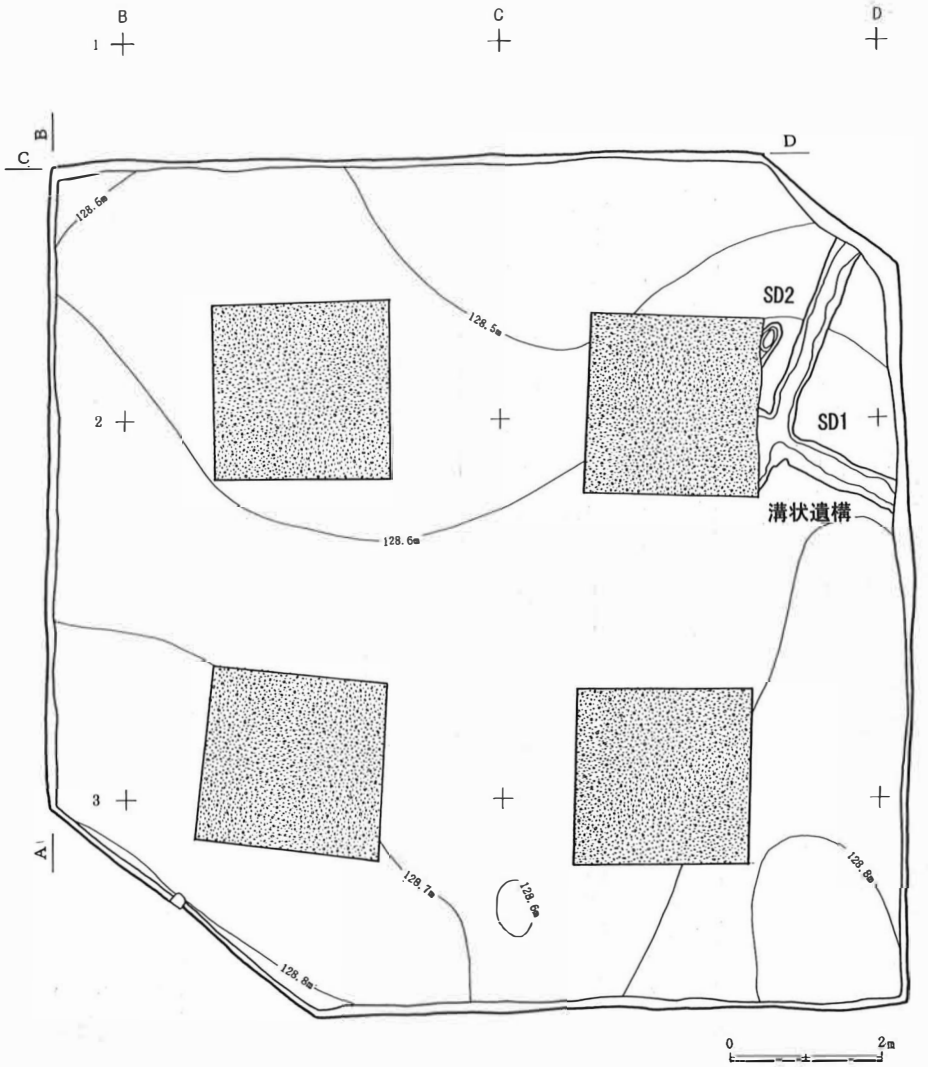


図５　北区全体図

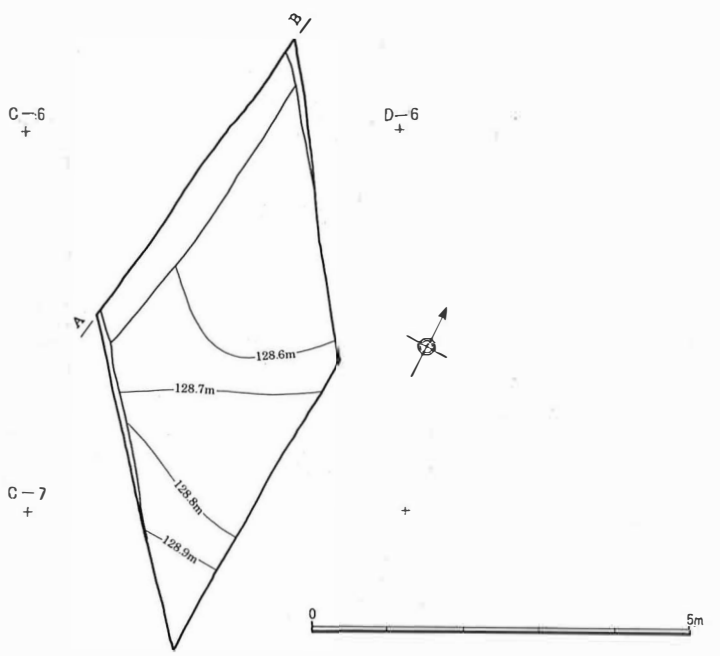
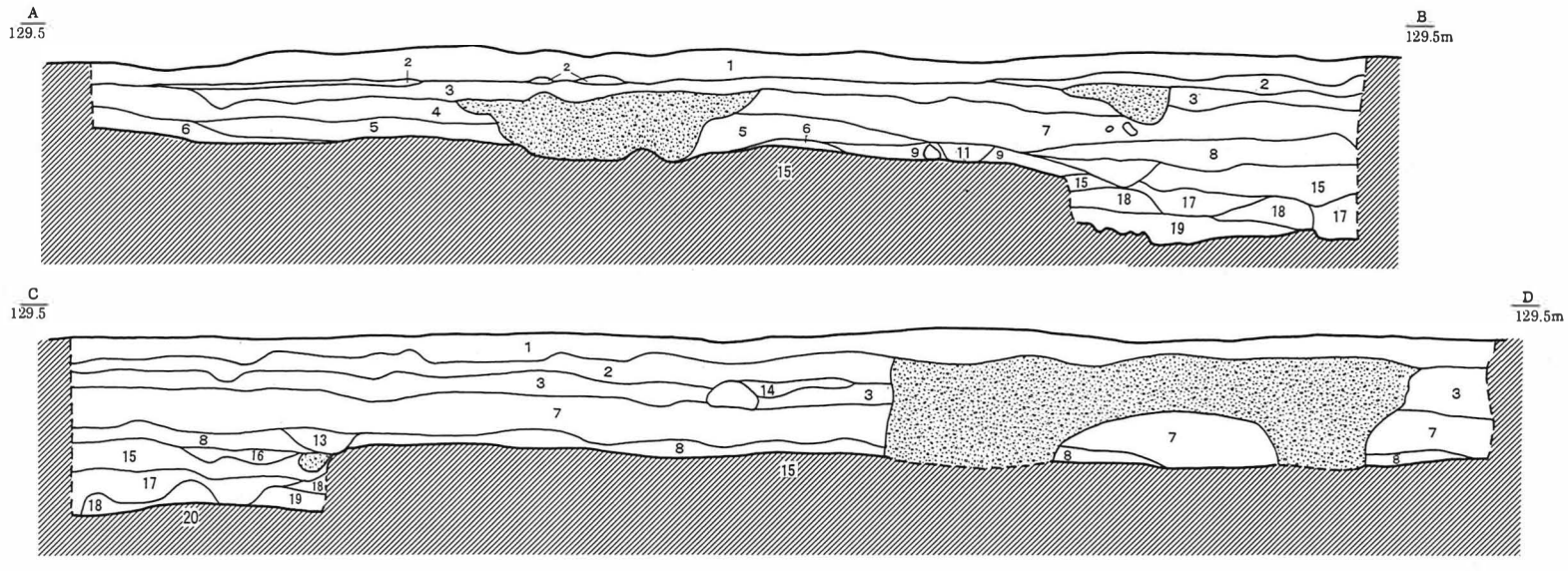
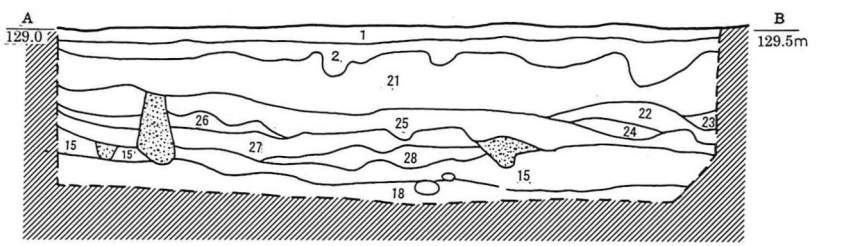


図６　南区全体図



1	黒褐色土	表土	6	褐色土	遺物包含層	11	黒色土	撹乱	16	褐色土	撹乱
2	灰褐色土	耕作土	7	黒色土	遺物包含層	12	褐色土	撹乱	17	黄褐色土	遺物包含層
3	黒褐色土	客土（耕作土）	8	黒色土	遺物包含層	13	黒色土	撹乱	18	褐色土	遺物包含層
4	黒色土	遺物包含層	9	褐色土	遺物包含層	14	黒色土	客土	19	褐色土	遺物包含層
5	褐色土	遺物包含層	10	褐色土	遺物包含層	15	黄褐色土	遺物包含層	20	明褐色土	地山（古富士泥流層）



21	暗褐色土	表土	25	黒褐色土	遺物包含層
22	暗褐色土	客土	26	極暗赤褐色土	遺物包含層
23	明褐色土	客土	27	極暗赤褐色土	遺物包含層
24	黒褐色土	客土	28	暗赤褐土	遺物包含層

図７　北区・南区セクション図

取り上げ、出土層位の明確なものについては層位を明記した。

調査地点は、地質的には、富士山の新富士火山旧期溶岩流（北山（外神）溶岩Ⅱ）上にあたる（註）地点である。周囲は西に安居山断層や南に大宮断層が見られるなど地質的に複雑で、また、本遺跡の東に接する大中里坂上遺跡になると崖錐の堆積地になるなど、比較的不安定な地域と考えられる。

調査地点周辺の地形は、南から北側へ傾斜する緩斜面であり、北側約100mには、潤井川の支流である清水川が東流し、東側約300mには湧水地であるよしま池がある。

北区の土の堆積状況はこの地域の標準土層を示さず、河川の低地へ向けて傾斜する、斜面堆積地の様相を示していた。現況は、畑地であるが、現表土下には、近現代の水田耕作時の粘質土が所々に残存していた。これらの農地整備は、客土をもって行われていた。この客土にも遺物は混入していた。遺物包含層は、これらの土層から、地山である明褐色土（古富士泥流層）まで確認された。最大で、0.85mの厚さであった。遺物包含層は、黒色土を主体としてスコリア粒の混入が目立つ土層（本地域弥生～古墳時代の遺構覆土に類似）と、ローム質土を多く含む黄褐色砂質土を主体とする土層に大きく分かれる。また、その境は漸移的でなく明瞭であった。急激な環境の変化を示していると考えられる。富士山麓では、ローム質土は約12,000年前の新富士火山噴出物とされており、縄文時代の鍵層とされている。本遺跡では、このローム質土を主体とする土層に縄文時代の遺物が多く包含されていたことは、斜面堆積地の状況を示すと共に、土の移動の激しさを示していると考えられる。

南区の土層堆積状況も斜面堆積地の様相であったが、北区の土層とはやや異なり、やや北東側へ傾斜する傾向もあった。また、土も、近世～現代にかけての土層と考えられる黒色砂質土の堆積が北区より顕著であり、わずかに山側の地点であるにもかかわらず、土層堆積状況に違いが見られる。

以上のことから、本調査地は、ローム質土が縄文時代の遺物を包含して急激に流下し堆積した状況ののち、弥生時代～古墳時代の比較的安定的な土層の堆積がなされていると考えられた。

（註）富士宮市1988『富士宮市の自然』付図「富士宮市域地質略図」（原図、津屋弘達1968、小川賢之輔案）より

3．層　　序（図8）

基本層序を確認した箇所は、最も土の堆積状況がよい北区北西隅で行った。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　黒褐色土　表土層。最も柔らかく、また乾燥しやすい。現代の腐食質土層。

Ⅱ層　灰褐色土　耕作土。下層に鉄分が沈殿する水田耕作時の床土。しまり非常に強い。

Ⅲ層　黒褐色土　客土。黒褐色土主体で、黄褐色土ブロック、褐色土ブロック等を混入する。

Ⅳ層　黒　色　土　遺物包含層。弥生時代～古墳時代の遺物包含層に類似する。径３～５㎜のスコリア粒25％程度含む。

Ⅴ層　褐　色　土　遺物包含層。Ⅵ層とⅦ層の漸移層。見られるところと見られないところがある。

Ⅵ層　黄褐色砂質土　遺物包含層。ローム質土主体であるが色調は濁り、全体的に砂質。径３～５㎜のスコリア粒40％程度含む。

Ⅶ層　褐色粘質土　遺物包含層。粒子の細かい粘質土主体。径が１㎝以上のスコリア粒、下層では３～５㎝程度のⅦ層の礫片を含む。

Ⅷ層　凝灰質礫層　明褐色のローム質土が、人頭大以上の大きさに礫化して、集塊状になっている。最も明るい色調である。非常に硬く、不透水層。

本調査区では、本地域の標準土層は示さなかった。遺物は、Ⅷ層以外はⅠ～Ⅵ層すべてに含まれる状況であった。Ⅶ層は、Ⅷ層の層面の影響を受けて、礫間にも入り込むような様相であり、発掘時には分層は困難であったが、遺物は出土するものの点数は減少していたようであった。Ⅳ層からは、縄文時代中・後期、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物が出土し、Ⅴ層～Ⅶ層からは縄文時代中・後期の遺物が出土した。また、溝状遺構は、Ⅴ層を掘り込んで構築されている。そのため、Ⅳ層は、弥生時代以降に、Ⅴ層～Ⅶ層は、縄文時代以降に堆積した土層と考えられる。いずれも谷地形に伴う自然堆積土と考えられる。Ⅷ層は、不透水層であることから、古富士泥流に対応すると考えられる。

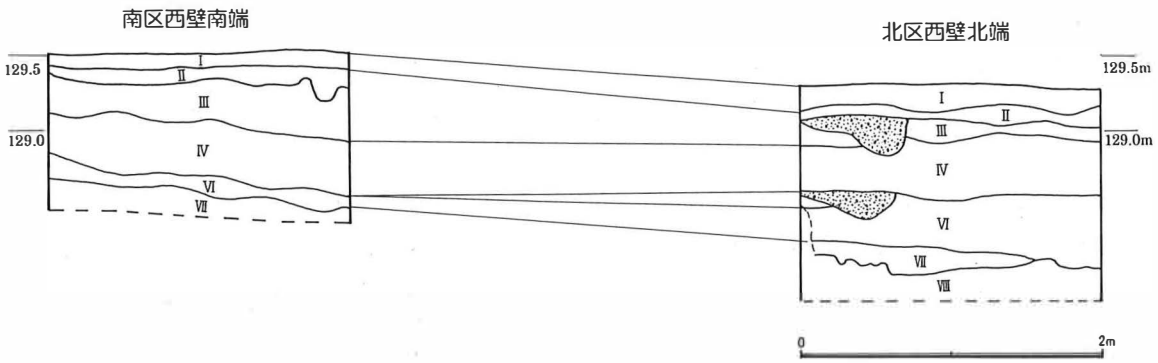


図８　北区・南区土層柱状図

第Ⅲ章　発掘調査の成果

1．遺　　構

(1)　溝状遺構（図９）

溝状遺構は、北区北東隅で検出された。南西部分を鉄塔の脚部によって失われているため、便宜上SD１とSD２と呼称するが、覆土の状態、包含遺物にも差異はなく、同時期であり、また同一遺構と考えられる。SD１、SD２は南北方向と東西方向の格子状になると考えられ、溝の幅は、約30～45cmである。溝の方向からは、東側調査区外にも広がりを持つと考えられる。山側にあたる北側方向へ広がりは確認されなかった。溝の深さは、15～20cm程度である。遺構覆土は、遺構検出面より上層の、弥生～古墳時代以降の遺物包含層である黒色土に類似する黒色土で、スコリア粒の含有率が増加する、砂粒が減少するといった細かな差異程度であり、ほぼ同時期と考えられる。遺物は、細かな土器片が出土している。

この溝状遺構は、一部分のみの検出であるが、沼津市北神馬土手遺跡で検出された畑状遺構に類似する形態である。

〈参考文献〉
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997『北神馬土手遺跡　他Ⅰ』（遺構編　本文）

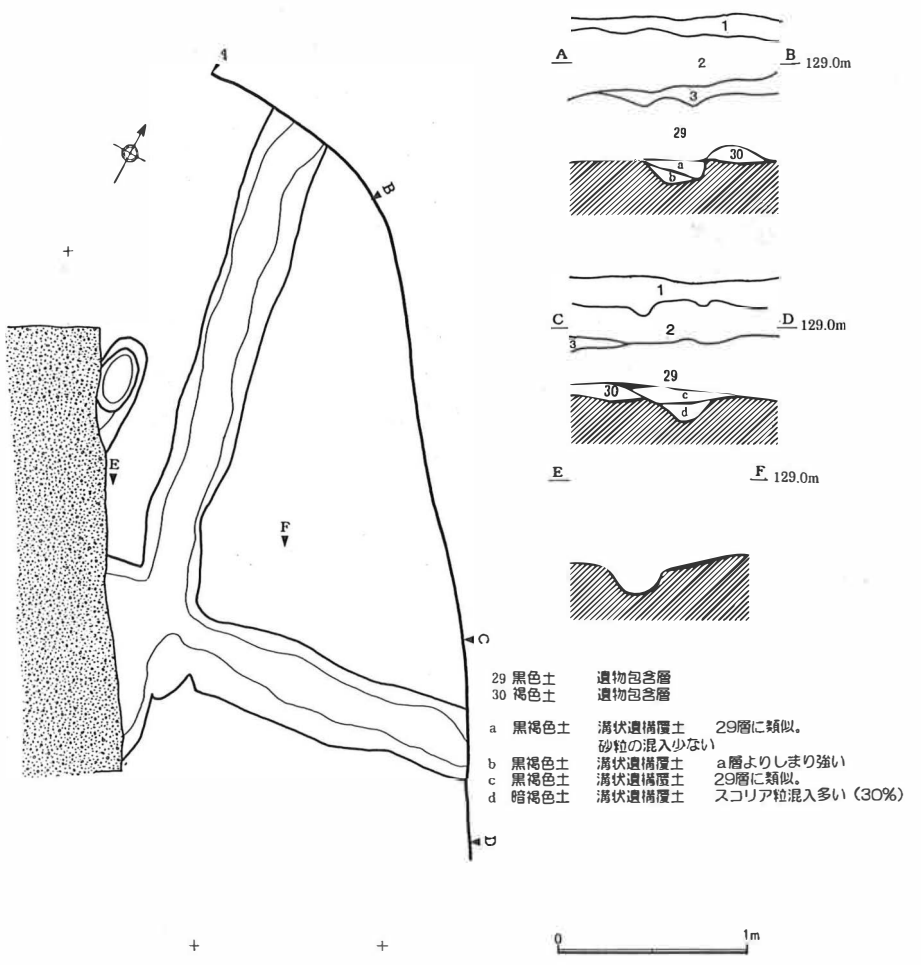


図９　溝状遺構実測図

2．遺　　物

(1)　縄文時代

a．土　　器

a－1　深鉢形・鉢形土器・壺形土器

第Ⅰ群　早期後葉の土器（図－10）

太く深い沈線で文様を描く、深鉢形土器の口縁部破片である。文様は、太い沈線で斜め方向に設けられた区画内部に、同じ太い沈線で上下方向に連続する列点を施している。口縁部は内湾する。胎土は繊維を含み、軟質である。早期後葉の貝殻条痕文系土器群のうち、鵜ヶ島台式併行期のものかと考えられる。

第Ⅱ群　中期中葉の土器（図10－２～７）

a類（２・３）

いずれも深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部外面に密接した連続の刺突文を横位に施している。刺突は爪形である。２は、口縁端部が外側に隆起しており、３は、内湾している。北屋敷式土器と考えられる。

b類（４～７）

勝坂式土器と考えられるものを一括した。いずれも深鉢形土器の胴部破片である。４は、連続する横位の爪形の刺突と三角形の刺突が見られるもので、その下部に三角形の刺突で文様を描いている。内外面とも丁寧になでられており、比較的硬質である。５は、隆帯の区画内部に縄文と、区画に沿って三角形の刺突を施している。器壁も薄く、小型品と考えられる。６・７は、隆帯で区画をつくり、内部に条線を施している。６には渦巻状の隆帯が添付され、７は、楕円区画文となる。いずれも、小破片であり、全体の文様構成は不明であるため、時期推定は難しい。

第Ⅲ群　中期後半の土器（図10－８～21）

a類（８～21）

曽利式土器と考えられるものを一括した。いずれも深鉢形土器である。８は、頚部に波状隆線が施されており、２条見られる。口縁部は無文である。９は、口縁部で、隆帯で斜行する褶曲文が施される。また頚部には、波状隆線が１条見られる。10～13は、口縁部に円文や渦文で横位の文様帯を設けるもので、10は隆起して把手状になっている。10～12は、隆帯を貼り付けて立体的につくられており、13は、彫りも浅く、やや退化した様相である。14は、口縁部直下に横位の隆帯が見えるもので、胴部に縦位の条線を施す。15は縦位区画に連八文が施されるもので、口縁部破片である。区画はすべて沈線によってなされており、16・17は、懸垂文が添付される胴部破片である。16は、刻目の施される隆帯で地文に条線が施される。17は波状の隆帯で地文に縄文が施される、曽利縄文系である。18～21は、綾杉文や連八文が施される胴部破片で、18は、２対の刺突であり、通常の連八文とは異なる。19は縦位区画が隆帯でなされ、連八文が施されている。20は縦位区画は沈線でなされている。21は、綾杉文が施されている。器壁は比較的薄く、径も狭いようであり、小型品かと考えられる。また外面一面に煤が付着している。

これらの曽利式土器の深鉢形土器は、頚部に波状隆線を持つ大型破片から、褶曲文を持つ曽利式前半のものから（８・９）、口縁部横位に円文や渦文を施した文様帯を持つもの（10～13）、また、口縁部文様が退化して胴部に綾杉文や連八文を持つようになるもの（15・18～21）の、曽利

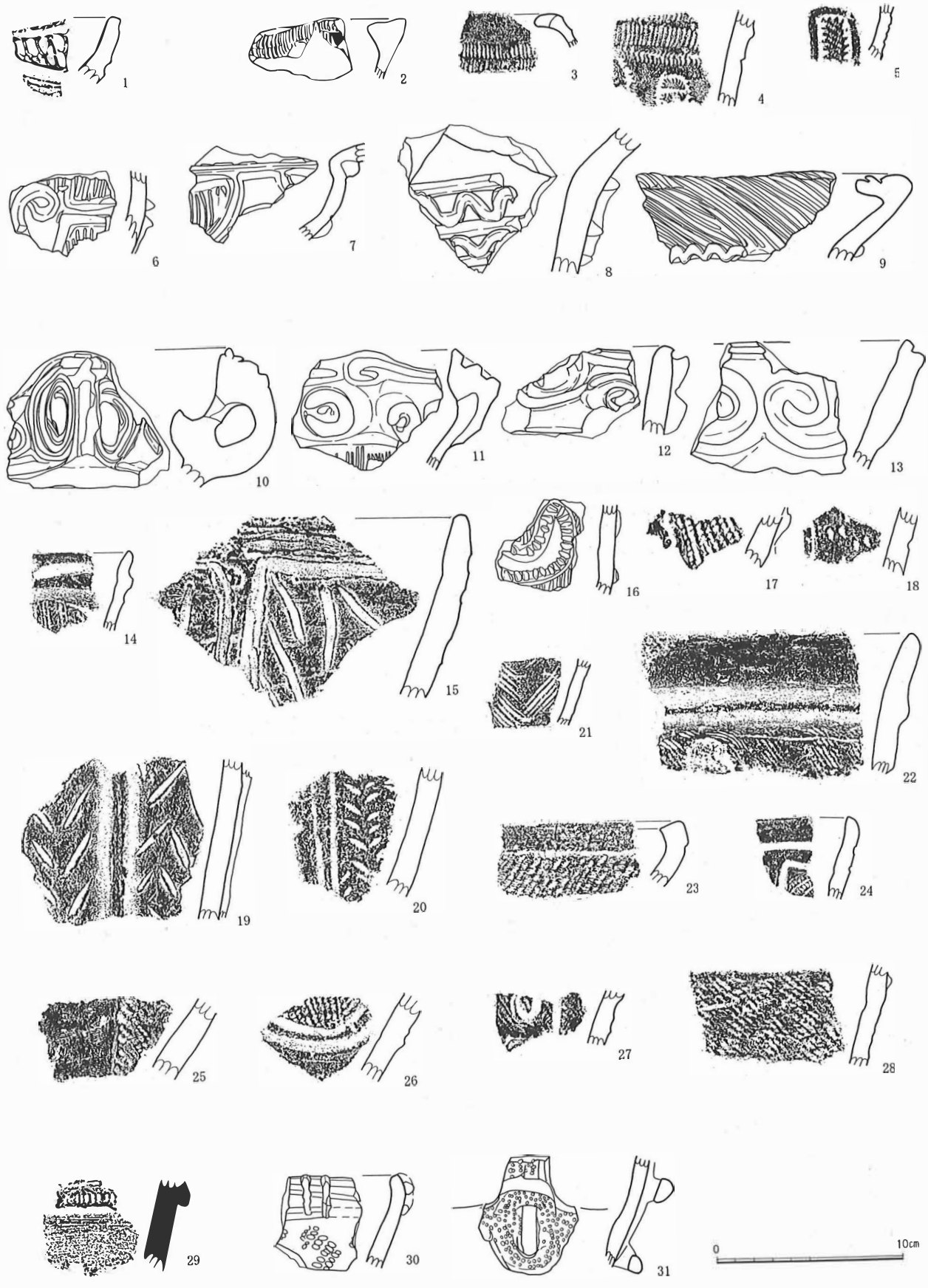

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm

図10　出土土器１

式後半のものまである。

b類（22～27）

加曽利E式系土器と考えられるものを一括した。すべて深鉢形土器である。22は、口縁部に横位の隆帯とその下部に縄文を施している。縦位区画は破片内では確認されなく、縄文のみが確認できる。胎土は粗く、焼成もやや不良である。23は、口縁部が強く内湾している。口縁端部の段を設けた部分は無文で、直下に縄文が施されている。24は、やや直立気味の口縁部に、横位沈線１条と、その下部に縦位区画の一部と考えられる厂型の沈線と、区画内部に付加条縄文が施文されている。25は、無文の縦位区画と縄文の施される縦位区画が認められる胴部破片で、区画は隆帯でなされているが、縄文の施文が隆帯部分まで及んでいる。26は、隆帯の内部に縄文、外部は無文となる胴部破片で、隆帯は弧状部分が残存している。隆帯の両脇には、浅くやや幅の広い沈線が施されている。

c類（28～31）

その他、不明の物を一括した。28は横位に隆帯、その下部に縄文が施される深鉢形土器の胴部破片である。29は、横位に隆帯、その下部が無文となる深鉢形土器の胴部破片と考えられる。30は、口縁部に横位２本の粘土紐と、その上部に直行する縦位の粘土紐２本、その下部に縄文を施す深鉢形土器である。口縁部端は面取りされて、内面は比較的丁寧に調整し、口縁部の形状を整形しているようである。30は、深鉢形土器の把手部分と考えられる。器面への取り付けは、上下左右に橋状に行われており、平面形態は、上下に粘土帯が弧状に取り付けられて、一見耳状に見える。表面一面に径２㎜程の棒状工具による刺突が施されている。

第Ⅳ群　後期前葉の土器（図11－32～34）

a類（32・33）

いずれも深鉢形土器の胴部破片である。32は、淡黄色を呈し、沈線で区画された内部に縄文が施文されている。区画は、丁部分が観察できる。縄文施文部分は盛り上がっており、無文部分は磨かれている。33は、銛状に沈線で区画された内部に縄文を施している。器壁は薄く、また焼成も良く、硬質である。外面無文部分及び内面は丁寧に磨かれて平滑になっている。２点とも後期初頭の称名寺式土器と考えられる。

b類（34）

深鉢形土器の口縁部破片で、貼付文と紐線文がみられる。口縁部は、直線的に立ち上がっている。堀之内式土器と考えられる。

第Ⅴ群　後期中葉の土器（図11～13－35～113・126）

a類（35～70、81～89、91～96）

沈線と磨消縄文で施文されている深鉢形土器及び鉢形土器である。ほとんどの土器において横位の縄文帯と無文帯で構成され、縄文は磨消縄文となるものが多く、無文帯及び内面は丁寧に磨かれているものがほとんどである。精製土器である。さらに、文様構成で細分される。

a－１種（35～41）

横位の沈線と、磨消縄文で構成され、口縁端部は無文となる口縁部。いずれも深鉢形土器になると思われる。35～38の口縁部は内側へ屈曲するが、40・41は屈曲を持たず、全体的に緩く内湾している。35～40は波状口縁、41は平縁となる。35・36の沈線先端は、上下方向に曲がり、鉤状を呈している。40の沈線は、４本密接して施文される。内面にも文様がみられるものがあり、35・36は口縁端部屈曲の内側に沿って沈線１条が、また38には、棒状工具による刺突が、1.5～1.1cm

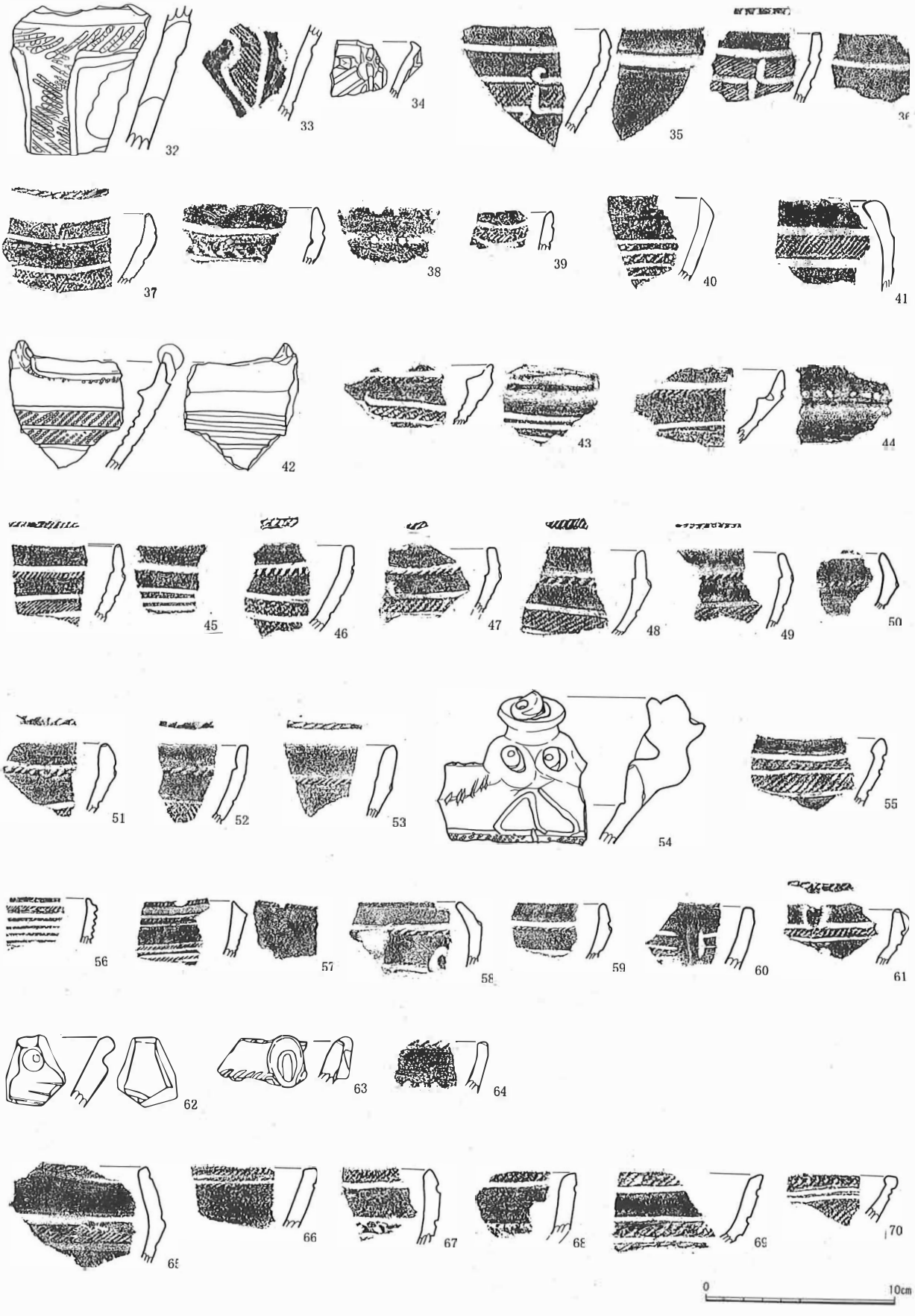

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
0
10cm

図11　出土土器２

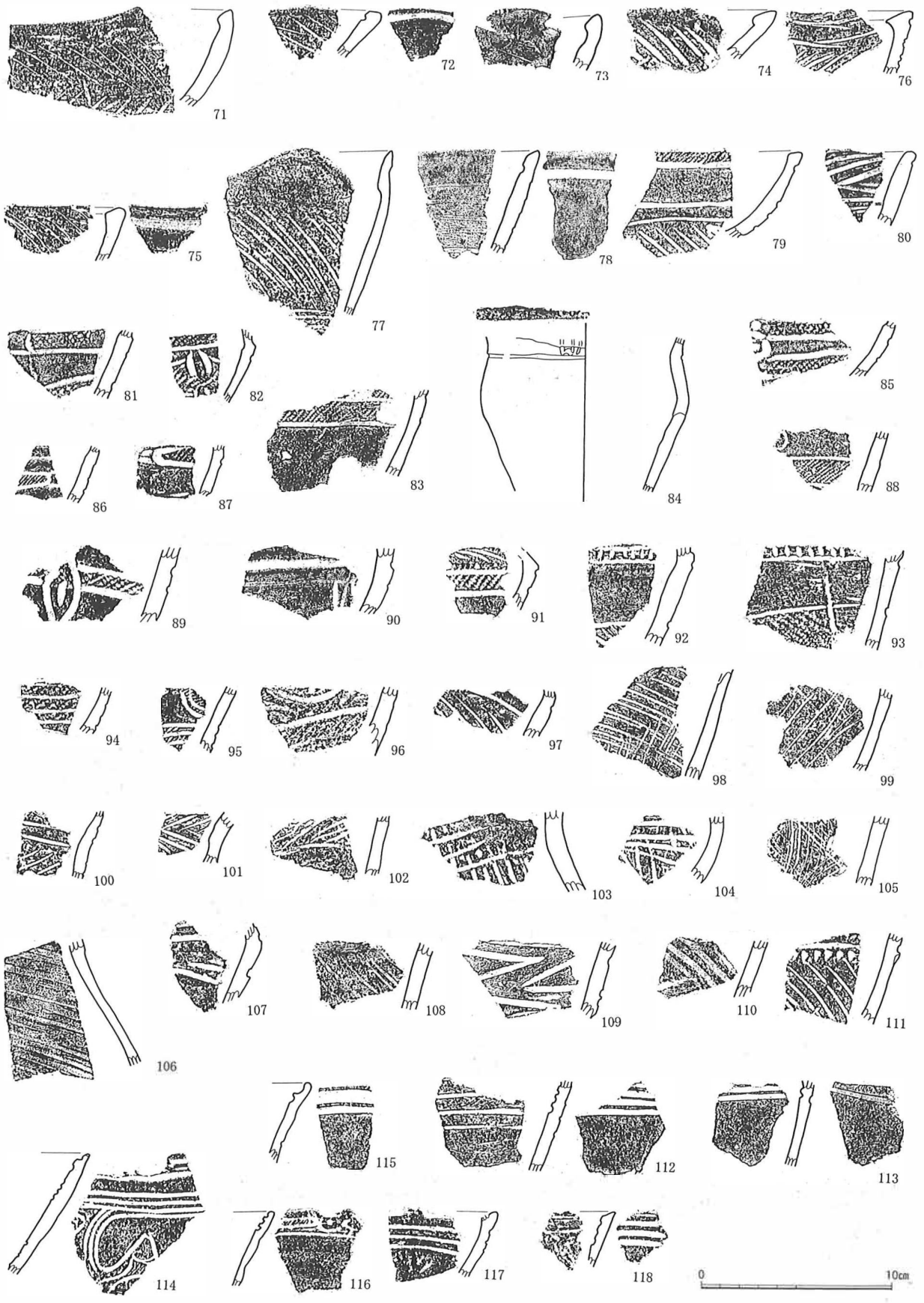

71
72
73
74
76
75
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
115
112
113
114
116
117
118
0
10cm

図12　出土土器３

の間隔で施されている。また、口縁部端に押圧が見られるものがあり、36は棒状工具による押圧、37は施文面が荒くなり、あまりはっきりしないが、内部に粒々が確認できるので、縄文の使用による押圧かもしれない。器壁は内外面ともに丁寧に磨かれていると考えられるものがほとんどだが、36・38の表面は風化が進んでいる。39は、色調が白色を呈して、やや異質である。また、40・41は胎土と焼成の特徴も似ており、また色調も赤色系統を呈しやや異質である。35～39は加曽利Ｂ１～Ｂ２式土器と考えられるが、40・41は、八王子式（向坂1986）に類するものか、と思われる。

ａ－２種（42～54）

横位の沈線と、磨消縄文で構成され、口縁端部は無文であり、口縁部屈曲部に刻みを有する口縁部。いずれも深鉢形土器であると思われる。口縁部は、42・45～49、51～53は波状口縁となり、43・44は口縁端部が小さな波状となっている。42には円形の突起が付される。口縁内面には、42・43・45には密接した沈線、47～49、51・52には、口縁部屈曲部に沿った沈線が１条みられる。46・53は、口縁屈曲部に沿う位置が僅かに窪む。42～44の口縁部内面には、断面三角形の突起が巡っている。また、44にはその突起の上面には刺突がほどこされる。54は、口縁波頂部に突起が付されている。これらはいずれも器面は丁寧に磨かれている。加曽利Ｂ１～Ｂ２式土器と考えられる。

ａ－３種（55）

横位の沈線と、磨消縄文で構成され、口縁端部は無文であるもの。55の１点で、口縁部は屈曲しない。深鉢形土器と思われる。硬質であり、器面は磨かれているがざらざらとした感触である。ａ－２種とはやや異なる様相である。

ａ－４種（56～64）

口縁部が内湾する傾向が強い口縁部で、加曽利Ｂ式土器の鉢形土器と思われるものをまとめた。すべて内面は無文である。横位の沈線と、沈線間を埋める刻みあるいは縄文で構成される。56・57は、密接した沈線が施文され、沈線間に非常に細かな刻みが施されている。口縁端部は外削ぎ状で、その面上にも施文がされている。加曽利Ｂ１式と考えられる。58・59は、ａ－２種の文様構成を示すが、口縁部が内湾する傾向が強いもの。内面は無文である。60は、横位の沈線を縦に区切る括弧状の沈線文が施される。58～60は、加曽利Ｂ２式と考えられる。61は、口縁部に粘土が添付されている。口縁端部には刻み、沈線間には縄文が施されている。62は、口縁部に円形の刺突が施されている。器面には赤色顔料が確認できる。器壁は厚く、また胎土も粗く、やや異質な感がある。63は、口縁部に円形に粘土が添付されている。口縁端部と円形粘土の下には刻みが施される。64は、口縁端部及び口縁部に刻みが施されている。胎土は軟質で、色調は赤色系統を呈する。ａ－１種の40・41と似た特徴である。器面の磨きは丁寧に行われている様子が観察できる。61～64は、加曽利Ｂ２～Ｂ３式と考えられる。

ａ－５種（65～70）

横位の沈線と、磨消縄文で構成され、口縁端部も磨消縄文が施される口縁部。いずれも深鉢形土器と思われる。65は、口縁部が逆くの字型に屈曲している。67は、沈線間に刺突が施されている。69は、口縁部がゆるく逆Ｌ字型に屈曲しているようである。70は、口縁端部に刻みが施され、口縁端部は玉縁状となる。いずれも器面は丁寧に磨かれており、焼成も良好である。65～69は、加曽利Ｂ２～Ｂ３式併行、70は、曽谷式の文様構成をとる。

ｂ類（71～80）

矢羽状沈線あるいは斜沈線が施される口縁部。いずれも深鉢形土器と思われる。71～77は、波

状口縁となり、78～80は平縁となる。71・74・80は矢羽状沈線、72・73・75～79は斜沈線が観察できる。76は、口縁端部に沿った沈線が施されている。79は、口縁端部に縄文が施されている。また、横位の沈線もあり、ａ－５種の65～69と同じ様相を示す。72・78の口縁部内面には、沈線が施されており、71・73～77は、口縁部内面が張り出している。器壁は71～79は、丁寧に磨かれているが、80は磨かれていない。いずれも、加曽利Ｂ２～Ｂ３式と考えられる。

ｃ類（81～96）

横位の沈線と、主に磨消縄文とで構成される胴部。ほとんどが深鉢形土器になると思われるが、86～88・90・94は鉢形土器になる可能性がある。91・92は、いわゆる算盤玉形深鉢になると思われる。81・83～90は、横位沈線を横切る区切り文が施されているもので、鉤状（85～87）、弧線状（81）、括弧状（82・89・90）を呈している。88は、円文が施されているようである。92・93は、横位の沈線と刻みまたは押圧が見られるもので、92には斜沈線、93には磨消縄文と、磨消縄文を切るように縦位の沈線が施されている。94・95は、密接した沈線と磨消縄文で構成されるもので、95は弧状となる部分も見られる。94は、胎土がやや軟質で赤色系統を呈し、40・41・64に似た特徴である。96は、胴部下半以下と思われるもので、地文縄文のようである。沈線は横位と弧状になる部分が観察される。81～91は加曽利Ｂ１～Ｂ２式と考えられる。92・93に関しては不明、94・95は八王子式に類するものと思われ、96は、曽谷式かと思われる。

ｄ類（97～111）

矢羽状沈線あるいは斜沈線が施される頚部～胴部。一部は、口縁部に入るかと思われるもの（97・104）も含む。沈線は、矢羽状沈線（98・99・101・103・104・109・110）、斜格子状になるもの（105）、斜沈線（97・100・102・106～108・111）がある。斜沈線になるものは、横位の沈線を伴うものがほとんどで（97・100・102・111）、111には、沈線の下に刻みが施されている。いずれも、加曽利Ｂ２～Ｂ３式と思われる。

ｅ類（112・113）

沈線のみで構成されるもの。深鉢形土器の胴部かと思われる。内面は密接した沈線、外面は、斜沈線となる。内面の沈線は彫りが深くはっきりとしているが、外面の沈線はやや浅い。器壁は内外面とも丁寧に磨かれており、平滑である。堀之内Ⅱ式～加曽利Ｂ１式併行ものかと思われる。

ｆ類（126）

その他のもの。突起部分と思われる。円形の彫りこみ等がみられる。

第Ⅵ群　後期後葉の土器（図13－131～139）

ａ類（131・132）

波状口縁で、波頂部に縦方向の無文の瘤が貼付されているもの。131は、口縁部に帯縄文がみられる。132は、内面にも縦方向の瘤が貼付されている。安行１式と考えられる。

ｂ類（133～137）

平口縁で、帯縄文であるもの。133・134には、縦方向の瘤がみられる。133の瘤には、横方向の刻みが施されている。133・134は、安行２式と考えられる。135～137は、横位の帯縄文がみられるものである。

ｃ類（138）

波状口縁で、波頂部が３つに分かれている。また、波頂部下には、三角印刻文が施されている。他の本群のものとは、胎土の特徴が異なる。色調が白色系統を呈し、多量の砂が混入されている。

d類（139）

安行式土器の深鉢形土器胴部と考えられるもの。帯縄文と縦位の条線が密接に施文されている。

第Ⅶ群　その他のもの（図13—140～186）

第Ⅰ～Ⅶ群に分類されないものを一括した。無文・粗製土器、底部も含む。

a類（140～144、152・154）

肥厚した口縁部に文様を描くもので、後期前半から中葉にかけての東海西部以西に分布する縁帯文系土器群に類するものか、と思われる。

140は、口縁部が肥厚し、その部分に縄文が施文されている。

141は、口縁端部が肥厚し、その部分に深くはっきりした沈線と、沈線間に刻みが施されている。

142は、口縁部に横位の沈線と、列点状に刺突がみられるもの。あまり明確ではないが、口縁部内面にも、横位の沈線がみられる。

143は、非常に肥厚した口縁部外面に列点状に沈線が施されている。口縁端部は、平らに整形されている。144は、断面形態が143によく類似する口縁部で、波状口縁になると考えられる。口縁部外面には、深くはっきりとした沈線と、沈線間と口縁端部に刺突がみられる。

152は、波状口縁で、列点状に沈線が施文されている。

154は、胴部破片で、格子状の沈線と、隆帯が認められる。

b類（145～151・153）

沈線というより凹線に分類されるものか、と考えられるものを一括した。後期後半に東海西部以西に分布する凹線文系土器群か、と思われる。

145・146は、平口縁で横位の凹線が施文されている。147～150は、波状口縁で、147には隆帯状から口縁端部にかけて円形の刺突がみられる。147・148は口縁部が逆くの字に屈曲し、胎土的特徴もよく似ている。149は非常に浅い凹線で、円形刺突がみられる。内外面とも平滑になでられている。150は、幅が広く浅い凹線が施されている。151は、口縁端部に沿って、浅い凹線が施されている。

153は、胴部破片である。巻貝の回転押捺によると思われる疑似縄文と沈線が施されている。焼成は良好で硬質である。

c類（155～157）

口縁部に、横位の沈線と斜方向の沈線がみられるもの。155は、口縁部が逆くの字に屈曲し、内面に粘土積み上げの際の調整痕が残されている。157は、口縁部に屈曲はみられない。また、内面は丁寧に磨かれている。

d類（158～160）

158は、胴部に矢羽状沈線が施されているもので、胎土に砂粒を多量に含んでいる。清水天王山式か、と思われる。159・160は、密接した沈線を横位に施すもので、159は口縁部、160は、壺形土器あるいは注口土器の胴部と考えられる。晩期のものか、と思われる。

e類（161～164・170・171）

その他不明のものを一括した。

161は、幅の広い縄文施文帯を口縁部に持つもので、口縁部は大きく外反している。口縁端部には、突起部分がある。内面は丁寧に磨かれている。加曽利B式併行か、と思われる。162は異形台付土器の台部か、と思われる。地文縄文で、沈線で文様が描かれている。163は蓋か、あるいは波状口縁の口縁部かと思われる。口縁端部に沈線1条が施されている。164は口縁部で、地文縄文に、

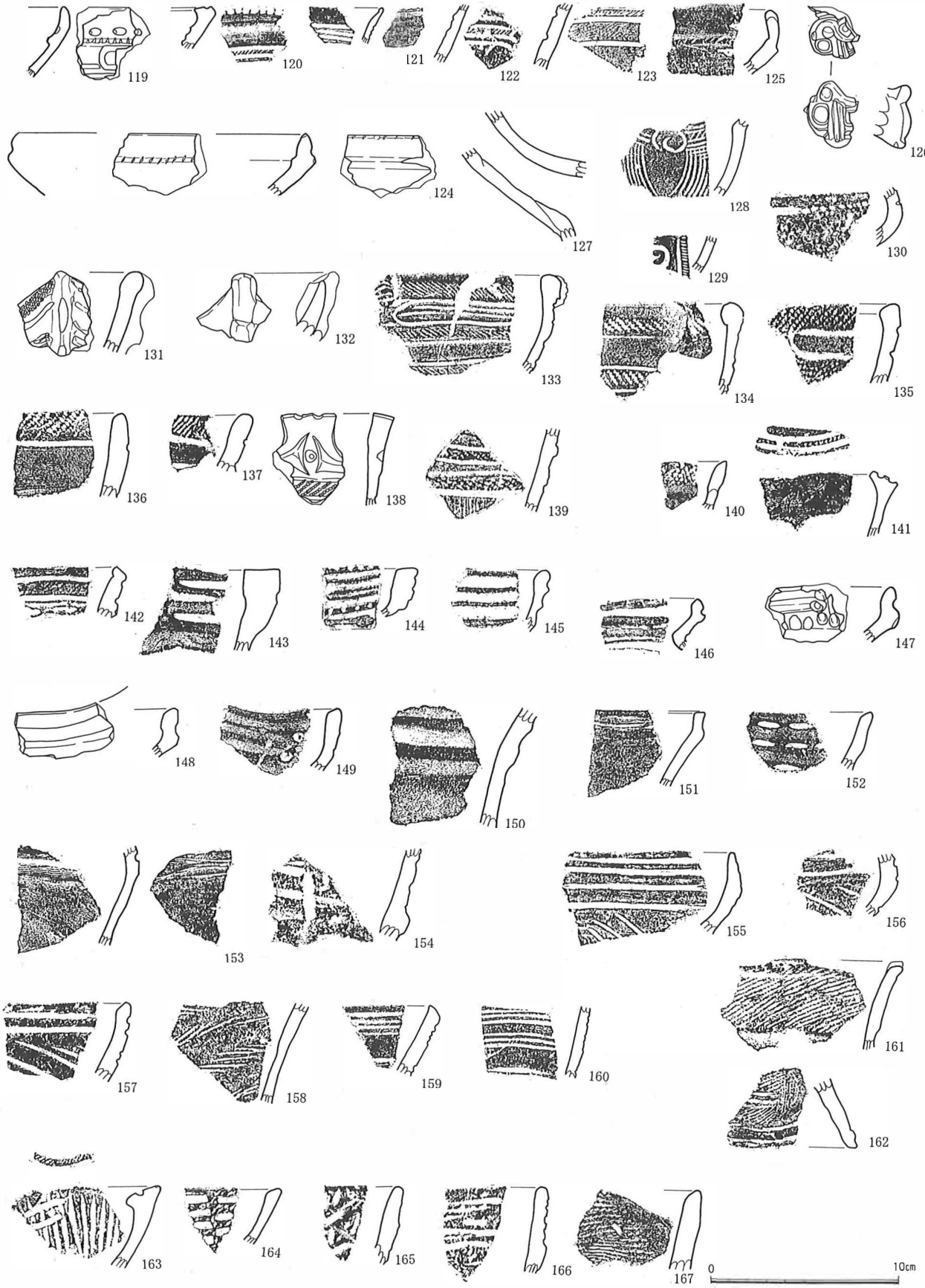

119
120
121
122
123
125
126
124
127
128
130
129
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
0
10cm

図13　出土土器4

列点状に横位の沈線が施されている。170は、波状口縁の口縁部で、口縁に沿った沈線と、縦位の沈線が施されている。波頂部から左右の口縁端部には、沈線とその先端による刺突が施されている。171は、竹管状の工具による沈線がみられるもので、内外面とも磨かれている。

g類（165～169）

粗製土器と思われるものはを一括した。165は、付加条縄文が施文されている深鉢形土器口縁部である。166は、沈線が、擦痕状に荒く施されている深鉢型土器口縁部である。167は、縄文が施されている深鉢形土器口縁部である。168は、横位に擦痕状の条線がみられる深鉢形土器口縁部で、内面に沈線が施されている。169は、斜位に擦痕状の条線がみられる深鉢形土器頚部で、頚部はくびれている。内面は丁寧に磨かれている。

h類（172～183）

無文の土器を一括した。172は、壺形土器の口縁部と考えられる。173は、壺形土器の頚部で、屈曲部に横位に沈線が２条施されている。174は、壺形土器の頚部かと思われる。頚部に隆帯、その下に刺突列を沈線で囲った文様が描かれている。175は、壺形土器の口縁部と考えられる。口縁部内外面に沈線が施されている。176は、大きく開く口縁部から、浅鉢形土器かと考えられる。内外面とも丁寧に磨かれ、口縁部内外面に沈線が施される。177は、直線的に立ち上がる口縁部で、口縁部外面に隆線が表出されている。深鉢形土器と考えられる。内面には、沈線とまでは明確ではないが、浅いくぼみが横位に巡っている。内外面とも丁寧に磨かれている。178は、口縁部で、隆線で区切られた文様帯に穿孔がなされている。隆線は、内面にも２条施されている。179・180は、口縁部の隆線上に指頭圧痕状の押圧がみられるもので、頚部はくびれ、甕形土器状になると考えられる。堀之内式土器に類するか、と考えられる。181は、無文の深鉢形土器である。口縁端部に指頭圧痕状の押圧がみられる。182は、口縁部に横位に刺突が巡っている。内外面ともなでられている。183は、無文の深鉢形土器である。

i類（184・185）

底部を一括した。底部には、網代痕がみられる。いずれも、内面は丁寧に磨かれている。

a－2　浅鉢形土器（図12・13—114～125）

浅鉢形土器を一括した。後期中ごろの、堀之内２式～加曽利Ｂ１式にかけてのものと思われる。

114～118は、口縁部は底部からほぼ直線的に立ち上がっている。114～116は内面に文様が、117は外面に、118は内外面に文様が施される。114は、横位の沈線から鉤状に沈線を流下させているのが確認できるが、全体の構成は不明である。その先端部分には、縄文がみられる。口縁端部には指頭圧痕状のくぼみがみられる。115は、深くはっきりとした沈線２本が施文されている。116は、口縁部に凹んだ部分があり、横位沈線の中に、円形の刺突を持つ。117は、口縁端部が一部突出している。118は、径が狭く、小型品かと思われる。

119～124は、横位の沈線と沈線間を縄文あるいは刻みで埋めるものと、口縁部が屈曲する。いずれも、加曽利Ｂ１式のものと思われる。119は、口縁部内面に突帯が巡るもので、沈線と、刺突・刻みがみられる。外面は無文である。120は、口縁部内面に横位の沈線と刻みが施されるもので、口縁端部に刺突が見られる。121は、口縁部外面に横位の沈線と縄文がみられるもので、器壁は非常に薄く、径も狭いと考えられ、小型品か、浅鉢形土器ではない可能性もある。122・123は、内面に横位の沈線と刻み・縄文がみられる。124は、屈曲部内面に突帯が見られるが、その両脇を押さえることによって突出させている。125は、口縁が小波状となる。屈曲部内面には、沈線が施さ

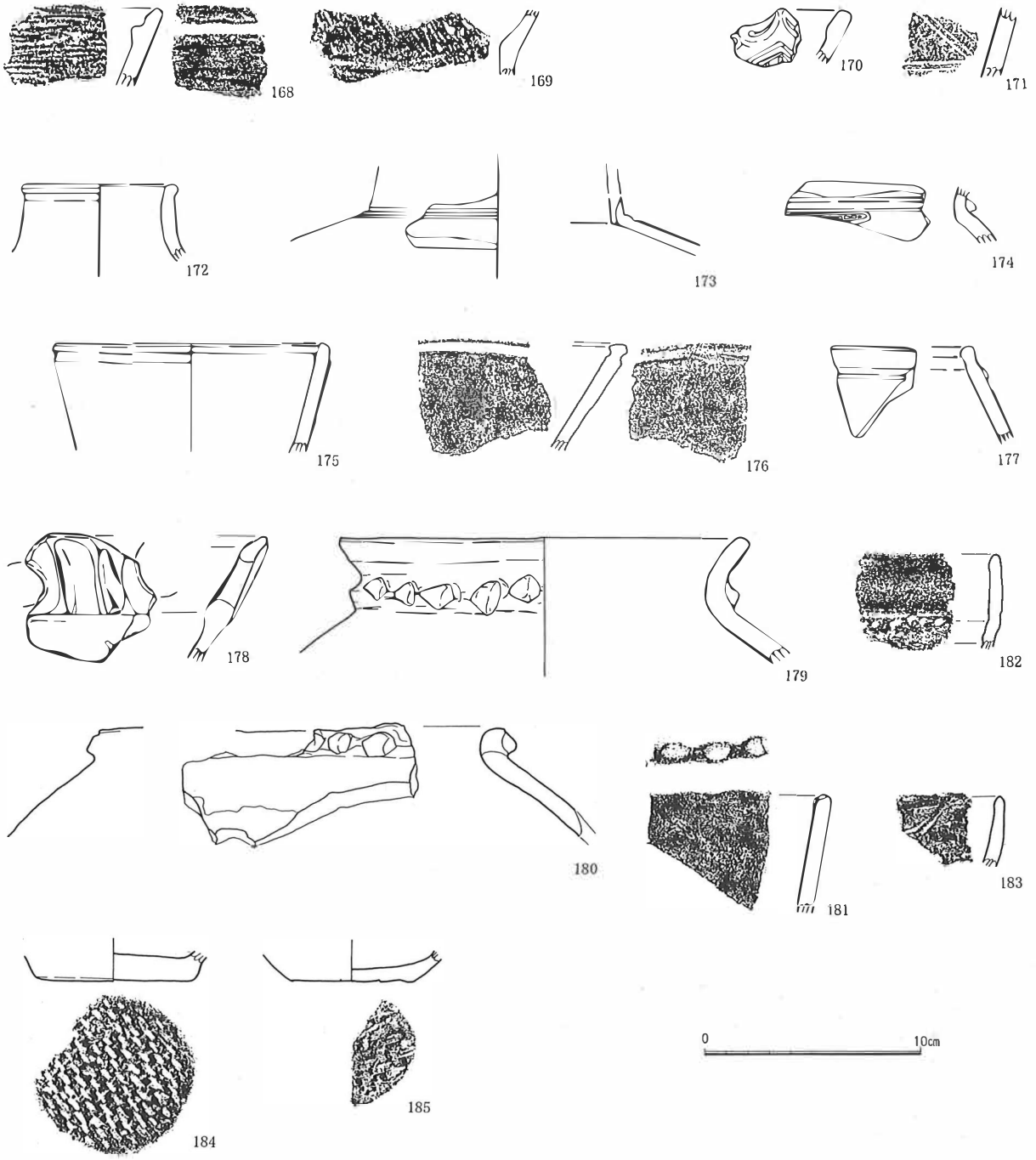

168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
10cm

図14　出土土器５

れている。124・125とも、屈曲部外面には刻みが施される

a－3　注口土器（図13—127～130）

127は注口部のみである。128は、密接した沈線で文様を描いている。頚部には横位の沈線と逆の字文がみられる。沈線間には、刻みがみられる。129は、沈線と刻み、彫りこみがみられる小破片である。130は、胴部に屈曲を持つもので、横位の沈線内に、右斜め方向からの連続刺突がみられる。

b．土製品（186～200）

土器片円盤（186～196）、円盤状ではなく、土器片錘に近い形状をもつもの（197・198）、不整形で、加工痕がみられるもの（199・200）がある。

土器片円盤は、整形技法によって分類でき（馬飼野1997）、本遺跡では、Ⅰ類の打ち欠きによるものは、188・189・192・195の４点、Ⅱ類の打ち欠き後一部研磨によるものは、191の１点、Ⅲ類の打ち欠き後周縁研磨によるものは、186・187・190・191・193・194・196の７点となる。Ⅲ類が最も多い。富士宮市滝戸遺跡ではⅠ類が最も多く、同じ丘陵上に立地する遺跡であるが、様相を異にしている。また、法量は、186～192のより大振りなもの、とより小ぶりな193～196がある。平均値は前者が縦約3.7cm×横約3.9cm、厚さ約1.0cm、重さ17.6ｇ、後者が縦2.8cm×横約3.0cm、厚さ1.0cm、重さ8.4ｇである。

197・198は、平面形態が長方形であるが、縄掛けの刻みはみられない。滝戸遺跡の土器片錘は、平均値が、長さ約4.1cm、幅約3.4cm、厚さ約1.0cm、重さ約17.8ｇと計測されている。土器片錘の範疇内であろうか。

199・200は、いずれも、周縁に研磨痕が確認できるが、形状は不整形のままである。用途は不明である。

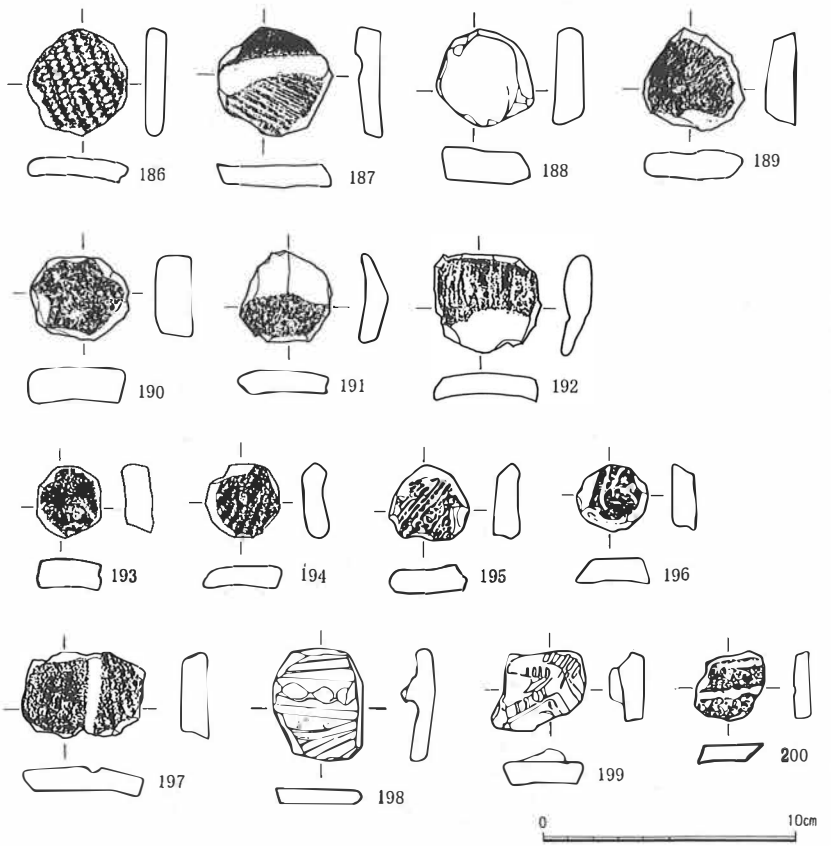


図15　出土土製品

〈参考文献〉

中部高地縄文土器集成グループ　1979『中部高地縄文土器集成』

安孫子昭二他　1981『縄文土器大成』3　後期

加藤晋平他編『縄文時代の研究』4

東伊豆町教育委員会　1996『宮後遺跡第4次調査』

清水市教育委員会　1990『冷川遺跡』

富士宮市教育委員会　1997『滝戸遺跡』

富士宮市教育委員会　1993『富士宮市の遺跡』

東京都埋蔵文化財センター　2004『千代田区外神四丁目遺跡』第4分冊

浜松市教育委員会　1985『蜆塚遺跡Ⅴ・Ⅵ』

戸沢充則編　1994『縄文時代研究辞典』

表2　縄文土器観察表1

番号	出土区	名　称	部位	型式名	厚さ(底径)	色　調(外・内)	胎　土	焼成	文　様	備　考
1	深堀	深鉢形土器	口縁		0.9	にぶい黄褐・にぶい黄褐	粗(英・長微、有、繊)	普通	沈線、刺突	波状口縁
2	B－3	深鉢形土器	口縁	北屋敷	0.6	にぶい橙・にぶい橙	やや密(英・長少、金雲)	良	爪形押引文	
3	南区深堀り	深鉢形土器	口縁	北屋敷	0.5	明黄褐・明黄褐	粗(英・長少、有少、砂多、赤)	良	押引	
4	北区表土中	深鉢形土器	胴	勝坂式併行	1.0	明赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長多、有、砂)	良	押引(爪状、三角状)	
5	A－1	深鉢形土器	胴	勝坂	0.9	にぶい赤褐・にぶい褐	粗(英・長多)	普通	隆帯、条線	
6	南区	深鉢形土器	胴	勝坂	0.8	にぶい橙・黒	粗(英・長、有、砂)	普通	楕円区画文	
7	南区	深鉢形土器	胴	勝坂	0.7	橙・灰褐	粗(英・長少、有多)	普通	隆帯、縄文RL、刺突	
8		深鉢形土器	頸	曽利	1.6	にぶい褐・にぶい橙	粗(英・長、有、砂)	普通	波状隆線	
9	B－2	深鉢形土器	口縁	曽利	0.9	褐・浅黄	粗(英・長多、有、砂)	普通	沼曲文、波状隆線	
10	北区表土中	深鉢形土器	口縁	曽利	1.6	にぶい褐・浅黄	粗(英・長多、有、金雲)	普通	隆帯(渦巻きつなぎ文)	
11	南区	深鉢形土器	口縁	曽利	0.5	にぶい橙・にぶい黄橙	粗(英・長、砂)	良	隆帯(渦巻きつなぎ文)	
12	B－1	深鉢形土器	口縁	曽利	1.2	にぶい赤褐・灰褐	粗(英・長多、有、金雲、砂)	普通	隆帯(渦巻きつなぎ文)	
13	C－1	深鉢形土器	口縁	曽利	1.6	にぶい赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長多)	良	隆帯(渦巻きつなぎ文)	
14	北区耕作土中	深鉢形土器	口縁	曽利	0.6	にぶい赤褐・明赤褐	粗(英・長、有)	良	隆帯、条線	
15	B－3	深鉢形土器	口縁	曽利	1.4	黒褐・にぶい黄褐	粗(英・長多、有少、砂)	普通	沈線、連八文	
16	南区	深鉢形土器	胴	曽利	0.9	にぶい赤褐・にぶい褐	粗(英・長)	普通	隆帯、刻目、条線	
17	B－1	深鉢形土器	胴	曽利	1.1	にぶい褐・灰褐	粗(英・長、有多)	普通	隆帯懸垂文、縄文LL	
18	B－3	深鉢形土器	胴	曽利	1.1	赤褐・明赤褐	粗(英・長、有、砂)	普通	隆帯・刺突	
19	B－2	深鉢形土器	胴	曽利	1.1	明赤褐・明赤褐	粗(英・長多、有少、金雲、砂)	普通	隆線、連八文	
20	南区	深鉢形土器	胴	曽利	1.2	明赤褐・明褐	粗(英・長多、有少、砂)	普通	沈線、連八文	
21	北区耕作土中	深鉢形土器	胴	曽利	0.7	赤黒・にぶい赤褐	粗(英・長多、有、金雲)	普通	綾杉縄文	
22	南区	深鉢形土器	口縁	加曽利E系	1.2	橙・橙	粗(英・長多、有少、砂)	やや不良	隆帯、無節縄文L	
23	B－3	深鉢形土器	口縁	加曽利E系	1.0	にぶい黄褐・にぶい黄橙	粗(英・長多、有)	普通	縄文RL	
24	南区	深鉢形土器	口縁	加曽利E系	0.8	灰褐・褐	やや密(英・長少、有)	普通	沈線、付加状縄文LR－LR	
25	B－2	深鉢形土器	胴	加曽利E系	1.5	赤褐・赤褐	粗(英・長、有、砂)	普通	隆帯、縄文LR	
26	B－3	深鉢形土器	胴	加曽利E系	1.1	明黄褐・明赤褐	粗(英・長少、有、砂多)	普通	沈線、縄文RL	
27	C－2	深鉢形土器	胴	加曽利E系	1.0	明褐・黒	粗(英・長多、有)	普通	沈線、縄文LR	
28	南区	深鉢形土器	胴	加曽利E系	1.0	橙・橙	粗(英・長多、有少、金雲)	普通	隆帯、縄文R	
29	B－3	深鉢形土器	胴	曽利系	1.2	橙・橙	粗(英・長多、有、砂)	普通	隆帯、擦痕	
30	南区	深鉢形土器	口縁	加曽利E系	0.8	にぶい橙・にぶい黄褐	やや密(英・長少)	普通	粘土帯添付、縄文LL	
31	B－3		把手		0.7	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長、有、砂)	良	刺突	
32	B－2	深鉢形土器	胴	称名寺	1.2	淡黄・灰黄	粗(英・長、有、金雲、砂)	普通	帯縄文R	
33	北区耕作土中	深鉢形土器	胴	称名寺	0.7	褐灰・灰褐	やや密(英・長、有)	良	沈線、磨消縄文LR	
34	C－2	深鉢形土器	口縁	堀之内	0.5	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長、有、金雲、砂)	普通	沈線、貼付文	
35	深堀	深鉢形土器	口縁	加曽利B	0.6	黒褐・黒褐	密(英・長、有少、金雲)	良	沈線(鈎状)、縄文LR、内面沈線	波状口縁
36	深堀り	深鉢形土器	口縁	加曽利B	0.5	橙・橙	粗(英・長微、有、砂)	良	沈線(鈎状)、縄文LR、押圧、内面沈線	波状口縁
37	C－1	深鉢形土器	口縁	加曽利B	0.6	黒褐・黒褐	やや密(英・長少、有、砂?)	良	沈線、縄文LR、刻み	波状口縁
38	C－3	深鉢形土器	口縁	加曽利B	0.7	橙・橙	粗(英・長、有、砂、赤)	良	沈線、縄文LL?、内面刺突	波状口縁、表面摩耗
39	北区表土中	深鉢形土器	口縁	加曽利B?	0.6	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長少、有多、金雲)	やや不良	沈線、縄文LR?	波状口縁、表面摩耗
40	B－2	深鉢形土器	口縁	八王子?	0.7	にぶい赤褐・暗赤灰	やや密(英・長少、有少)	良	沈線・縄文LR	波状口縁

表３　縄文土器観察表２

番号	出土区	名　称	部位	型式名	厚さ(底径)	色　調(外・内)	胎　土	焼成	文　様	備　考
41	Ｂ－１	深鉢形土器	口縁	八王子？	0.5	赤褐・赤褐	密(英・長少、有)	良	沈線、縄文LR	
42	Ｃ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.9	黄橙・褐	やや密(英・長少、有少、金雲)	良	沈線、縄文LR、内面沈線	波状口縁
43	Ｂ－３	深鉢形土器？	口縁	加曽利Ｂ	0.6	灰褐・灰褐	やや密(英・長少、有)	良	沈線(鉤状)、縄文RL、内面沈線	口縁端部波状
44	表採	深鉢形土器？	口縁	加曽利Ｂ	0.5	黒・極暗赤褐	粗(英・長、有)	良	沈線、刻み、内面刺突	口縁端部波状
45	Ｂ－３	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	にぶい赤褐・橙	粗(英・長、有)	良	沈線、縄文LR、刻み、内面沈線	波状口縁
46	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	黒褐・暗赤褐	粗(英・長多、有)	良	沈線、縄文LR、刻み	波状口縁
47	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.5	明赤褐・暗赤褐	やや密(英・長、有少)	良	沈線、縄文LR、刻み	波状口縁
48	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.5	にぶい赤褐・にぶい褐	粗(英・長多、有、砂)	良	沈線、縄文LR、刻み	波状口縁
49	Ｃ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	橙・橙	やや密(英・長、有)	良	沈線、縄文LR、刻み	波状口縁
50	北区深堀内	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	明赤褐、にぶい赤褐	粗(英・長、有、砂)	普通	沈線、刻み	
51	北区表土中	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	にぶい赤褐、にぶい橙	やや密(英・長少、有)	良	沈線、縄文LR？、刻み	波状口縁
52	Ｂ－３	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	明赤褐・明赤褐	やや密(英・長少、有、砂)	良	沈線、縄文LR、刻み	波状口縁
53	Ｂ－３	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	褐灰・褐灰	粗(英・長、有)	良	刻み	波状口縁
54	Ａ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	1.0	にぶい黄橙・にぶい橙	粗(英・長、有多、金雲多)	普通	沈線、縄文LR、把手	
55	北区耕作土中	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ並行	0.5	にぶい褐・にぶい黄橙	粗(英・長、有多、砂)	良	沈線、縄文LR	波状口縁
56	Ｃ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.5	橙・橙	粗(英・長微、有、砂)	良	沈線、刻み	
57	Ｃ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	にぶい黄橙・にぶい黄橙	密(英・長微、有少)	良	沈線、刻み	
58	南区	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	にぶい褐・にぶい褐	やや密(英・長少、有)	やや不良	沈線(丸文)、刻み	
59	Ｃ－３	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	にぶい橙・灰褐	やや密(英・長少、有)	良	沈線・刺突	波状口縁
60	Ｃ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	明赤褐・明赤褐	やや密(英・長微、有多)	良	沈線(括弧状)、縄文？	
61	Ｂ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	にぶい橙・にぶい赤褐	やや密(英・長少、有少)	良	沈線、縄文LR、刻み、貼付文	
62	Ｂ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ？	1.1	にぶい橙・浅黄橙	粗(英・長多、有、金雲)	やや不良	沈線、条線、刺突	内面赤彩
63	Ｂ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	浅黄橙・浅黄橙	粗(英・長、有少、砂)	普通	隆帯(円文)、刻み	
64	Ｂ－２	鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.5	赤褐・極暗赤褐	やや密(英・長少、有少)	良	刻み、刺突	
65	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	明赤褐・赤褐	粗(英・長多、有、金雲、砂少)	良	沈線、縄文RL	
66	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	暗赤褐・暗赤褐	粗(英・長多、有多)	良	沈線、縄文LR？	
67	溝状遺構	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	明赤褐・赤褐	粗(英・長、有少、砂)	良	沈線、縄文RR、刺突	
68	Ａ－１	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	にぶい褐・にぶい褐	粗(英・長、有、金雲)	良	沈線、縄文LR	
69	Ｂ－３	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	にぶい黄褐・明黄褐	やや密(英・長少、有多)	良	沈線、縄文RR	
70	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	曽谷？	0.6	黄褐・灰黄褐	粗(英・長、有)	良	沈線、地文縄文LR、刻み	
71	Ｃ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	橙・橙	密(英・長、有少、砂)	良	矢羽状沈線	波状口縁
72	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	明赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長少、有多)	良	斜沈線、内面沈線	波状口縁
73	Ｃ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.9	橙・橙	粗(英・長少、有少、砂)	良	斜沈線	波状口縁
74	表採	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	褐・橙	やや密(英・長微、有多)	優良	矢羽状沈線	波状口縁
75	溝状遺構	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	にぶい赤褐・灰褐	粗(英・長多、有)	良	斜沈線	波状口縁
76	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	橙・明黄褐	粗(英・長多、有少、砂)	良	斜沈線	波状口縁
77	Ｄ－１	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	黒褐・黒褐	密(英・長少、有少、砂？)	良	斜沈線	波状口縁
78	Ａ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	黒・黒	粗(英・長少、有、砂)	良	沈線、斜沈線か	
79	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.6	にぶい赤褐・褐	粗(英・長、有、砂)	良	沈線、縄文LR、斜沈線	
80	北区表土中	深鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.9	にぶい赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長多、有多)	良	矢羽状沈線	
81	北区耕作土中	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	にぶい赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長多、有、砂)	良	沈線(弧線状)、縄文LR	
82	Ｃ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.5	にぶい黄橙・にぶい黄褐	粗(英・長、有、砂)	良	沈線(括弧状)、縄文LR	外面煤付着
83	Ｂ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.6	褐・褐	粗(英・長、有、砂)	良	沈線、縄文RR	
84	深堀	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	褐・黒褐	粗(英・長)	良		
85	Ｃ－２	鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.6	黄灰・灰黄褐	粗(英・長多、有、金雲)	良	沈線(鉤状)、縄文LR	
86	Ｄ－３	鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.5	暗黄灰・黄灰	やや密(英・長少、有)	良	沈線(鉤状)、縄文LR？	
87	Ｂ－１	鉢形土器？	胴	加曽利Ｂ	0.6	にぶい橙・にぶい橙	粗(英・長多、有)	良	沈線(鉤状)、縄文LR	
88	Ｃ－２	鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	灰褐・暗黄灰	粗(英・長多、有、砂)	普通	沈線(円文)、縄文LR	
89	Ｃ－１	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	1.0	明褐・明黄褐	粗(英・長多、有多、砂)	普通	沈線(括弧状)、縄文LR	
90	Ｃ－１	鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.9	明赤褐・暗赤褐	粗(英・長多、有、金雲)	普通	沈線(括弧状)	
91	Ｂ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.6	暗赤褐・赤黒	粗(英・長、有)	良	沈線、縄文LR	
92	Ｃ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	1.0	暗赤褐・明赤褐	粗(英・長、有多、金雲、砂)	良	沈線、刻み、矢羽状沈線か	
93	Ｂ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	明赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長、有、砂)	良	隆線、押圧、沈線、縄文RL	
94	Ｃ－２	浅鉢形土器	胴	八王子？	0.6	赤黒・極暗赤褐	やや密(英・長少、有少)	良	沈線、縄文LR	
95	Ｃ－３	深鉢形土器	胴	八王子？	0.6	にぶい黄橙・にぶい黄橙	やや密(英・長少、有、砂)	良	沈線、縄文LR	
96	Ａ－１	深鉢形or鉢形土器	胴	曽谷？	0.8	にぶい黄褐・明黄褐	粗(英・長多、有多、砂)	普通	沈線、地文縄文LR	
97	Ｃ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.8	にぶい黄橙・浅黄	やや密(英・長少、有、砂微)	良	斜沈線	
98	溝状遺構	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	黒褐・黒褐	粗(英・長多、有)	良	矢羽状沈線	
99	Ｂ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	にぶい赤褐・橙	粗(英・長、有、金雲、砂)	良	矢羽状沈線	

表４　縄文土器観察表３

番号	出土区	名　称	部位	型式名	厚さ(底径)	色　調(外・内)	胎　土	焼成	文　様	備　考
100	Ｂ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.5	にぶい褐・にぶい褐	粗(英・長、有)	良	斜沈線	
101	Ｃ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	黒褐・黒褐	粗(英・長、有、砂)	良	矢羽状沈線	
102	Ｃ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	にぶい黄褐、黒	粗(英・長多、有、砂)	良	斜沈線	
103	Ｃ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.9	灰褐・灰黄褐	粗(英・長、有)	良	矢羽状沈線	
104	Ｃ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	明赤褐・明赤褐	粗(英・長多、有、砂)	良	矢羽状沈線	
105	Ｂ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	明赤褐・橙	粗(英・長、有、砂)	良	格子状沈線	
106	南区	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.6	にぶい橙・にぶい橙	粗(英・長、有、雲)	普通	斜沈線	
107	Ｂ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	明赤褐・明黄褐	粗(英・長、有多)	良	斜沈線	算盤玉状深鉢？
108	Ｂ－２	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.8	にぶい黄橙・灰黄褐	粗(英・長、有、砂多)	良	斜沈線	
109	Ｃ－１	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.8	橙・灰褐	粗(英・長、有多)	良	矢羽状沈線	
110	Ｃ－３	深鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.7	灰褐・黄褐	やや密(英・長少、有、砂)	良	矢羽状沈線	
111	Ｃ－１	深鉢形土器	胴	曽谷？	0.7	灰褐・にぶい褐	粗(英・長、有)	良	斜沈線、刺突	
112	表土中	浅鉢形土器	胴	加曽利Ｂ併行	0.6	褐灰・褐灰	粗(英・長、有、金雲)	良	沈線	
113	北区耕作土中	浅鉢形土器	胴	加曽利Ｂ併行	0.5	橙・橙	やや密(英・長少、有)	良	沈線	
114	北区深堀り	浅鉢形土器	口縁	堀之内	0.7	褐・にぶい黄橙	粗(英・長、有、金雲)	良	内面沈線、縄文Ｌ	
115	Ｃ－１	浅鉢形土器	口縁	堀之内	0.5	にぶい黄橙・黒	やや密(英・長少、有)	良	内面沈線	
116	南区	浅鉢形土器	口縁	堀之内	0.4	にぶい黄褐・灰黄褐	やや密(英・長少、有)	良	内面沈線、刻み、刺突	
117	Ａ－１	浅鉢形土器	口縁	堀之内	0.5	にぶい黄橙・灰褐	粗(英・長、有)	良	沈線、突起	
118	Ｂ－２	浅鉢形土器	口縁	堀之内	0.5	明赤褐・明赤褐	粗(英・長多、有、砂)	普通	沈線、内面沈線、刻み	
119	南区	浅鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.5	暗灰黄・黒	粗(英・長、有、金雲)	普通	内面沈線、刺突、刻み	
120	Ｂ－３	浅鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	黒・黒褐	やや密(英・長少、有)	良	内面沈線、縄文RL？、刺突	
121	北区耕作土中	浅鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.4	黒褐・黒褐	やや密(英・長少、有少)	良	沈線	
122	Ｂ－２	浅鉢形土器	胴	加曽利Ｂ？	0.6	にぶい赤褐・明赤褐	やや密(英・長、有少)	普通	沈線、刻み	
123	Ａ－２	浅鉢形土器	胴	加曽利Ｂ	0.8	にぶい黄橙・灰黄褐	やや密(英・長少、有)	良	沈線、縄文LR、刻み	
124	Ｃ－２	浅鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.8	にぶい橙・	やや密(英・長少、有)	普通	刻み	
125	Ｄ－１	浅鉢形土器	口縁	加曽利Ｂ	0.7	暗赤灰・暗赤灰	やや密(英・長少、有)	良	刻み	
126	Ｂ－４		把手	加曽利Ｂ？	(1.6)	にぶい赤褐	やや密(英・長)	やや不良		
127	Ｂ－３	注口土器	注口	堀之内	0.7―注口径3.1-残存長7.2	浅黄橙	粗(英・長多)	普通		
128	Ｃ－２	注口土器	胴	加曽利Ｂ	0.6	橙・橙	密(英・長少、有少)	良	沈線	
129	Ｂ－２	注口土器？	胴		0.5	明黄褐・褐灰	密(英・長微、有)	良	沈線、刻み	
130	Ｃ－３	注口土器？	胴		0.7	橙・にぶい橙	粗(英・長多、有多)	普通	刺突	
131	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	安行	0.8	黒・にぶい黄橙	粗(英・長少、有)	普通	沈線、帯縄文LL、瘤	波状口縁
132	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	安行	0.7	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長、有、砂)	普通	瘤	波状口縁
133	南区	深鉢形土器	口縁	安行	0.5	明赤褐・明赤褐	やや密(英・長、有)	良	沈線、縄文RR、瘤	
134	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	安行	0.6	明赤褐・明赤褐	やや密(英・長少、有、赤)	良	沈線、縄文RL(帯縄文)	
135	溝状遺構	深鉢形土器	口縁	安行	0.8	橙・橙	粗(英・長多、有)	普通	沈線、縄文LR	
136	表採	深鉢形土器	口縁	安行式	1.0	明赤褐・橙	粗(英・長多、有、砂)	良	沈線、縄文LR	
137	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	安行式	1.0	赤褐・赤褐	粗(英・長多、有多、砂多)	良	沈線、縄文LR	無文部分には赤色顔料
138	北区耕作土中	深鉢形土器	口縁	安行	1.0	灰白・灰白	粗(有、砂多)	普通	沈線、縄文LR、刺突、刻み	
139	Ｄ－２	深鉢形土器	胴	安行式	0.6	にぶい黄褐・灰黄褐	粗(英・長多、有)	良	沈線、縄文LR、条線	
140	北区表土中	深鉢形土器	口縁	縁帯文系土器？	0.5	明赤褐・明赤褐	やや密(英・長、有少)	良	縄文LR？	
141	Ｃ－１	注口土器？	口縁	縁帯文系土器？	0.5	にぶい黄橙・にぶい黄橙	やや密(英・長少、有)	良	沈線、刻み	
142	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	縁帯文系土器？	0.8	橙・橙	粗(英・長、有、赤)	良	沈線、列点状沈線	
143	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	縁帯文系土器？	1.4	にぶい褐・にぶい褐	粗(英・長多、有、砂)	良	沈線(列点状？)	
144	Ｂ－２	深鉢形土器	口縁	縁帯文系土器？	1.1	黒褐・橙	粗(英・長少、有)	良	沈線、刺突	波状口縁
145	Ｂ－３	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.7	橙・橙	粗(英・長、有)	良	凹線	
146	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.5	にぶい橙・橙	やや密(英・長微、有、砂)	良	凹線	
147	北区表土中	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.7	にぶい橙・にぶい橙	粗(英・長少、有微、砂)	普通	凹線、刺突	波状口縁
148	Ｂ－３	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.8	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長少、有微、砂)	普通	凹線	波状口縁
149	Ｃ－２	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.7	褐灰・にぶい黄灰	粗(英・長、有)	良	凹線、刺突	波状口縁
150	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.8	にぶい黄橙、にぶい褐	やや密(英・長少、有)	良	凹線	波状口縁
151	Ｄ－３	深鉢形土器	口縁	凹線文系土器？	0.7	にぶい黄橙・にぶい黄橙	やや密(英・長少、有)	良	凹線	
152	Ｃ－２	深鉢形土器	口縁	縁帯文系土器？	0.6	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長多、有、砂多)	優良	列点	
153	Ｃ－２	浅鉢形土器	胴	凹線文系土器？	0.6	にぶい黄橙・灰黄褐	粗(英・長、有少、砂)	良	沈線、擬似縄文？	
154	Ｂ－２	深鉢形土器	胴	縁帯文系土器	0.8	明赤褐・明赤褐	粗(英・長、有多、砂)	普通	隆帯、沈線(格子状)	
155	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁		0.8	にぶい赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長、有少、砂)	良	沈線	
156	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁		0.9	にぶい赤褐・橙	粗(英・長多、有、砂)	普通	沈線	
157	Ｃ－３	深鉢形土器	口縁		0.8	褐・灰褐	粗(英・長、有、砂)	良	沈線	

表５　縄文土器観察表４

番号	出土区	名　称	部位	型式名	厚さ(底径)	色　調(外・内)	胎　土	焼成	文　様	備　考
158	北区深堀り	深鉢形土器	胴	清水天王山？	0.6	明赤褐・橙	粗(英・長少、有少、砂多)	普通	矢羽状沈線	
159	C－3	壺形土器？	口縁		0.8	橙・にぶい黄褐	密(英・長微、有多)	普通	沈線	
160	北区表土中	壺形土器？	胴		0.6	橙・にぶい褐	密(英・長微、有)	良	沈線	
161	北区深堀り	深鉢形土器	口縁	加曽利B？	0.7	灰褐・にぶい赤褐	粗(英・長多、有、金雲、砂多)	良	縄文LR	波状口縁
162	B－2	異形台付土器	台	曽谷？	0.7	暗赤褐・赤褐	粗(英・長、有、金雲、砂多)	良	沈線、地文縄文LR	
163	表採	深鉢形土器	口縁		0.6	黒褐・褐灰	粗(英・長多、有、砂)	良	沈線、刻み	波状口縁
164	C－2	深鉢形土器	口縁		0.6	赤褐・赤褐	粗(英・長、有)	良	列点状沈線、地文縄文R	
165	北区表土中	深鉢形土器	口縁		0.9	明赤褐・橙	粗(英・長多、有、砂)	普通	付加状縄文	
166	C－3	深鉢形土器	口縁		0.7	橙・橙	粗(英・長、有、砂多)	普通	沈線	
167	B－2	深鉢形土器	口縁		1.1	にぶい赤褐・にぶい赤褐	やや密(英・長少、有少)	普通	縄文R	
168	D－2	深鉢形土器	口縁		0.8	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長多、有)	普通	内面沈線	
169	B－2	深鉢形土器	頚		0.7	にぶい黄橙・黒	粗(英・長多、有多、砂多)	良	擦痕	
170	D－1	深鉢形土器	口縁		0.7	橙・橙	粗(英・長、有、砂)	普通	沈線	波状口縁
171	C－2	深鉢形土器	胴		0.9	にぶい黄褐・にぶい黄褐	粗(英・長少、有多、砂多)	良	沈線(竹管状)	
172	C－3	壺形土器	口縁	加曽利B？	0.7	黒褐・浅黄	やや密(英・長少、有、金雲)	良	沈線	
173	C－2.	壺形土器	頚	加曽利B？	0.6	褐灰・淡黄	粗(英・長多、有、砂)	普通	沈線	
174	北区表土中	壺形土器	頚	加曽利B？	0.7	にぶい赤褐・にぶい赤褐	やや密(英・長少、有、金雲)	普通	隆帯、沈線、刺突	
175	北区表土中	壺形土器？	口縁	加曽利B？	0.6	暗褐・にぶい橙	粗(英・長、有、砂、赤)	良	内外面沈線	外面煤付着
176	B－1	壺形土器？	口縁	加曽利B？	0.7	明赤褐・明赤褐	やや密(英・長、有)	良	内外面沈線	
177	B－2	甕形土器	口縁		0.7	にぶい橙・にぶい橙	粗(英・長多)	良	隆線	
178	A－2	深鉢形土器	口縁		0.6	にぶい橙・にぶい橙	粗(英・長、赤)	普通	隆線、穿孔	
179	B－3	甕形土器	口縁	堀之内	0.9 (18.6)	にぶい橙・にぶい橙	粗(英・長多、有、金雲)	普通	隆帯(指頭圧痕)	
180	B－3	甕形土器	口縁	堀之内	0.9 (18.8)	暗赤褐・暗赤褐	粗(英・長多、有、砂)	普通	隆帯(指頭圧痕)	
181	B－3	深鉢形土器	口縁		0.9	明褐・明褐	粗(英・長少、有多)	普通	指頭押圧	
182	D－2	深鉢形土器	口縁		0.7	浅黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長少、有、砂)	やや不良	刺突	
183	A－1	深鉢形土器	口縁		0.6	にぶい褐・黒褐	粗(英・長、有、砂)	良	無文	内面煤付着
184	C－2		底		1.3 (7.3)	黒褐・にぶい赤褐	粗(英・長、有多、砂)	良	網代底	底部
185	C－3		底		0.6 (5.6)	にぶい褐・黒褐	粗(英・長多、有	良	網代底	

表６　土製品観察表

番号	出土区	縦 横 厚(cm)	重さ(g)	色　調(外・内)	胎　土	焼成	文　様	備　考
186	A－1	4.1 4.0 0.8	14.5	明赤褐・明黄褐	粗(英・長少、有多、砂)	良	縄文LL	土器片円盤
187	C－3	4.1 4.3 1.0	19.3	灰褐・にぶい褐	粗(英・長多、有)	良	沈線、条線	土器片円盤　曽利式？
188	C－3	3.7 3.6 1.3	20.6	明褐・明褐	粗(英・長、有、砂)	普通		土器片円盤
189	南区	3.2 3.8 1.1	18.2	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長多、有多、砂)	普通	縄文LR？	土器片円盤
190	B－2	3.3 3.8 1.5	21.2	赤褐・灰褐	粗(英・長、有、砂)	普通	縄文RR？	土器片円盤
191	溝状遺構	3.5 3.5 0.9	11.2	浅黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長多、有)	普通		土器片円盤
192	B－2	3.8 4.0 1.2	18.2	にぶい黄・にぶい黄橙	粗(英・長多、有、砂)	良	沈線	土器片円盤、口縁部
193	南区	2.7 2.5 1.2	8.6	にぶい黄橙・にぶい黄橙	粗(英・長少、有多、砂)	普通		土器片円盤
194	C－2	3.0 3.1 0.9	9.2	明赤褐・黒褐	粗(英・長多、有、砂)	普通	縄文LR？	土器片円盤
195	C－3	3.0 2.9 1.1	10.4	明赤褐・明赤褐	粗(英・長多、有、砂、赤)	普通	条線	土器片円盤
196	C－2	2.5 3.6 0.9	5.3	にぶい黄褐・明黄褐	粗(英・長、有、砂)	普通	沈線	土器片円盤
197	C－3	4.8 3.4 1.1	18.6	橙・にぶい黄橙	粗(英・長、有、砂)	普通	沈線	土器片錘？
198	B－2	4.3 3.5 0.7	17.0	明赤褐・にぶい赤褐	粗(英・長、有多、赤)	普通	条線、隆線、押圧	土器片円錘？　勝坂式？
199	C－3	3.1 3.3 1.3	14.7	橙・褐灰	粗(英・長多、有多、砂)	普通	隆線、三角押文	再利用品　勝坂式？
200	B－3	2.5 2.5 0.7	5.4	黒・黒	粗(英・長、有)	良	沈線、縄文ＬＲ	再利用品　加曽利Ｂ式？

(2) 石器、石製品

今回の発掘調査では、44点の石器や石製品の出土が確認されている。その内容は、狩猟具や漁撈具、調理具、農具や工具、呪術具と多彩な組み合わせをみせており、狭小な調査区でこれだけの出土状況を示すことに豊かな生活空間としての遺跡の営みを想起させる。時期的には不明な要素が多いが、出土土器に準えて縄文時代中期中葉～後期を主体とするものと思われる。それらの石器や石製品の各種類を挙げると次の通りである。各石器と石製品の法量の詳細については観察表（表７）に示した。

石鏃は12点出土しており、形態から凹基無茎鏃（図16－１～７）、凹基有茎鏃（同図－８）、円基鏃（同図－９）、凸基有茎鏃（同図－11）に分けられる。そのなかでも一番多い凹基無茎鏃は１～４のように三角形を基調とするもの、５のように側縁が弧状に膨らみをもつもの、６・７のように長身の三角形状ものがある。石材は１～６が黒曜石製で、７が火山岩製である。１・２の基部は抉入が0.2cmと全長に対して浅く∨形状を呈している。脚部は比較的丸みを帯びて一般的な縄文時代中期および後期の特徴を捉えているといえる。３・４の基部はそれぞれ0.4cm、0.2cmと同様に浅いが⌊形状に少し角がつくられて脚部が開いている。３の縁辺部は押圧剥離を加えた鋸歯状の刻み目が顕著である。４は抉入部から脚部にかけての基部縁辺に刃つぶしのような擦痕が残されている。５は0.2cmの浅く小さな∩形状の抉入が施されている。片面は剥離面に対して側縁と脚部に二次的な調整が認められるのみで、全体的に粗雑な感じがする製品である。６は長身の三角形を基調としており、抉入は0.5cmで比較的深く∧形状につくられている。７も長身の三角形を基調とするが、側縁にわずかな段を持ち五角形となっている。抉入は0.6cmの軽く剥離したような∩形状につくられ、全長に対して浅くつくられている。また、他の石鏃が長さ2.0cm前後、重さ0.4～0.6ｇ程度に収まるのに比べ、この石鏃は２倍以上の長さと約10倍ちかい重量をもつ大型品である。縄文時代中期や後期の石鏃にみる一定の規格と異なる特徴をもつ５・７のような石鏃は、出土土器にも若干見られる安行Ⅰ・Ⅱ式期の範疇に入るのかも知れない。８は黒曜石製の凹基有茎鏃であり、基部の抉入は0.2cmを測るが、脚部が比較的鋭く引き出されているため深い抉りに見える。茎は長さ0.6cm、幅0.5cmである。ちなみに有茎鏃がこの地方に分布するのは縄文時代後期以降であることが知られている（鈴木1983）。９は丸みを帯びた基部が特徴の黒曜石製の円基鏃で、剥片の外縁を押圧剥離によって形状を整えてあり、内側は剥離面がそのままの部分がみられる。

出土した石鏃のなかには、加工途中で欠損したことなどで廃棄されたとみられる未製品も含まれている（同図－10～12）。10は凹基無茎鏃の未製品の黒曜石片で、片側の側縁が未加工のままで、その割れ口に平坦打面が観察できる。なお、認められる抉入は0.3cmである。11も黒曜石片であるが、基部にあたる箇所に長さ0.6cmで幅0.5cmの茎が作り出されており、その形態から凸基有茎鏃であるとみられる。側縁の刃部が中途半端に粗く剥離されたままであることから、この押圧剥離の段階で廃棄された失敗作であると思われる。12は長身の三角形状をした凹基無茎鏃の未製品の黒曜石片で、片方の側縁の刃部と反対側の面の内部が未調整のまま脚部を欠損した状態である。脚部の割れ口は切子打面的であり、石器表面の調整中に失敗し、廃棄されたものであると思われる。

また、小型の黒曜石片の側縁に刃部を加工している剥片石器（同図－13）が１点出土している。剥離面に打点とコーンが見られるため、意図的な打撃でこの大きさに作り出された剥片であることは分かるが、石鏃の未製品であるのか否かは不明である。

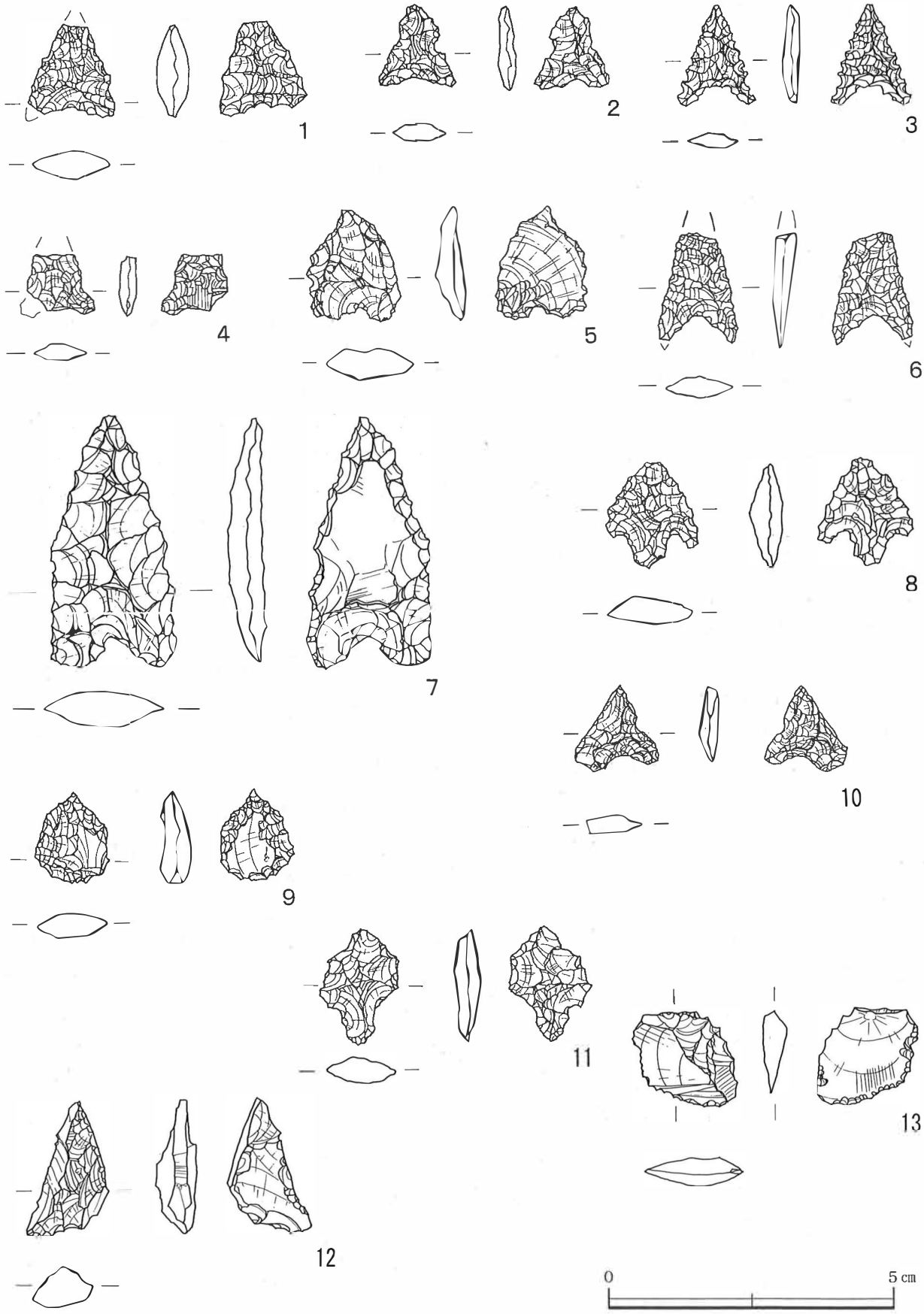


図16　出土石器１

本遺跡で出土した石器は種類が多彩であると述べたが、石鏃だけをみても、調査面積が狭小であることから量的には少なかったものの、その形態的な多様性に富んでいることを特徴として挙げることができる。

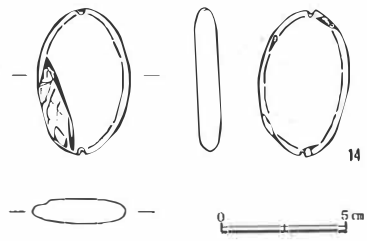


図17　出土石器２

石錘（図17—14）は１点だけ出土している。頁岩製であり、扁平な円礫の両端を擦り切って、切れ込みを施した切目石錘である。重さ31.5ｇは、一般的な小型の石錘の重量であり、滝戸遺跡においてもこれと類似した小型の切目石錘が24点出土しており、それらに縄文時代後期の年代観が与えられている（馬飼野1997）。

磨石類・敲石（図18—15～19）は、用途として擂りによる磨滅や敲打などの痕跡をもつ礫石器の一群をこれに含めて７点出土している。15は磨面と敲打痕をもつ火山岩の円礫で、擂りと敲きの機能を同一面上で確認することができる。剥落した割れ口にも磨面と敲打痕が確認できる。16は敲石で、欠損して半月形となった砂岩の円礫の周縁部を作業面として使用している。17は磨面と敲打痕をもつ閃緑岩質の半深成岩の円礫で、片面中央に敲打痕が認められ、周縁部が磨面となっている。この磨面に部分的な弱い敲打痕がみられる。18は磨面と敲打痕をもつ砂岩の円礫で、折れと剥落で確認できないが周縁に敲打痕、中央部に磨面をもつ一般的な磨石類であったと思われる。19は底面が平坦な花崗岩質深成岩の円礫を選択し、その底部を作業面とする磨面をもつものである。一見、両側縁が加工されないスタンプ形石器に形状が似ているが、表土中からの出土のため時代は不明である。

その他の礫石器として凹石（同図—20・21）が２点出土している。20は砂岩の扁平な円礫の周縁を使用した敲石の機能と平坦面を使用した凹石の機能を兼用している。平坦面に径1.4×1.9cm、深さ0.2cmと径1.5×1.6cm、深さ0.1cmの楕円形の凹みが２箇所あり、裏面には薄い剥離痕が認められる。21は扁平な閃緑岩の円礫を使用し、その両平坦面は磨滅により∽形状に減っていることから砥石の用途が考えられるが、その片面に径2.7×2.1cm、深さ0.4cmの楕円形の凹みが認められることから凹石に転用されたものと思われる。また、底部を欠損し、周縁も４分の１以下に欠損しているため、正確な規模は不明であるが、火山灰質砂岩製の石皿片（同図—22）が１点出土している。

石斧は打製石斧（図19—23～30）が８点と磨製石斧（同図—31）が１点出土している。23は砂岩製の短冊形で両刃の打製石斧で、表裏両面に自然面を残すことから手ごろな円礫から作られたものと分かる。刃部は幅5.4cmで粗い剥離によって円刃調に作られ、部分的な剥落が認められる。24は砂岩製の短冊形で片刃の打製石斧である。表裏両面は剥離面がそのままに認められる部分が大半である。刃部は幅4.5cmのやや先端が突き出た円刃となっている。25は火山岩製の短冊形の打製石斧である。表裏両面の大部分が剥離面をそのまま持ち、比較的薄手の剥片から作られたものと思われ、両側縁や刃部に集中して加工が施されている。刃部は緩やかな弧状を描く円刃であるが、直刃にちかい形態を呈している。26は砂岩製の打製石斧で、基部から刃部を欠損しているが、短冊形であると思われる。割れ口は無作為に折れた状態である。片面には自然面を残している。27は砂岩製の打製石斧の刃部片であると思われる。形態は短冊形で両刃・直刃ではないかと思われる。割れ口は無作為で自然な折れ面をしている。28は砂岩製の打製石斧の基部片である。基端部は比較的鋭く、断面は厚手なつくりで、形態は短冊形と思われる。割れ口は平坦打面を示している。これら短冊形の打製石斧は縄文時代中期に盛行する。29は砂岩製の撥形で両刃の打製石斧

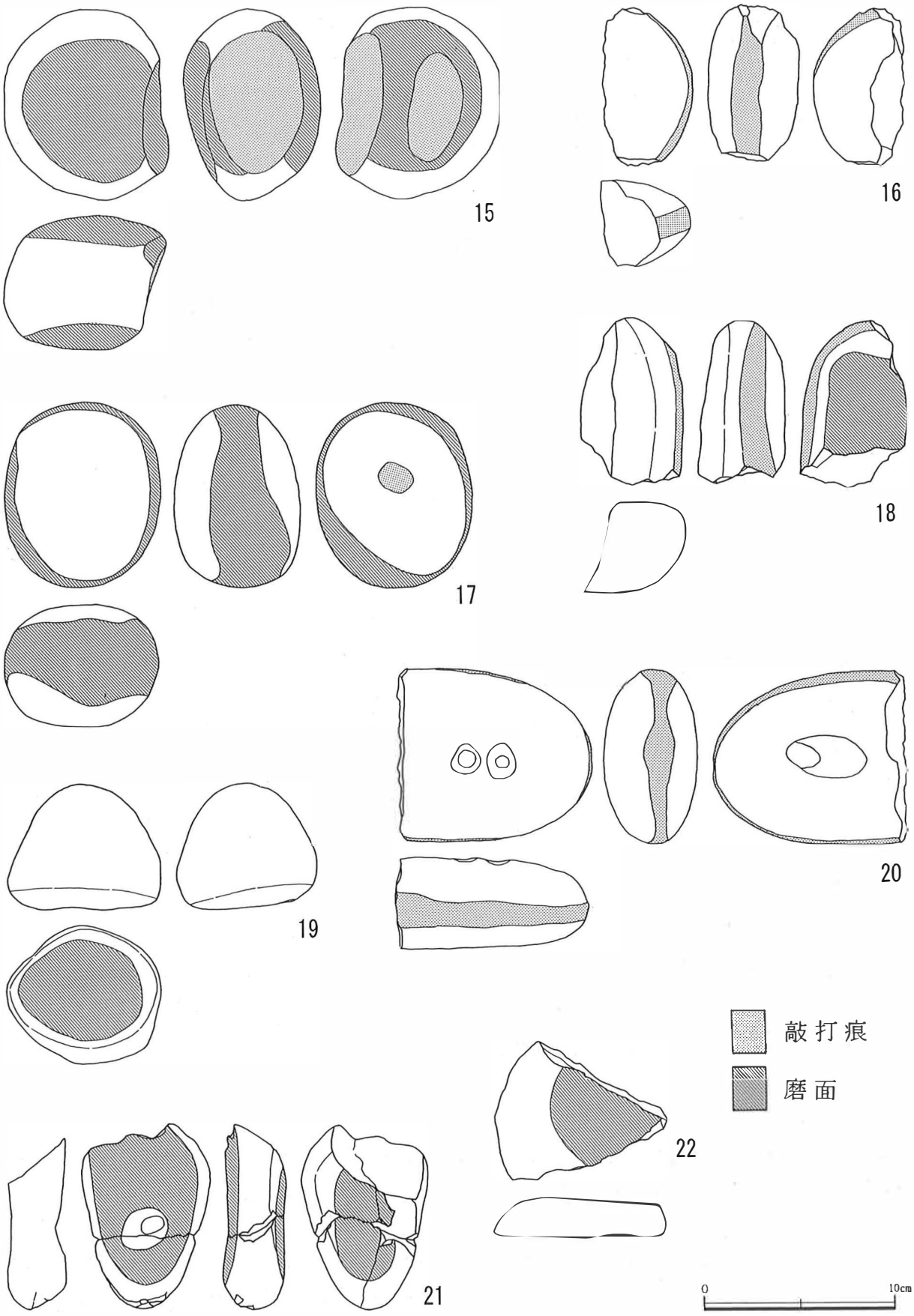


図18　出土石器３

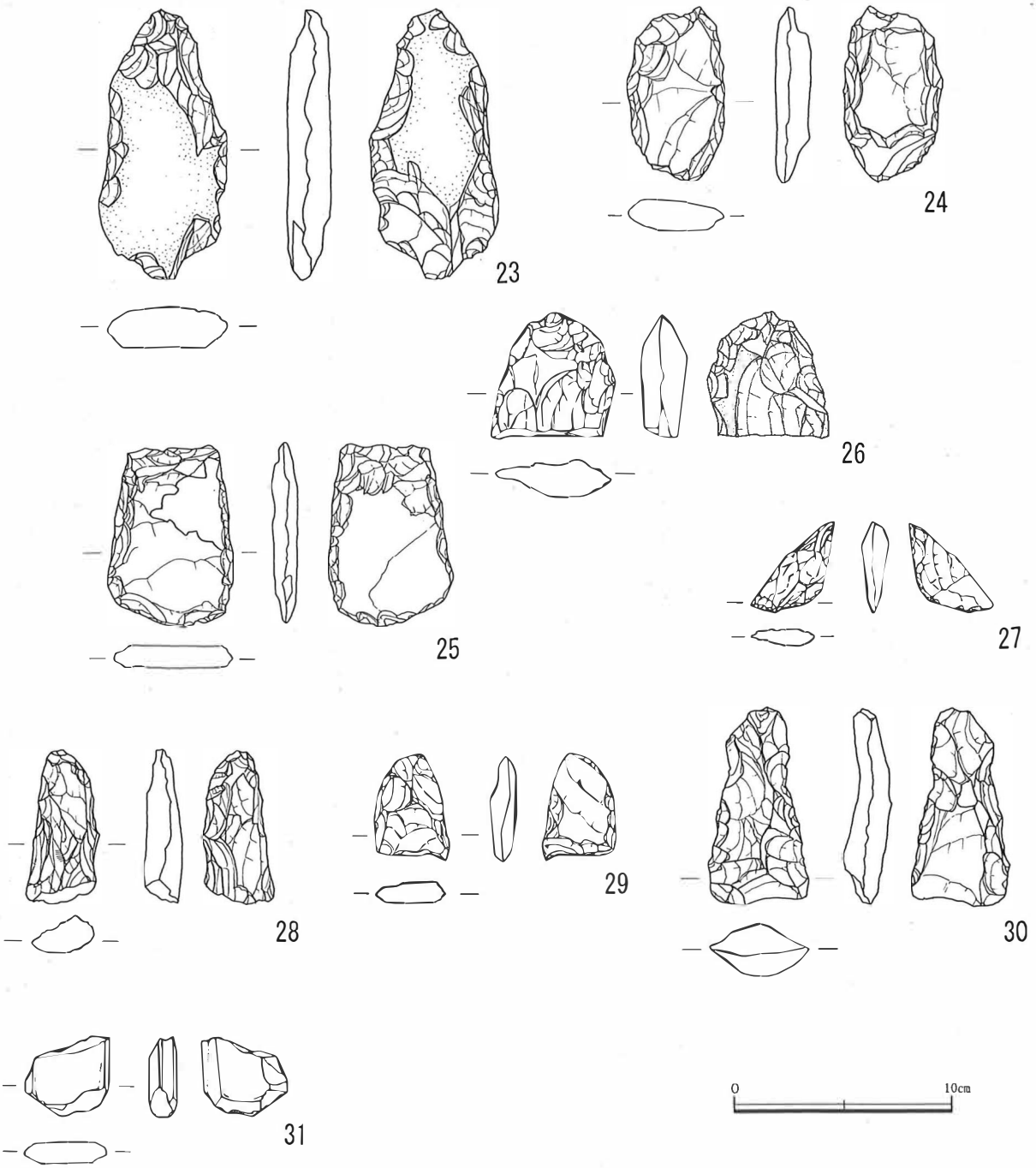


図19　出土石器４

で、直刃で粗く剥離した面を刃部としており、幅3.4cmを測る。基端を除く側縁部に片面からの軽い調整が加えられている。30は砂岩製の撥形で片刃の打製石斧である。刃部は直刃で片面は剥離面がそのままであるが、明確な片刃に作られていない。側縁部から基端部にかけて調整加工がされており、基部上位に僅かな抉りが認められる。側面からみると彎曲した形状をしている。31は砂岩製の定角式磨製石斧の頭部片と思われる。側縁部から刃部にかけて研磨されて稜線が作られて、断面形は一般的な定角式石斧にみられる隅丸長方形というより六角形を呈している。片面を欠損しているため両刃か片刃かは不明である。割れ口は刃部・基部とも無作為な折れ方をしてい

る。定角式磨製石斧が盛行するのは縄文時代中期末～後期以降といわれる（早川1983）。

薄手の剥片に刃部を施した、掻器・削器的な剥片石器をスクレイパー類とした。このスクレイパー類は５点認められ、ラウンドスクレイパー（円形掻器）的なもの（図20—32）、エンドスクレイパー（先刃掻器）的なもの（同図—33）、サイドスクレイパー（削器）的なもの（同図—34～36）に分けられる。32は砂岩の横長の剥片を使用し、その長辺に横刃形石器や石匙のように刃部を加工している。上部中央には剥離の際の打点が残されている。33は砂岩の縦長で先端が尖った剥片を使用し、その側縁から先端にかけて刃部が加工され、ナイフ形石器にちかい形状をしている。刃部は表裏両面とも両側縁に施されている。34～36は縦長の剥片を使用し、34・35はその側縁に集中して刃部を加工している。36は片側に刃部を認められるが、もう片側は使用による剥落のためか刃部が認められない部位がある。35のように側面が彎曲した剥片を加工・調整したものもある。35・36の下位の割れ口はきれいな平坦打面で打点は認められないが意図的に折られたものと思われる。石材は34が砂岩製であり、35・36はいずれも火山岩製である。

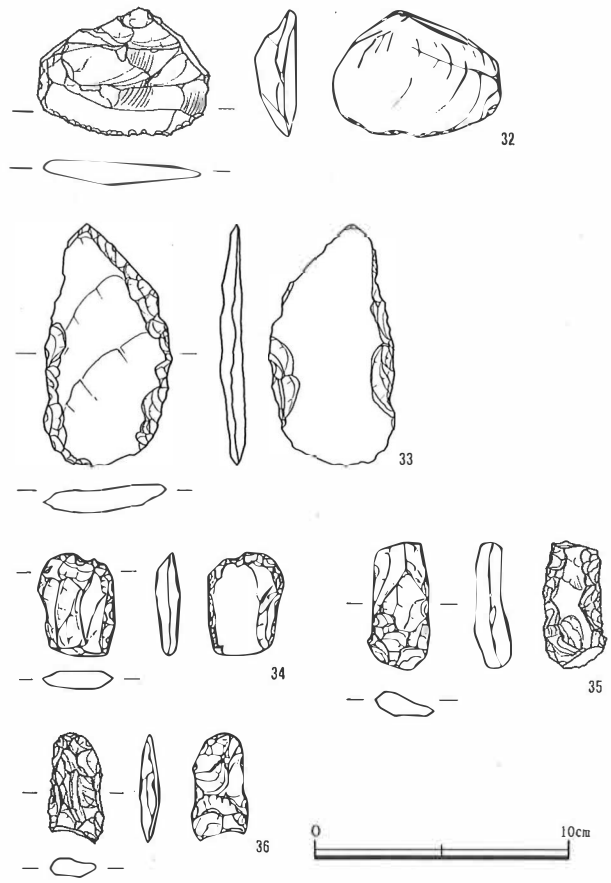


図20　出土石器５

スクレイパー類５点に対し、その機能を同一にすると考えられる石匙（図21—37）は１点のみ出土している。砂岩製の横型石匙でつまみ部が片寄る小型なタイプである。刃部は弧状を呈し、4.2cmを測るが、先端付近が欠損しているため、もう少し長いものと思われる。

石錐（図22—38～41）は４点出土している。38は砂岩製で、明瞭なつまみ状の頭部と長い錐部をもつものである。錐部の幅は0.6～0.2cmで、先端は扁平な菱形状の断面形を呈している。39は火山岩製で、頭部から錐部の作り出しが不明瞭で全体的に逆長三角形にちかい形状をしている。

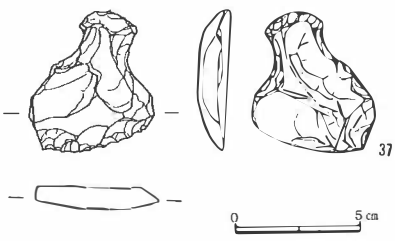


図21　出土石器６

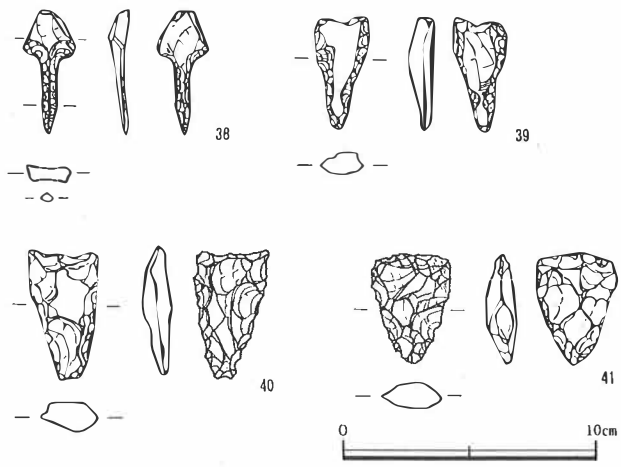


図22　出土石器７

先端部は0.3cm角の菱形状の断面を呈しているが、欠損しているため明確ではない。40・41は石錐とするには難しい形状といえるが、逆三角形の剥片を側縁から先端へ向かって、先端を鋭利な錐とすることを意図した調整加工を加えたもので、滝戸遺跡においてその類例をみることができる。いずれも砂岩製で、40の先端は欠損して明確ではないが、41の先端は0.3cm角の扁平な三角形状の断面を呈している。本遺跡では、呪術具である石剣（図23—42）と石棒（同図—43）の破片が１点ずつ出土している。42は緑色片岩製で、断面は片面を欠損しているため明確ではないものの、六角形状にちかい扁平な楕円形を呈していると判断できる。しかし、表面は全体的に研磨されて稜線は目立たない。43はこの石剣よりも円形にちかい断面を呈しており、断面形による分類上では石棒に含められるものと思われる。チャート製で、全体的に研磨されて筋が目立つ。器面に対して一本の溝状に0.1cmほどの凹みが通り、断面は歪な円形といえる。その径は1.9cmと小規模なことから、小型化する縄文時代後・晩期以降のものと思われる。

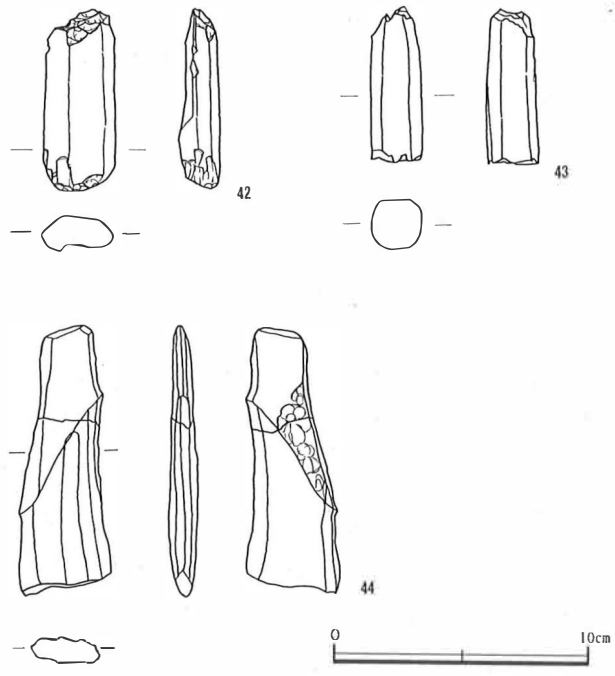


図23　出土石器８

さらに本遺跡では、もう１点刀身状の石製品（同図—44）が出土している。砂岩製で先端を含めた周縁に両刃様に刃部が作られ、全体的に研磨が施されている。形状は弓形に彎曲し、側縁の刃部には山形の突起のように引掛りが左右両側に作られている。片側の平坦面には溝状に0.1cmほどの凹みが通り、稜線状に認められる。また、器面に対して斜位の稜線が表裏両面に弱い段をもって作られている。用途や時代については不明である。

つぎに各石器・石製品の石材について触れておきたい。石材の分類や産地などの情報については北垣俊明氏の鑑定結果に基づき、石材の産地は、本遺跡の所在する地域からの利便性を考慮したうえで、山中の崖などの露頭よりも安全性が高く採集が容易な河原などの河川流域を採集可能場所とする考え方（柴田2004）を前提としている。本遺跡で出土した石器・石製品の各器種において使用された石材についてまとめてみた（表７）。

石材としての使用量を多い順に挙げると、砂岩20点、黒曜石12点、火山岩６点、深成岩（閃緑岩含む）２点、半深成岩１点、頁岩１点、緑色片岩１点、チャート１点である。

最も石材として選択されているものは砂岩であり、打製石斧や磨製石斧、磨石類やスクレイパー類など農工具や調理具に主体的に使用されていることが分かる。この砂岩の産地は富士川流域周辺で、身近な地域では天子山地のある中流域から下流域、支流である芝川流域にかけて採集できる。本遺跡から約300ｍという臨める場所に潤井川が流れているが、潤井川流域で採集できる石材はほとんどが火山岩のようである。

砂岩のなかでは、組織や色調の類似点によって暗灰色系のもの、粒子が比較的大きな灰色系のもの、これらより珪質で硬質な灰白色系のもの、微細な雲母を多く含んだにぶい赤褐色系のものに分かれてまとまりをみることができる。暗灰色系は24・26・27・28・29・33と多くの短冊形の

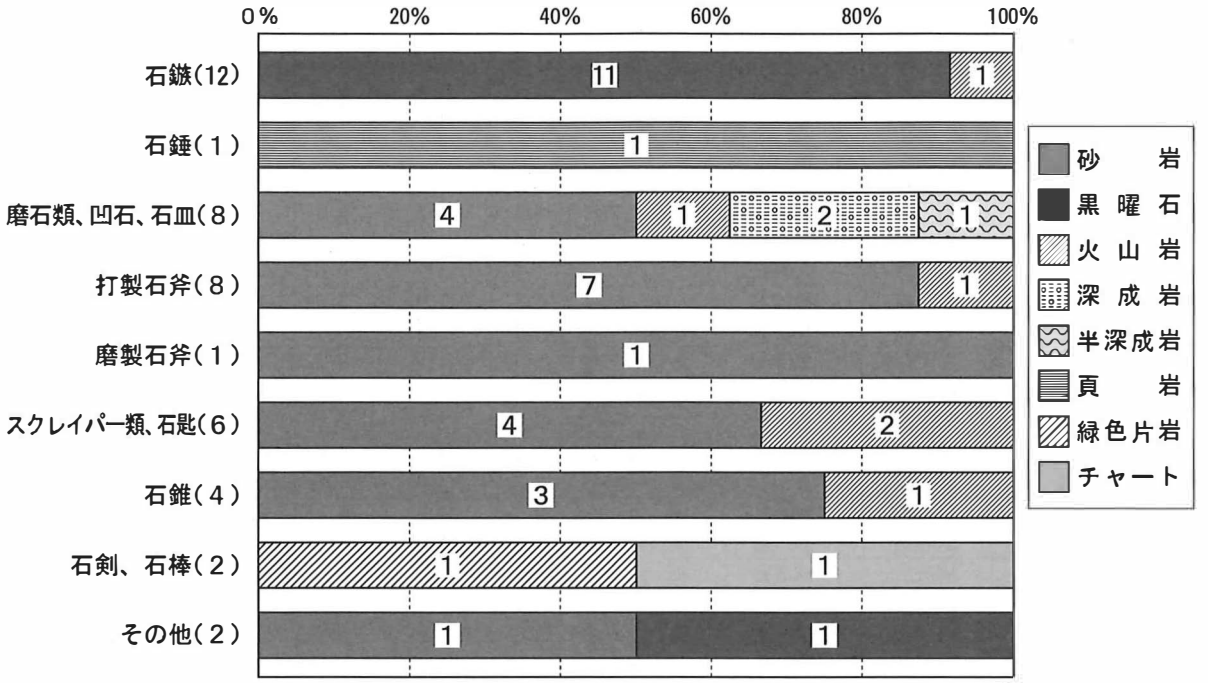
表7　出土石器計測表

No.	出土区	器種	石材	色調	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
1	表土中	石鏃	黒曜石	黒	(1.6)	(1.6)	0.6	(0.8)	
2	表土中	石鏃	黒曜石	黒透明	1.4	1.4	0.4	0.3	
3	南区サブトレ	石鏃	黒曜石	黒透明	1.8	1.4	0.3	0.2	完形
4	表土中	石鏃	黒曜石	黒透明	(1.0)	(1.0)	0.3	(0.3)	
5	C－1	石鏃	黒曜石	黒	1.9	1.5	0.6	1.1	完形
6	B－1	石鏃	黒曜石	黒	(1.9)	1.4	0.4	(0.5)	
7	C－1	石鏃	火山岩	灰オリーブ	4.4	2.2	0.6	4.8	完形
8	表土中	石鏃	黒曜石	黒	1.9	1.5	0.6	1.1	
9	B－3	石鏃	黒曜石	黒	1.6	1.3	0.5	0.7	完形
10	C－1	石鏃	黒曜石	黒	1.5	(1.4)	0.3	(0.3)	未製品
11	南区表土中	石鏃	黒曜石	黒透明	(2.0)	(1.4)	0.5	(0.7)	未製品
12	表土中	石鏃	黒曜石	黒透明	2.3	(1.1)	0.7	(1.4)	未製品
13	C－1	剥片石器	黒曜石	黒透明	1.7	1.7	0.5	0.7	
14	C－3	石錘	頁岩	灰	5.7	3.6	1.6	(31.5)	
15	B－1	磨石類	火山岩	灰白	10.1	8.3	7.1	735.0	
16	C－2	敲石	砂岩	灰オリーブ	(8.3)	(4.7)	(4.6)	(219.0)	
17	B－2	磨石類	半深成岩	灰白	9.8	6.6	6.5	798.0	完形
18	B－2	磨石類	砂岩	灰白	(8.6)	(5.5)	(4.4)	(270.0)	
19	表土中	磨石？	深成岩	灰白	8.0	7.4	6.5	441.0	
20	表土中	凹石	砂岩	灰オリーブ	9.1	(10.2)	4.9	(700.0)	
21	C－3	凹石	閃緑岩	灰白	(9.0)	(6.8)	3.1	(205.0)	砥石転用か
22	B－1	石皿	砂岩	にぶ赤褐	(10.1)	(7.0)	(2.1)	(132.0)	
23	南区サブトレ	打製石斧	砂岩	灰	(12.4)	5.4	1.9	(161.0)	
24	南区表土中	打製石斧	砂岩	暗灰	8.0	4.5	1.6	66.8	ほぼ完形
25	表土中	打製石斧	火山岩	灰黄褐	(8.2)	5.6	1.2	(71.2)	
26	南区	打製石斧	砂岩	暗灰	(5.7)	5.3	2.2	(66.9)	
27	C－2	打製石斧	砂岩	暗灰	(3.7)	(3.3)	(1.1)	(12.7)	
28	C－1・2	打製石斧	砂岩	暗灰	(6.9)	(3.1)	1.7	(41.6)	
29	B－1	打製石斧	砂岩	暗灰	(4.9)	3.4	1.2	(18.6)	
30	C－1	打製石斧	砂岩	灰	9.1	4.6	1.8	65.8	ほぼ完形
31	B－2	磨製石斧	砂岩	にぶ赤褐	(3.8)	3.8	1.3	(17.9)	
32	C－3	スクレイパー類	砂岩	灰	4.9	6.6	1.6	42.8	完形
33	B－1	スクレイパー類	砂岩	暗灰	4.8	9.6	0.9	46.2	完形
34	C－1	スクレイパー類	砂岩	灰白	(4.0)	2.9	1.0	(12.3)	
35	C－3	スクレイパー類	火山岩	灰	(5.0)	2.2	1.3	(15.7)	
36	C－1	スクレイパー類	火山岩	灰	(4.0)	1.9	0.8	(7.7)	
37	A－2	石匙	砂岩	灰白	5.0	(4.9)	1.1	(31.1)	
38	C－2	石錐	砂岩	灰	4.9	2.0	0.7	3.2	ほぼ完形
39	表土中	石錐	火山岩	灰オリーブ	4.4	2.1	0.9	(8.6)	
40	南区	石錐？	砂岩	灰	(5.2)	2.8	1.2	(13.9)	
41	溝状遺構	石錐？	砂岩	灰白	4.3	3.1	1.2	(13.3)	
42	南区	石剣	緑色片岩	緑灰	(7.0)	2.8	(1.6)	(48.9)	
43	溝状遺構	石棒	チャート	灰	(6.1)	1.9	1.9	(40.8)	
44	南区サブトレ	不明	砂岩	にぶ赤褐	(10.1)	3.7	1.1	(38.5)	磨製

打製石斧に共通して類似した石材が選択されている。灰色系は30・32・38・40・41と撥形の打製石斧やスクレイパー類、石錐において器種を問わず使用されているが、灰白色系は絶対的な点数が少ないが34・35の例から小形利器において選択されていることを窺わせる。にぶい赤褐色系は22・31・44の研磨を前提とするものにおいて類似する石材の選択がされているようである。このことから、砂岩のなかでも器種や用途によって石の質感などによる選び分けがされていることが指摘できる。

使用や加工を考えた点で注文があまりつきそうにない磨石類や石錘においても、潤井川流域などのごく身近な環境で手に入れられる火山岩の円礫よりも、富士川流域まで移動して砂岩をはじめ、深成岩や半深成岩、頁岩の円礫を採集していたことにも注目できる。潤井川流域で採集可能

表８　石器素材組成表



品種名の（　）数字は点数を表し、グラフの中の数字はその石材の点数である。

な火山岩の円礫を使用した磨石は15の１点のみである。火山岩を使用した石器では、７・35・36・39の稀な石鏃や小形利器が共通して類似した石材を選択しており、これらは火山岩のなかでも硬質なものを石材としているが、富士川下流域がその産地である。つまり、本遺跡では最寄りの潤井川流域ではなく、羽鮒丘陵と星山丘陵が接続する谷を通過する直線距離で約3,500mの場所にある富士川流域周辺を主要な石材採集地としていたことを窺い知ることができる。

また、なかには富士川流域では採集できない石材もみられる。ほとんどの石鏃の石材として使用された黒曜石は、クリストバル石の含有量やラメラ、球顆状組織などの観察から得られる特徴により中部高地の和田峠を産地とすると推定されている。石剣や石棒に使用された石材である緑色片岩やチャートの産地は、この地域からの利便性を考えると天竜川流域以西の地域ではないかと推定される。このように器種による適した石材の選択が為されていることを踏まえて、富士川流域周辺では採取できない石材は他地域から何らかの手段で補完するというような、石材の移動すなわち人の交流を窺わせることも今回の鑑定結果から得られた。

〈文献〉

柴田　徹　2004「縄文時代の石器石材利用について」
『東海大学校地内遺跡調査団報告』11・12　東海大学校地内遺跡調査団
鈴木道之助　1983「３．石器Ⅱ　石鏃」『縄文文化の研究』７　雄山閣
早川正一　1983「３．石器Ⅱ　磨製石斧」『縄文文化の研究』７　雄山閣
馬飼野行雄　1997「縄文時代編　Ⅰ．遺物」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会

⑵ 弥生時代（図24・図25）

弥生時代の遺物は土器類だけであり、その他の確認はない。土器類は大半が遺物包含層からの出土で、遺構に伴う発見例はない。溝跡（溝状遺構）から破片資料の出土を確認しているが直接遺構の機能に関連するものではない。このように、今回の調査で出土した土器類を通して遺構の詳細な性格等を検討することはできないが、遺跡の概要を考えるには大きな情報を提供しているものと言える。

弥生時代は出土土器の型式からその後期後半のもので占められるものであり、その組成は壺と甕で構成されている。

１と２は、折り返し口縁壺の口縁部破片であり、両者とも折り返し部外面と口唇部内面に縄文が施文されている。１は頸部～肩部に刺突による横線と縄文により構成された文様の一部が残り、頸部の外面においてその横線を一部すり消してしまうタテミガキが認められる。折り返し部を主体として、焼成時の加熱による器面発泡をよく見ることができる（新井2003）。３は内外面にハケメを残す単純口縁壺で口唇部外面を面取りする。４は複合口縁壺の口縁部破片であるが複合部の造作は粗雑で、薄い粘土帯の貼付により幅広の面を形作る。

５、６は壺胴部破片である。５は今回の調査においては比較的残りの良かった底部を含む破片である。上位に縄文による文様を見ることができるが、胴径の広い部分における施文で、頸部の形状を考えると幅広の文様帯を予想させるものであると言える。胴部の外面はヨコミガキで仕上げられ、内面底部にハケメを認めることができる。６は肩部の文様として扇状文が見られるもので、やや特異な破片資料である。内面は上位に成形時の巻上げ痕を残し、下位を板状工具によるナデ整形により仕上げている。

７～13は壺の底部は破片である。基本的には外面ヨコミガキ、内面ハケ整形で仕上げている様子を指摘することができるが、８のような外面の下端にタテハケメを顕著に残すものも見られる。このなかで８と９においては底部外面に木葉痕が認められる。また、木葉痕が見られず底部外面をナデ整形で仕上げている７については、焼成後の作成として捉えることができる穿孔の痕跡を認めることができる。13は、やや下方へ突き出して造作される底部破片の内、屈折させることにより底部あるいは胴部を形作るもので、底部の器厚が他のものより薄い。

14、15は甕の破片資料である。出土土器の内、甕については図化できるものがそれほど多くない点を土器構成比の中で指摘することができる。14は脚台部の破片資料で外面タテハケメ、内面ナデ整形により仕上げられている。15は屈折する頸部が特徴的な口縁部破片である。口縁部外面は口唇部ヨコハケメの後刺突文を施すがそれ以外は成形時の調整を残す。胴部は頸部に粗いタテハケメを施した後、頸部屈折部まで及ばない状況で肩部よりナナメハケメを施している。内面は口縁部をハケ調整の後にヨコナデにより整形する。胴部に丁寧なヨコハケメを残している。東駿河において口縁部のヨコナデが普遍化するのは、東海西部系の「く」字甕の影響により古墳時代前期に成立する口縁部ヨコナデ整形の特徴的な甕の出現以降である（渡井2002）が、弥生時代後期には外来系の型式的な要素として波及している。15は鍵の手に屈折する口縁形態と整形技法から外来系土器の一種であると判断される。

16の拓影図は、羽状の縄文帯の下端に円形の貼付文が付される壺胴部破片である。貼付文は４個以上をひとつの単位としたもののようで、全周させて連続するものではない。

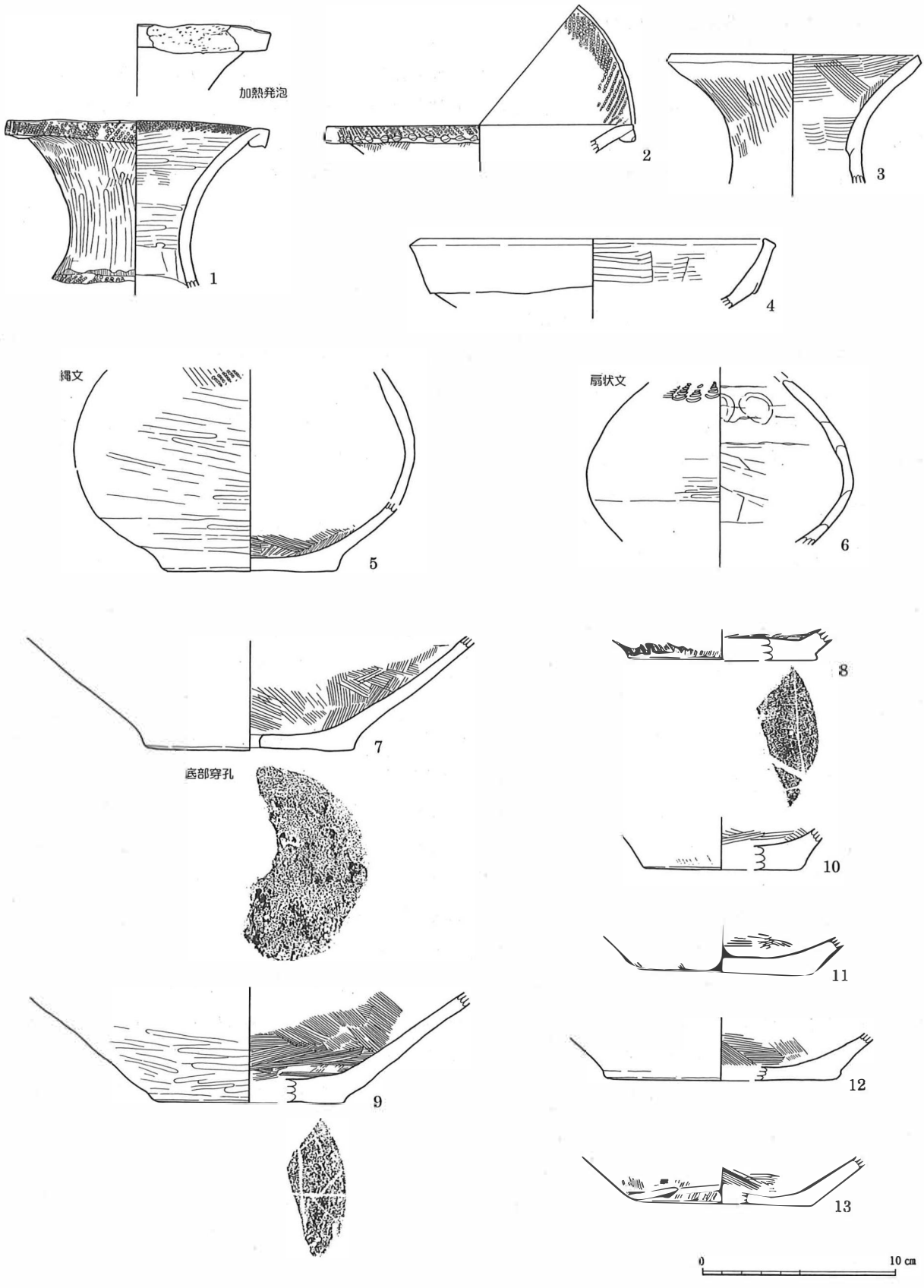


図24　出土土器６

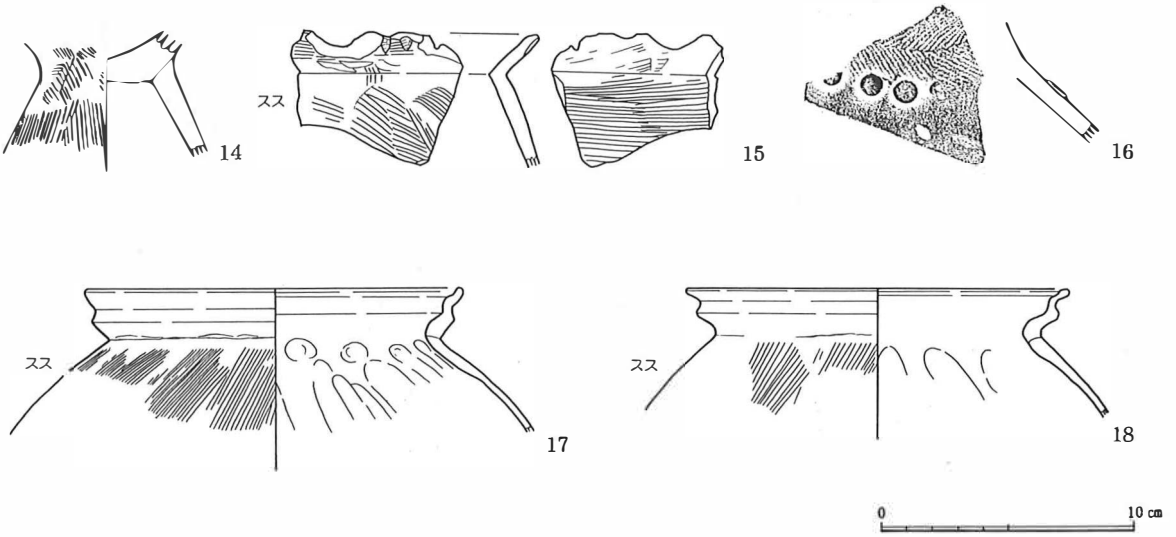


図25　出土土器７

３．古墳時代

全体の遺物の中からはこの段階のものと明らかに判断されるものは少ない。この段階の出土品として判明しているのは、図25に掲載した甕類を代表とした古墳時代前期の資料に限られる。その中で、確認している土器はすべてＳ字状口縁台付甕（以下Ｓ字甕）の破片ばかりで、極めて偏った型式を示している。

これらのＳ字甕は、その大半がＢ－２グリッドからの出土で、限られた範囲においてまとまりを持って発見されている。さらにそれらは、口縁の形状から２～３個体に集約されるようで、一定の空間に対する意図的な廃棄行為を窺わせる状況となっている。そのため、他の土器類の大半が流れ込みや２次的な堆積に伴う破片化した状況であるのに対して、脚台部以外の各部位を小片ながら確認することができるものである。

17は口縁部の作りが比較的しっかりしているＳ字甕の口縁～肩部の破片である。口縁端部内面には窪ませることにより形成された沈線が認められる。頸部はその屈折が明瞭で、外面に接合時の痕跡を残しながら口縁部を付している様子を見る事ができる。口縁部はヨコナデ整形されているが、その外面は肩部の上端まで及んでおり肩部のハケメをナデ消している。肩部（胴部）は外面がヘラケズリの後にナナメハケメにより整形されており、内面が指頭によるタテ方向のナデ付けが見られる。18は口縁端部を外方に広げる点が特徴的なＳ字甕であるが、それ以外は17と同様の型式と言えるものである。両者とも外面にススの付着が顕著に認められる。

〈文献〉

新井正樹　2003「発泡変形土器小考」『静岡県考古学研究』35　静岡県考古学会

渡井英誉　2002「大廓Ⅱ式期の具体相―第３号方形周溝墓出土土器の編年的位置づけ―」
『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』

表９　弥生土器・土師器観察表

No.	地　区	層　位	器　形	法　量			備　　考
				口径	底径	器高	
1	Ｃ－３		広口壺Ｂ	13.8			口縁部完存、加熱発泡
2	Ｃ－３		広口壺Ｂ	(15.8)			口縁部１／４以下
3	南区		広口壺Ｃ	(13.0)			口縁部１／４存
4	南区		広口壺Ａ	(18.0)			口縁部１／４以下
5	北区		広口壺		9.0		底部全周
6	Ｃ－３	黒色土	広口壺				胴部破片、扇状文
7	南区		壺		10.8		底部１／２存、底部穿孔
8	Ｃ－２		壺		(9.8)		底部１／４以下、木葉痕
9	北区		壺		(10.0)		底部１／４以下、木葉痕
10	北区		壺		(8.1)		底部１／３存
11	Ｃ－２		壺		(9.4)		底部１／３存
12	南区		壺		(12.0)		底部１／４以下
13	Ｃ－３		壺		(9.2)		底部１／３存
14	Ｃ－２		台付甕				台付甕脚台部
15	北区		台付甕Ｆ				外面スス付着
16	Ｃ－２		広口壺				羽状縄文＋円形貼付文
17	Ｂ－２		台付甕Ａ	(14.8)			Ｓ字甕、外面スス付着
18	Ｂ－２		台付甕Ａ	(15.0)			Ｓ字甕、外面スス付着

※器形は富士宮市教育委員会1997の分類に準拠する。

第Ⅳ章　ま と め

1．縄文時代（表10・11）

本調査は、調査面積わずか約136㎡ほどの調査であったにもかかわらず、出土遺物は約１万点ほどを数えた。時期は、縄文早期・中期～晩期初頭にわたっていた。

いずれも遺物は斜面堆積土中の出土であり、遺物は各時期混在し、遺構に伴うものではなかった。土器は分類可能な破片が限られる小破片で占められた。遺跡の主体は、本遺跡より南方の高所平坦面にあると考えられる。

本報告書に図示した土器の選別は、各時期、また各器種の土器を取り出すよう努めて行った。そのため、以下の計算値は厳密な割合とは言えないかもしれないが、ある一定の傾向は示しているのではないだろうか。土器の時期的割合は、早期0.5%、中期15.1%（北屋敷、勝坂期3.2%、曽利期11.9%）、後期69.8%（称名寺・堀之内期5.9%、加曽利Ｂ～曽谷期50.9%、安行１・２期4.9%、縁帯文系土器群？2.7%、凹線文系土器群？5.4%）、晩期？1.6%、不明13.0%となる。また、器種別割合は、深鉢形土器73.0%、鉢形土器7.6%、浅鉢形土器8.6%、壺形土器3.8%、甕形土器1.6%、注口土器2.7%、その他2.7%である。

主体となる時期は、後期後半の加曽利Ｂ式～安行２式までである。特に、加曽利Ｂ式の出土数は多いと言える。大中里坂下遺跡は、これまで分布調査が行われたのみで詳細は不明ではあったものの、縄文時代後期後葉の加曽利Ｂ式土器を包含するとして認識されており（富士宮市1993）、それを追認できる内容となった。

また、主体となる土器は、各時期、勝坂式、曽利式、加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式、加曽利Ｂ式、安行式といった、中部山岳・関東系の土器群であるが、縁帯文系土器群・凹線文系土器群か、と考えられる土器が混入している。

富士山麓では、後期前半以降遺跡数が激減することが以前より指摘されている（静岡県1990）。富士宮市でも、堀之内式以降、遺跡は縮小の一途をたどり、加曽利Ｂ式期に至っては、本遺跡、

表10　縄文土器時期別割合

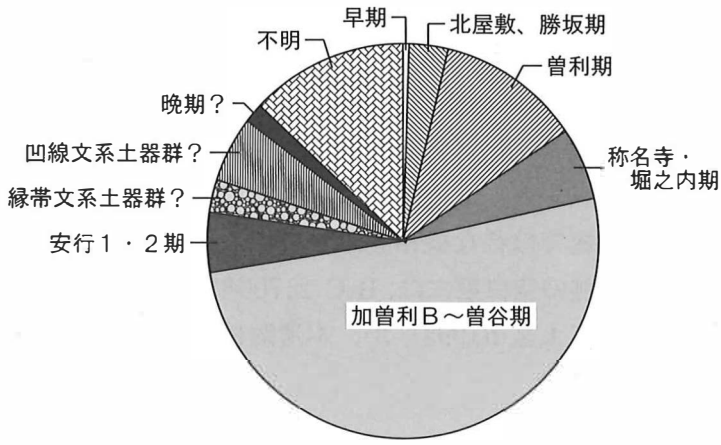
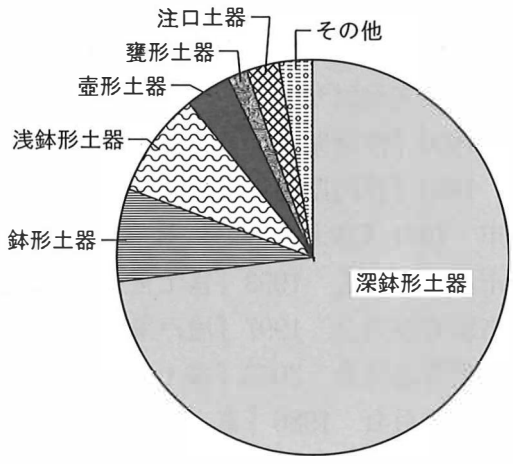


表11　縄文土器器種別割合



滝戸遺跡、箕輪Ｂ遺跡にみられるのみとなる。以後、晩期から弥生時代中期まで、遺跡の空白期を迎える（富士宮市1993）。

５次にわたる調査の行われた滝戸遺跡では、堀之内式期に遺跡の盛行期を迎え、続く加曽利Ｂ式期では、加曽利Ｂ１式が上限となっているが、本遺跡においては、加曽利Ｂ１式以降、矢羽状沈線を多用する加曽利Ｂ２～Ｂ３式まで継続しており、さらに曽谷式から安行１・２式と続き、滝戸遺跡とは遺跡の消長を同一にしない。また、加曽利Ｂ式土器は、西関東と東関東では、主文様の採用に差異があり（安孫子1981）、本遺跡は、矢羽状沈線を多用する東関東の様相に類似すると考えられる。

また、本遺跡では、後期において、主体となる称名寺式、堀之内式、加曽利Ｂ式に対して、縁帯文系土器群、凹線文系土器群かと思われる土器が一定量出土した。東海西部以西に主たる分布域をもつこれらの土器は、これまでにも富士宮市では、滝戸遺跡（縁帯文系土器）、箕輪遺跡（四ツ池式土器）、辰野遺跡（元住吉山Ⅱあるいは宮滝式）等で確認されており、本遺跡例も加わることになる。

出土石器では、石剣（石刀）の出土が特筆される。石剣（石刀）は、後期末から晩期前半にかけて、天竜川以西に偏在する傾向があると指摘されている（静岡県1992）。本遺跡出土例の２点の石材は、チャートと緑色片岩と鑑定されている。富士宮市では、他に２点の石剣（石刀）を保管しているが（富士宮市1971）、石材は、玄武岩と泥岩と鑑定された。玄武岩及び泥岩は、最寄の河川である富士川・潤井川岸で採取可能であるが、緑色片岩は、天竜川以西あるいは北関東地域に主に分布するものであるため、石材は他の地域から搬入されたと考えられる可能性が指摘された（注１）。本遺跡の南方7.5㎞にある富士川町破魔射場遺跡出土石剣も緑色片岩と報告されており（静岡県埋蔵文化財調査研究センター2001）、本遺跡と類似している。

以上の点から、本遺跡は、縄文時代中期から後期を経て晩期初頭まで継続する遺跡であり、富士山西南麓では稀な様相を示していると考えられる。富士山麓において、後期後葉から晩期にかけての遺跡の空白期には、B.C.2,700年前後に活発となった富士山の噴火活動との関連が想定されている（富士宮市1993）が、本遺跡はそういった環境の中で営むことの可能であった遺跡であると考えられる。

（註１）北垣氏教示による。

〈参考文献〉

安孫子昭二他　1981『縄文土器大成』後期
㈶静岡県埋蔵文化財センター　2001『富士川SA関連遺跡』
静岡県　1990『静岡県史』資料編１　考古一
静岡県　1992『静岡県史』資料編３　考古三
富士宮市　1971『富士宮市史』上巻
富士宮市教育委員会　1993『富士宮市の遺跡』
富士宮市教育委員会　1997『滝戸遺跡』
富士宮市教育委員会　2003『富士宮市の遺跡Ⅱ』
富士市教育委員会　1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』

2．弥生時代集落の動向（予察）

(1) 潤井川流域の様相

今回の発掘調査では、数多くの弥生土器が二次的堆積によるものと考えられる流入土の中から出土している。それらは、型式的な組成から弥生時代後期の段階で考えることができるものである。その中には図24の１や３の壺のように菊川式土器の整形技法や文様を借用するものや６や15のように遠江の影響が窺えるものなどが認められる。このように、東遠江の菊川式土器や西遠江の伊場式土器の影響が顕在化するのは、雌鹿塚Ⅱ式期に活発となる地域間の土器交流が反映されたものであり、外来系の影響が型式組列に表れる段階を考慮すると今回発見された土器群は、雌鹿塚Ⅱ式期以降のものであると捉えることができる。今回の調査で発見された弥生土器は、その出土状況からも分かるように、一括性を考えることは難しい。しかし、残存の状況は良い１などの口径と口縁部の高さの比率や菊川式の型式的な属性が受容され整形の技法として確立する段階や５の文様の施文部位、６の扇状文の採用などを考えると雌鹿塚Ⅱ式期を主体とする土器群であると捉えられる。その中で、外来系土器としての15などは頸部の屈折がしっかりしており、やや古い型式的な要素を残すものであると言える。

雌鹿塚Ⅱ式期は、弥生時代後期の中でその時代的な特徴を最もよく表す段階であるが、大中里坂下遺跡に近接する滝戸遺跡SB26で出土している一括土器などがその基準資料となっている。

滝戸遺跡SB26の土器群（図26）は、壺、甕、高坏、小型土器からなる構成を示すものである。壺としての広口壺は、単純口縁壺、複合口縁壺が認められ、複合口縁壺を含む点を特徴としている。壺の頸部から肩部における文様は、一段の縄文に対して端末結節文と円形貼付文の組み合わせにより文様帯を構成する複合口縁壺と５段の縄文による羽状構成する縄文帯に円形貼付文を組み合わせるものとが出土している。多段で加飾性の強い後者は古相を示すものであるが、頸部最小径より下位に施す雌鹿塚Ⅱ式期の原則を守っている。前者は幅の狭い文様帯に対する上下の区画が表れており、雌鹿塚Ⅱ式期以降に盛行する文様意匠である。

同時に出土している高坏は、菊川式土器の中段階の型式を模倣したものであるが、本来高坏を弥生時代後期の型式組成として持ち得ない東駿河においては、極めて珍しい器種と言える。それが、土器の交流の目立つ雌鹿塚Ⅱ式期のものとなると、ひとつの段階としてその時代の特徴をよく表していると言えるものでもある。

大中里坂下遺跡の弥生時代を雌鹿塚Ⅱ式期として、この段階に係る遺跡の動向を捉えて見ると潤井川流域における特異な遺跡群の変遷を考えることができる。先ず、弥生時代中期の遺跡の存在がはっきりしない地域における遺跡の登場は、弥生時代後期に入ってからであるが、その初頭段階についてはよく分からない。最初に集落としての出現が明らかなのは、大中里坂下遺跡とは潤井川を挟んで対岸に立地する泉遺跡の環濠集落からである。

集落に伴う環濠が調査されており、雌鹿塚Ⅱ式期の土器類が発見されている。これらの土器は菊川式土器の影響を強く受けた土器群で、弥生時代後期の土器移動の様子をよく伝える資料として重要であるとともに雌鹿塚Ⅱ式期を規定する基準的なものとして捉えられる。

この土器群は、環濠の覆土中からの出土であり、環濠の廃絶年代を表すものである。この環濠に係る集落は、この年代かそれ以前に営まれていたものと考えることが妥当であるが、ここで重要なのは、この潤井川中流域において雌鹿塚Ⅱ式期に廃絶する集落が存在することである。そし

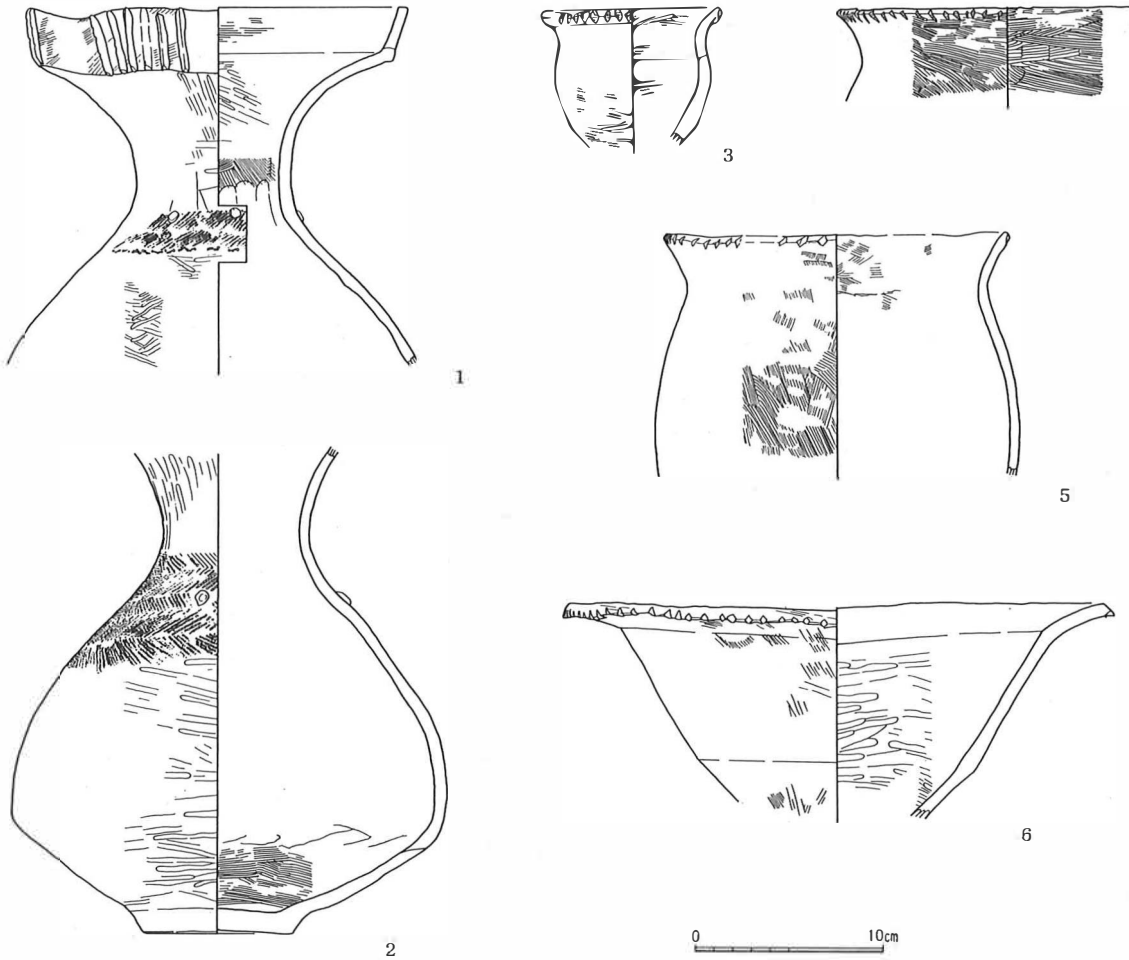


図26　滝戸遺跡SB26出土土器

て、その集落は富士山斜面の丘陵内や星山丘陵あるいは羽鮒丘陵などの台地上ではなく、潤井川の形成した沖積地内の微高地上に築かれているのである。

潤井川はその源を富士山の大沢に持ち、空沢が途中から水を湛えることにより河川となるもので、一連の谷筋がその環境により名を変えている。ここでは便宜的に最上流域の空沢部分を大沢、以下を潤井川として呼び分けている。その潤井川が作用して形成された沖積平野は、火山起源の火山灰が厚く堆積している。そのため、本来の土壌では、水利をうまく活用したとしても水田の可耕地を広い範囲に求めることはなかなか難しい。泉遺跡の南側には潤井川左岸に広がる低湿地を認めることができるが、発掘調査で水田を遺構として確認したことはない。このように、山間に形成された狭い沖積地に進出した弥生時代集落は、その主たる生業を稲作に求める必要はないようであり、稲作を過大に評価するだけの景観は持ち得ないのである。このような地形環境の中で今回の発掘調査で発見された格子状に広がる溝状の遺構が、農業生産の形態のひとつを表すのであれば、それは極めて重要な発見であると評価される。

泉遺跡の集落は、雌鹿塚Ⅱ式期に営まれたムラであったことは環濠からの出土土器からも判断することができる。同時に発見された竪穴住居の一部はこの段階のものであろう。その中で、かつて泉遺跡採集の土器として報告されている壺（図27）などを見ると更に遡って雌鹿塚Ⅰ式期に出現した可能性を秘めていると考えることができる。採集された土器は、折り返し口縁壺と複合

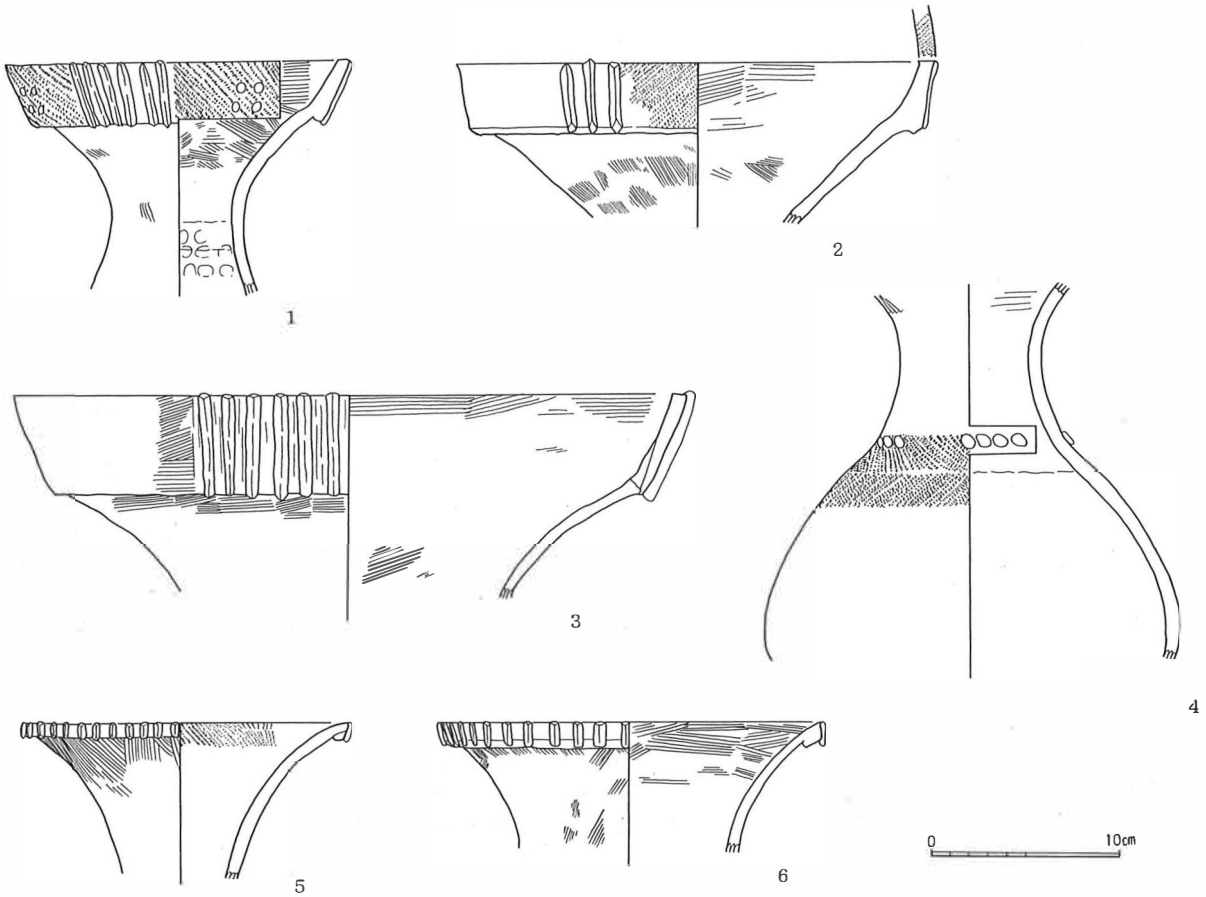


図27　泉遺跡出土土器

口縁壺が見られる６個体の壺である。それぞれに型式差があり同じ段階のものとしては扱えないが、市内では弥生時代後期の中でも古相を示すものである。特に、図27—１は長頸壺の様子を残す頸部に複合部が付されるもので、複合部の外面に縄文＋棒状の貼付文・円形の貼付文などが施されている。比較的加飾性に富み、口径に較べて頸部の径が小さいその器形から雌鹿塚Ⅰ式期のものと考えることができる。

このように泉遺跡の集落は、この潤井川流域で弥生時代後期において早い段階に出現したものであると考えられる。それは、富士市域の沖積平野を含めた地域においても指摘できることで、現在まで富士市における弥生時代後期の遺跡として判明している遺跡は、丘陵先端部にある的場遺跡と丘陵上の向山遺跡、砂丘上の柏原遺跡や三新田遺跡などであるが、雌鹿塚Ⅰ～Ⅱ式期に関連する遺跡としては的場遺跡と砂丘上の２遺跡であり、海岸部を含めて広域的に点在する状況が見えてくる。それは、雌鹿塚遺跡や尾崎遺跡あるいは豆生田遺跡、山木遺跡など浮島ヶ原の東側から狩野川にかけて分布するこの段階の遺跡群の状況と良く似たものである。この段階の遺跡が沖積地内に分布するとしても、それは、海岸部だけの低地だけではなく河川の中流域まで進出をしているのである。

泉遺跡の出現は、弥生時代中期の遺跡の見られない地域に対する新たな開発の始まりとして評価されるものであるが、それは沖積地を敢えて選択しての進出なのであろうか。泉遺跡が雌鹿塚Ⅱ式期段階に廃絶するために弥生時代後期の前半段階の遺跡として取り上げられるものであるが、それが後期後半まで継続する遺跡の場合はその前半段階の状況はよく分からないのが実態であろ

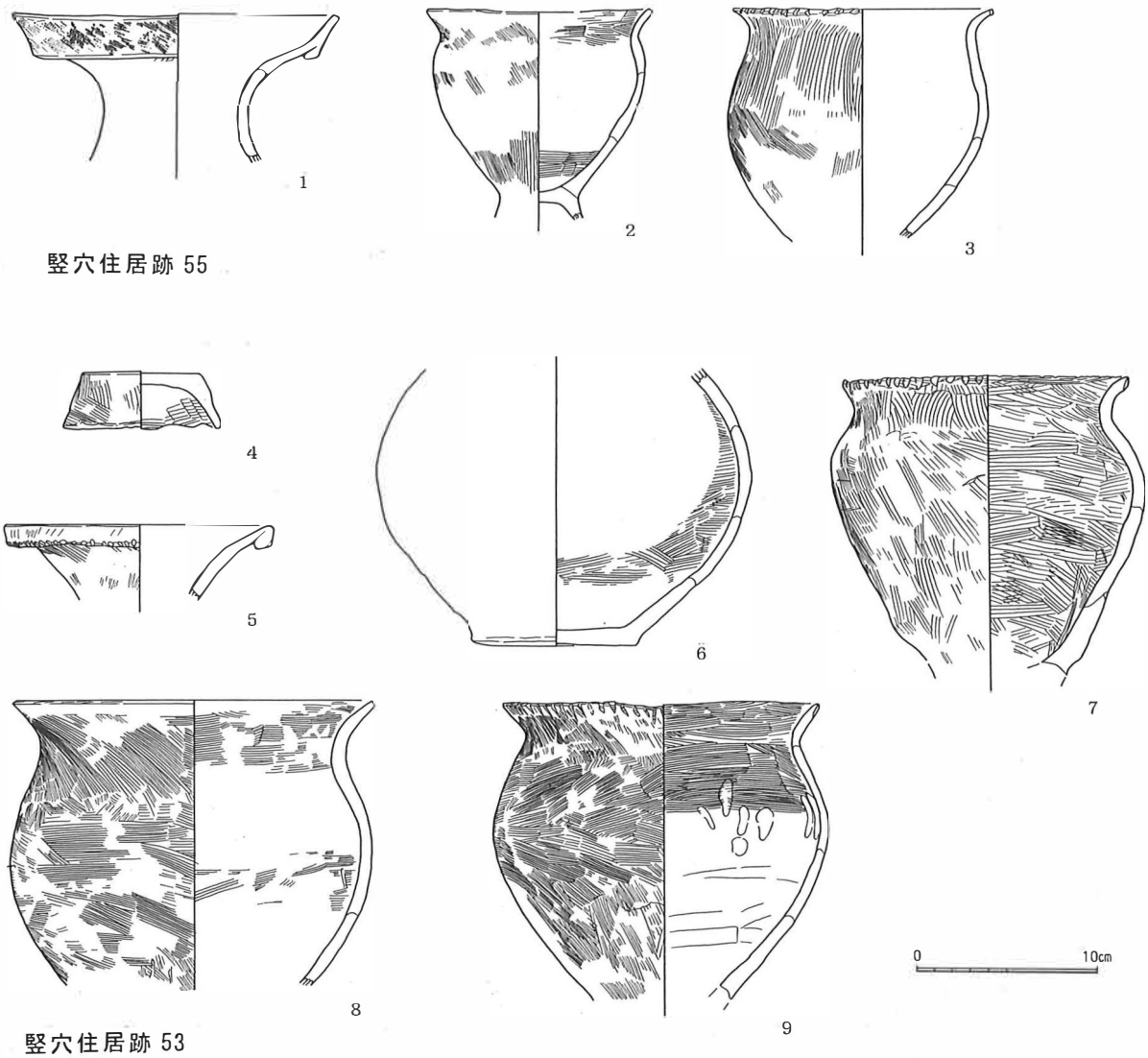


図28　月の輪上遺跡出土土器

う。

弥生時代後期の遺跡は、雌鹿塚Ⅰ～Ⅱ式期にかけて沖積平野に展開し、雌鹿塚Ⅱ式期の画期を通して以後、愛鷹山麓、箱根山麓、富士山麓などの丘陵上に進出すると考えられているが、はたしてそうであろうか。

滝戸遺跡のSB26は、雌鹿塚Ⅱ式期の竪穴住居であるが、この住居は、二つの竪穴住居と重複関係を持つものである。そして、それらの中でSB26が、最も新しい段階のものであることが判明している。この重複関係の中で最古段階に位置づけられるSB28は、滝戸遺跡ではあまり見ることができない小判型の平面形で長軸7.5mの大きさを測る竪穴で、SB26出土の土器群より古い様相を示す資料の出土が認められる。

星山丘陵に立地する月の輪上遺跡は弥生時代後期末葉雌鹿塚Ⅳ式期に廃絶する特異な環濠が認められる集落遺跡であるが、環濠を無視するかのようにその外側に展開する集落が発見されている。この集落は、雌鹿塚Ⅲ式期が主体となるもので、その段階の良好な一括資料が出土している。これは、この特異な展開を見せる集落が環濠の時期より古くなることを表すものであり、独自の

変遷を辿ることが指摘できるのである。この集落は、１棟の掘立柱建物に対して数軒の竪穴住居からなる単位建物群（近藤1959）を認められる集落景観を示す特徴的な事例であることは、すでに検討されている（富士宮市教育委員会1994）が、その集落の初源を考えると竪穴住居跡53と竪穴住居跡55の出現がその具体的な遺構として取り上げることができる（図28）。

竪穴住居跡53はここで認められる集落域の北側にある竪穴住居で5.9m×4.8mを測る小判型を示す。出土遺物は、台付甕、折り返し口縁壺、台、土製勾玉、砥石などである。台付甕は型式の異なる３個体の出土が認められるが、いずれも外来の型式的な要素を持つもので構成されている。器形の多様性も目立つがその構成が注目される一括資料である。この土器類は雌鹿塚Ⅱ式期に比定され、月の輪上遺跡では古い段階のものとして捉えることができる（註１）。この竪穴住居跡53は、竪穴住居３軒が重複する状況で発見された竪穴であり、この住居跡より古い段階のものの存在が確認されている。雌鹿塚Ⅱ式期より古い段階の遺構、遺物のある可能性が指摘できる。

竪穴住居跡55は、集落として調査されて区域のもっとも東側で発見された竪穴住居で小判から隅丸方形への過渡的な形態を示すものである。出土土器には、台付甕、複合口縁壺が見られる。これらも竪穴住居跡53の出土土器と同様に雌鹿塚Ⅱ式期のものと捉えることができる。

月の輪上遺跡の集落は、月の輪平遺跡や南部谷戸遺跡などからなる月の輪遺跡群の中で弥生時代後期をその主体としており、同じ弥生時代後期の下谷戸遺跡とともに他の遺跡とは異なる変遷を辿るが、その初源は確実に雌鹿塚Ⅱ式期の段階までは遡るものであると言える。

このような雌鹿塚Ⅱ式期に係る資料としては、石敷遺跡においても同じような動向を追うことができる。月の輪上遺跡とは潤井川を挟んで対峙する石敷遺跡では、富士山斜面地において現状では希薄な分布しか示さないとされる弥生時代の遺跡の中で、その終末期の集落が発見されている丸ヶ谷戸遺跡とともに数少ない弥生時代集落が調査されている。この遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居址が７軒発見されている。多くの住居跡が後世の削平を受けており、その残存状況はあまりよくないが、竪穴の平面形の変化を検討するには十分な資料を提供しているものである。

竪穴２は隅丸方形を指向する竪穴住居跡で、その周囲に多くの焼土とともに一括の出土が知られる土器群が発見されている（図29）。１は複合口縁壺であり、複合部に対する文様施文の著しいものである。複合部は比較的幅が狭く、器壁を厚く作る弥生時代後期の古い段階の要素を残すものである。この口縁の形態に対して頸部には、頸部の径が最も狭くなるあたりから肩部にかけて横線文＋縄文・貼付文＋端末結節文からなる文様が施されている。この構成を示す文様は、雌鹿塚Ⅱ式期以降に菊川式土器などの文様を借用することで成立するものであり、複合部の形態との組み合わせにはやや違和感を覚える型式であるとも言える。２も１同様複合口縁壺の口縁部破片であるが、文様の簡素化が進行しており、複合部の器壁も薄くなる。６は台付甕の下半部破片である。脚台部内面の丁寧なヨコハケメと直線気味に広がる脚台の器形が特徴的である。７は甕の口縁部破片であるが口縁部外面のヨコハケメを認めることができる。以上の諸条件を加味するとこれらの土器群は雌鹿塚Ⅱ式期のものであると考えることができる。その中で複合口縁壺が２個体ある点は、この壺が古墳時代前期にかけて徐々にその比率を減じる形式であることを考えると、複数の個体数を占めており、時代の特徴をよく表していると言える。

石敷遺跡では、竪穴住居跡の平面形が円形指向の小判型から方形を示す隅丸方形へと変化する段階の集落を調査している。竪穴２は方形指向の竪穴であり雌鹿塚Ⅱ式期の年代が想定されるものに対して竪穴３や竪穴８などは明らかに小判型を示している。ここに雌鹿塚Ⅱ式期に起こる現象として竪穴の平面形の変化を指摘できるわけであるが、それは、月の輪上遺跡の竪穴住居跡52～

54の重複関係、竪穴住居跡55の形態、滝戸遺跡のSB26とSB28の形態の違いなどにおいても確認されるものである。これらの中で円形を指向する竪穴住居址はその遺物の出土例が少なく確実な年代を検討するまでは至らないが、確実に雌鹿塚Ⅱ式期かあるいはそれ以前の段階を想定することができる。滝戸遺跡のSB28などに認められる雌鹿塚Ⅰ式期の土器をどのように認定するのかが型式組成の正しさを表すものとして重要であるわけであるが、その一括資料にはまだ恵まれているとは言えない。しかし、丘陵部の各遺跡において雌鹿塚Ⅱ式期あるいはそれ以前の遺構・遺物が認められる事象は、それらの集落が出現する段階がそれほど沖積地に立地する泉遺跡の登場時期と変わらないことが表すものとして重要である。

富士山の西南麓にあたる潤井川中流域においては、滝戸遺跡や月の輪上遺跡の星山丘陵上の遺跡と富士山斜面側の石敷遺跡などの出現時期は、環濠集落として営まれた沖積地内の泉遺跡とそれほど大きな時間的な違いはないと考えている。その状況の中で、泉遺跡の環濠廃絶時に対応する時期の土器群を今回の大中里坂下遺跡では確認しているのである。

大中里坂下遺跡と同じ丘陵上に展開している滝戸遺跡における集落の変遷を考えてみると、雌鹿塚Ⅰ式期に丘陵上に集落が出現した後、雌鹿塚Ⅱ式期にその繁栄期を迎え、以後衰退していく

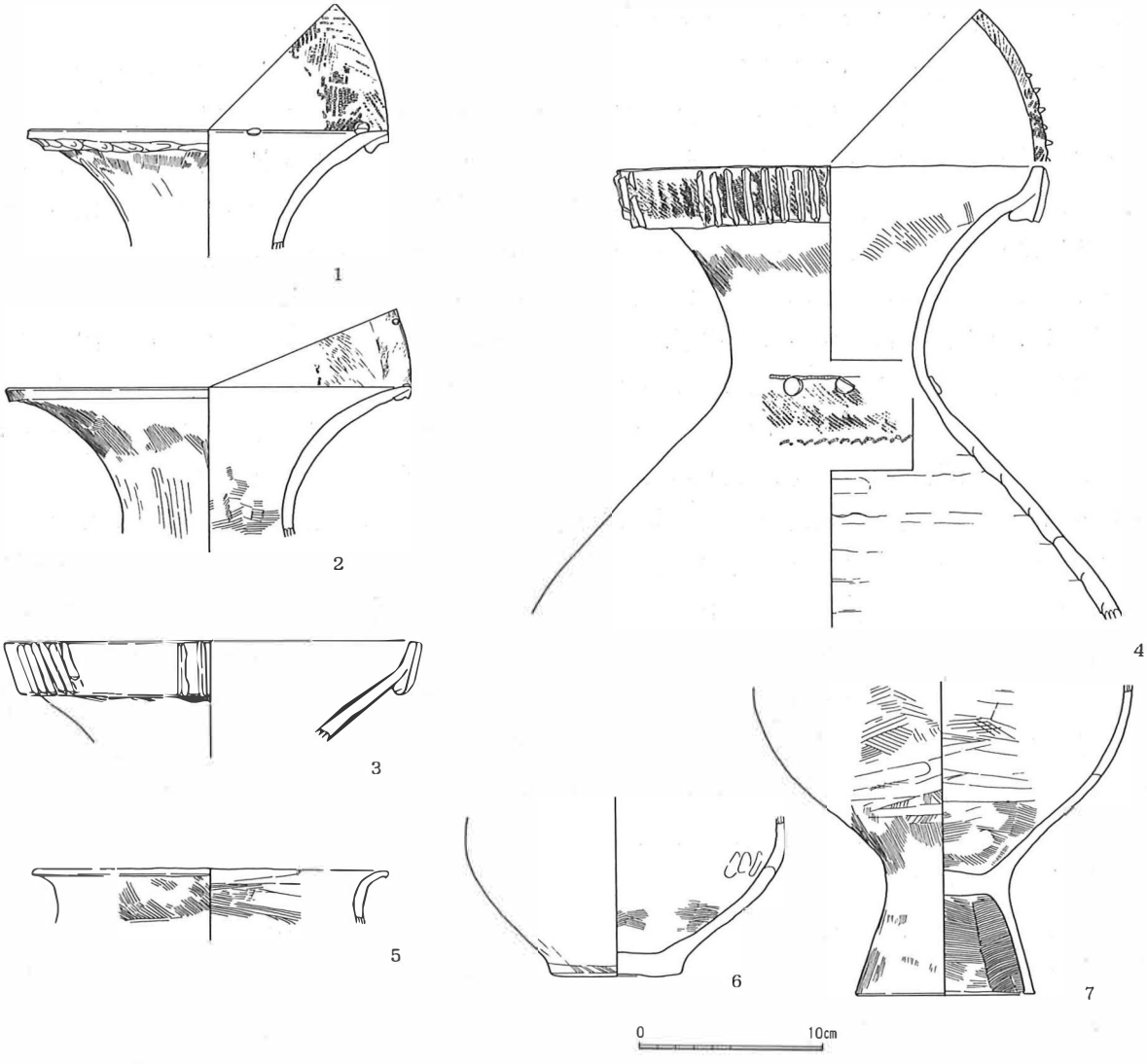


図29　石敷遺跡出土土器

ようで雌鹿塚Ⅲ・Ⅳ式期の土器の出土数は減る。それは川を挟んで対峙する泉遺跡の動向に同調した動きと理解することができる。ただし、滝戸遺跡の場合は潤井川沿いの段丘面には雌鹿塚Ⅱ～Ⅳ式期の時期に当たる方形周溝墓群が築かれており、対応する集落の存在が想定されるのである。

弥生時代後期の集落が営まれた滝戸遺跡においては、古墳時代に入ると丘陵上から川沿いの段丘面まで竪穴住居や方形周溝墓をそれぞれの区域を形成しながらも営まれるようになる。それは大廓Ⅰ・Ⅱ式期のことであり、この時期に対応すると思われる遺構の発見が多い。このような古墳時代前期前半の活発な集落の動向は、泉遺跡においても指摘できることである。大廓Ⅰ・Ⅱ式期における広範囲に亘る遺跡の分布は市域南部の月の輪平遺跡、南部谷戸遺跡や丸ヶ谷戸遺跡などの有力な遺跡を生み出すのである。丸ヶ谷戸遺跡における前方後方形周溝墓はその象徴である。

滝戸遺跡と泉遺跡の共通した動向は、遺跡立地の環境は大きく違えても同調した造営活動を行っていることをよく表しているものと考えることができる。

⑵　愛鷹山の様相

弥生時代後期の集落を考える場合、愛鷹山中腹の限られた範囲に展開する遺跡群の動向は、静岡県東部、駿河湾沿岸地域の遺跡群の基本的な変遷を表わしているものであり、集落の特異な山間における進出とともに平野部の集落との相関性に対する標準的な姿を示している。

広大な範囲を調査して300軒に及ぶ竪穴住居や50棟以上の掘立柱建物跡が発見されている植出遺跡では、それぞれの出土遺物が雌鹿塚Ⅲ式期以降大廓Ⅱ式期までを主体として出土しており、各竪穴の多くはこの年代のものであることが指摘される。特に、大廓Ⅰ・Ⅱ式期の出土資料は良好な状況で発見されており、東駿河地域の古墳時代前期前半の状況をよく表しているものであるが、それは、土器交流の活発な狩野川流域の山木遺跡に代表される状況と大きく違えており、弥生時代以来の在来系土器の占める割合の極めて多い土器組成の中で独自の型式変化を示している地帯であると言える。これは、この植出遺跡ばかりではなく、愛鷹山に展開するこの段階の遺跡全てに対して相当する事象として捉えられる。

愛鷹山に広がる弥生時代後期から続く集落遺跡は、大廓Ⅲ式期に入ると悉く消失しているようで、大半の遺跡の動向は途絶える。それでは、これらの遺跡群の初源はどこに求めることができるのであろうか。これまでは、弥生時代後期前半（雌鹿塚Ⅰ・Ⅱ式期）に沖積平野での集落経営が精力的に行われていたものが、後半段階（雌鹿塚Ⅲ・Ⅳ式期）にはいずれも消失して、その動向がはっきりしなくなる。それに呼応するかのように愛鷹山の遺跡群が登場してその経営を始めるとするのが大勢の見解であった（小泉2002）。その沖積地から山中とも呼べる山間への進出は、菊川式土器や伊場式土器の搬入が活発になることや沖積平野にある沼津市尾崎遺跡などの環濠が廃絶されることなどが実際の歴史的な事象として確認されて、衝撃的な画期と認識されている。この画期を通して土器型式が大きく変化するのも確かであり、後期の中で新たな展開を示すようになる。

植出遺跡で発見されている各竪穴住居を検討してみると、明らかに雌鹿塚Ⅱ式期の時期と考えることができる竪穴住居としてSB204、SB207、SB211、SB220、SB258、SB401、SB437、SB455、SB539、SB563などを挙げることができる。これらは調査した地区の中央部南側と北西側にやや偏る状況で確認されるもので、重複関係を持つSB211とSB220以外は一定の間隔を有して点在している。

これらの中には、SB207やSB211あるいはSB220、またはSB539のように他の竪穴住居と重複関係にあるものがあり、それぞれの住居より古くなるものが存在している。その時間的な段階設定は、遺物の出土例が少ないことなどによりなかなか難しいが、単独で調査地区の中央部に位置しているSB437と呼ばれている竪穴住居などを見ると、雌鹿塚Ⅱ式期段階でもその古い段階のものと捉えられるものがある。

SB437は、3.62m×3.86mの規模を有するやや小ぶりの竪穴住居で円形の平面形を示す。炉は竪穴の中央部に築かれ、４本の柱に対応する柱穴がその周囲に配されており、植出遺跡においてはやや特異な形態の竪穴住居であると言えるものである。

出土遺物は、壺、甕、鉢類である。壺は折り返し口縁壺と単純口縁壺が見られる。この内、折り返し口縁壺はその折り返し部断面が幅広の縦長のものであるため、通常の折り返し口縁壺の折り返し部文様施文部分がその上端部となり面取り部分として捉えることができる特異な形態を示すものである。また、同時に出土している壺の中には、長頸気味の頸部破片があり、多段の縄文と端末結節文による文様が頸部外面に対して幅広く施されているものが見られる。

弥生時代後期の前半段階の集落の登場は、植出遺跡の南側に広がる北神馬土手遺跡においても確認することができる。この発掘調査は沼津市の市道建設に関連する調査として実施されたもので、愛鷹山の遺跡群を南北に貫くような調査範囲の中で、前述の植出遺跡も含む複数の遺跡の調査が実施されている（沼津市教育委員会2003）。その中のひとつである北神馬土手遺跡においては、雌鹿塚Ⅱ式期の土器が発見されているSD２（２号溝）が調査されている。SD２は、南北方向に延びる丘陵を横断するように築かれたものであるが、このような丘陵上を横切る溝は、この愛鷹の各遺跡では数多く発見されている。

北神馬土手遺跡にはさらにSB２（２号住居址）とされる竪穴住居址の一部が調査されている。ここで取り上げられた土器群は、壺、甕、鉢類であり、器高15cm程度の小形の壺を２点含まれる点を大きな特徴としている。これらの壺のひとつは複合口縁壺で、複合部の外面に棒状の貼付文が施されている。SB２出土の土器類はSD２とした溝から出土した土器類より古い様相を示し、雌鹿塚Ⅱ式期以前の時代が考えられるものである。

この遺跡の北側で隣接する植出遺跡に最も近い部分で発掘調査された地区に対する報文においては、雌鹿塚Ⅰ式期に併行する段階を認定しており、北神馬遺跡の出現がその段階であるとされている（沼津市教育委員会2001）。

このように、愛鷹山における遺跡群が登場する時期について発掘調査された資料のほんの一部を紹介して検討してみたが、雌鹿塚Ⅱ式期には集落経営が確実に行われていたことは指摘できる。そして、それ以前の遺構・遺物となり得るものの存在も窺うことができるのである。

(3) 弥生時代後期集落の登場

潤井川流域と愛鷹山山麓における弥生時代後期集落の出現期の状況を確認してきたが、その登場は、沖積地と丘陵あるいは山間地とする地形に規制されるものではなく、ほぼ同時期に各地において現れることが言えそうな状況にある。つまり、沼津市の沖積平野に展開する尾崎遺跡や雌鹿塚遺跡と愛鷹山の中腹と言えそうな丘陵に広がる北神馬遺跡や植出遺跡との集落の造営はそれほどの間を置かずに実施されたのではないかと考えられるのである。

これらの遺跡間における地形環境による集落や土器型式の違いは、その継続期間の違いが大き

く作用して、現在確認できる遺跡の諸属性の中で指摘されていることであり、本来の集落が登場した頃の様子を直接捉えるには、各遺跡において異なる対応が必要となる。その中で共通する情報を検討することでその状況を解明する必要がある。現状では、前述するように雌鹿塚Ⅰ式期の中で各地における集落経営が開始されたと考えている。そして、多彩な地域環境の中でそれぞれに適した生産活動を行っており、平野部における稲作、山間地における畑作などとして生業の形態を違えるものとなるのである。弥生時代後期の生産活動の多様性をここに指摘することができるのである。雌鹿塚Ⅱ式期の竪穴住居である考えられる植出遺跡SB437における炉内からの炭化米の出土は、間接的ではあるがその実態を表しているものとして重要である（静岡県埋蔵文化財調査研究所1997）。

大中里坂下遺跡の畑作関連遺構は、そのような時代の中で山間地における集落経営の一旦を担う生産域の発見として捉えることもできるのである。

弥生時代中期の遺跡との分布域が共通する沼津から三島にかけての弥生時代前半期の遺跡の出現と同時に山間に進出する遺跡分布圏の大きな拡大は、富士山麓のような弥生時代中期の遺跡の存在しない地域までその地形環境を問わないで遺跡が出現する状況まで生み出すようで、遺跡数の大幅な増大が促されるようになるのである。

このような弥生時代後期集落の動向は、山木遺跡周辺で弥生時代後期の初頭段階にその萌芽が認められる。山木遺跡に弥生時代後期集落の出現と同時に程近い丘陵部に神崎遺跡の集落が登場しているのである（註２）。それは、当初から立地環境を違えながら経営の始まる弥生時代後期集落の姿を見る事ができるのである。

このように、弥生時代後期の広域的な地域開発は、その事象面として山間地への進出として捉えることができるが、その具体的な要因についてはよく分からない。弥生時代後期という時代的特性の解釈とともに大きな検討すべき課題である。

この課題に対しては、土器の型式編年の確立が欠かせない作業のひとつであろう。時間軸の共通の認識の上で検討しなければ、そもそも議論にもなり得ないのである。

（註）

１．月の輪上遺跡の竪穴住居跡53出土の土器群に対しては、かつて雌鹿塚Ⅳ式期のものとして捉えていた（富士宮市教育委員会1997）。今回は雌鹿塚Ⅱ式期のものとして大幅に訂正する。従来の土器型式分類の方法論的な誤りに起因しているものであるが、駿河～伊豆地域の弥生時代土器編年はまだ流動的な要素が多い。段階の設定としては現状の時期区分を使用するものであるが、それぞれの型式分類とその組列については改めて検討しなければならない時期に来ていると考えている。

２．弥生時代後期を雌鹿塚Ⅰ～Ⅳまでの４段階として考えていたが雌鹿塚Ⅰ式期の前に弥生時代中期とを結ぶ初頭段階を設定する必要が山木遺跡や神崎遺跡など出土資料から考えなくてはならなくなっている（静岡県教育委員会1972・韮山町教育委員会1977）。遺跡の分布圏はまだよく分からないが、狩野川中流域において一定の分布を認めることができる。この段階を評価すれば、今後、弥生時代後期初頭と雌鹿塚Ⅰ式期～雌鹿塚Ⅳ式期に対して弥生時代後期の拠点的な集落であり継続的経営が窺われる山木遺跡を東駿河～伊豆の標識的な遺跡と捉え、山木Ⅰ式期～山木Ⅴ式期の５段階に分けて時期区分することにする。

〈文献〉

小泉祐紀　2002「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態」『中部弥生時代研究会第５回発表要旨集』中部弥生時代研究会

近藤義郎　1959「共同体と単位集団」『考古学研究』６－１　考古学研究会

静岡県教育委員会　1972『田方郡韮山町神崎遺跡緊急調査概報』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997『北神馬土手遺跡　他　Ⅰ・Ⅱ』

韮山町教育委員会　1977『山木遺跡第４次調査報告書』

沼津市教育委員会　2001『北神馬土手遺跡・尾上Ⅱ橋遺跡発掘調査報告書』

沼津市教育委員会　2003『市道0230号線関連遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』

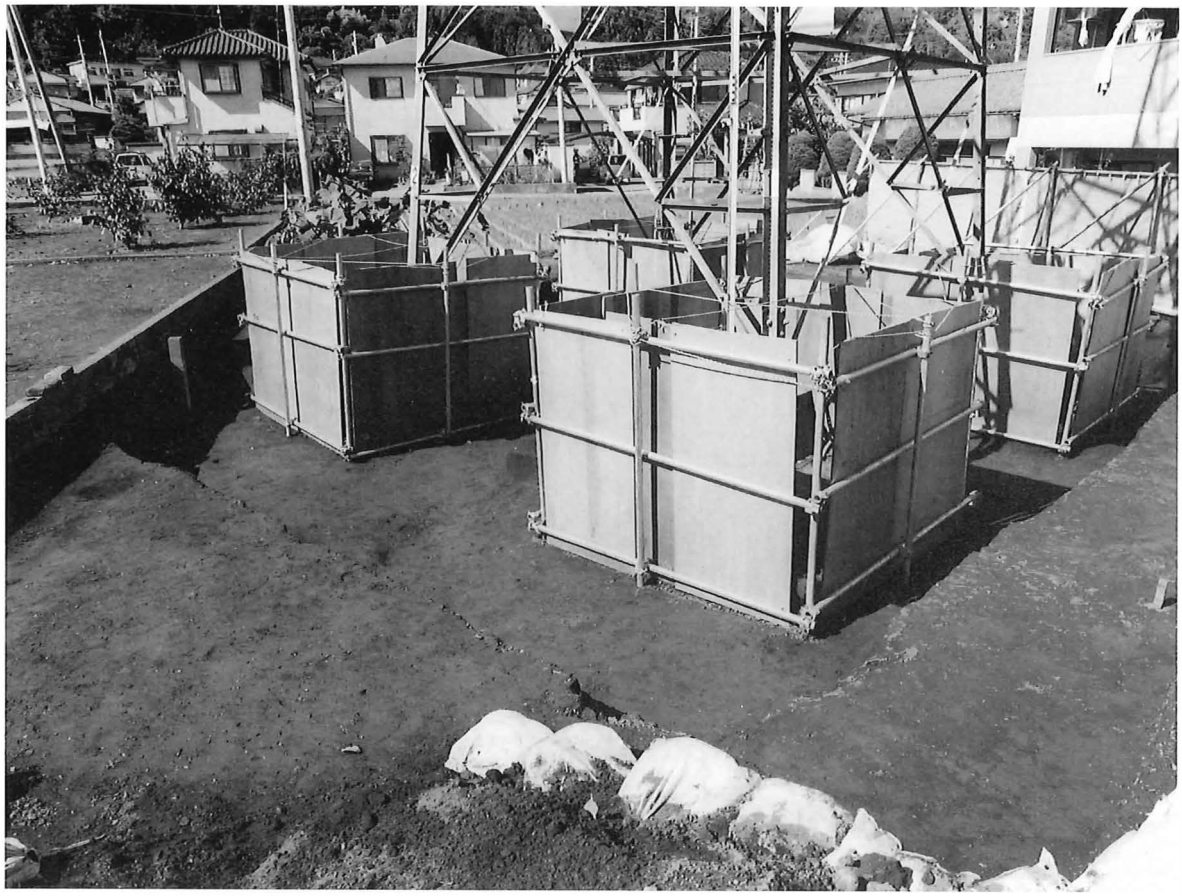
富士宮市教育委員会　1997『滝戸遺跡』

３．おわりに

本調査は、東京電力株式会社中里線建替え工事に伴う発掘調査であったため、調査面積は比較的狭く、約136㎡の調査であった。調査区は、北側の清水川へ向けて傾斜する斜面堆積地にあたり、遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期の溝状遺構のみであった。しかし、遺物は豊富に出土し、本遺跡の主体であろうと考えられる南方の高所平坦面には、縄文時代中期～晩期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が広がっていることは、想像に難くない。二次堆積地の調査ではあったが、これまで未調査であった大中里坂下遺跡の様相を垣間見ることができた。

写　真　図　版

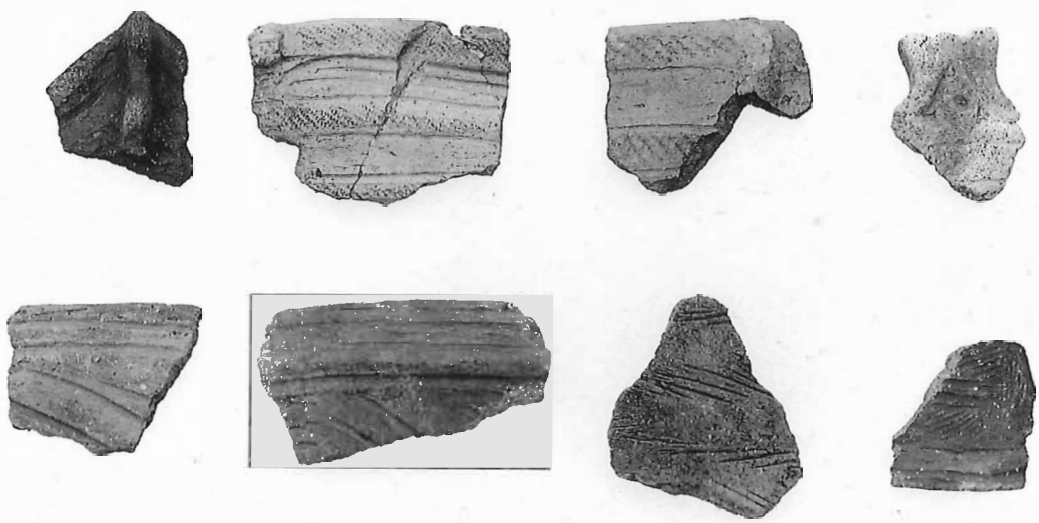
図版１



A　北区全景

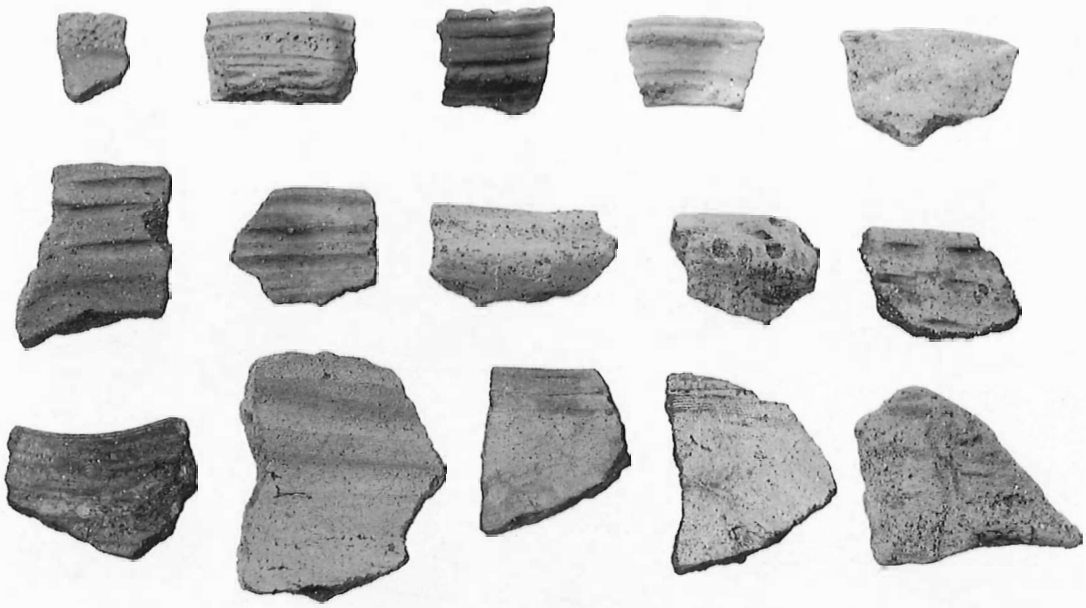
B　溝状遺構

A　出土土器１



B　出土土器２

図版３



A　出土土器３

B　出土石器

C　出土土器４

D　出土土器５

報告書抄録

ふりがな	おおなかざとさかしたいせき
書名	大中里坂下遺跡
副書名	東京電力株式会社中里線鉄塔建替工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	富士宮市文 化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	渡井英誉、佐野恵里、小野田晶
編集機関	富士宮市教育委員会
所在地	〒418—8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 TEL 0544—22—1111(代) mail：e-bunka@city.fujinomiya.ne.jp(文 化課)
発行年月日	西暦2005年4月20日

所収遺跡	所在地	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おおなかざとさかした 大中里坂下 いせき 遺跡	ふじのみやし 富士宮市 おおなかざとあざ 大中里字 かぶといし 甲石866—3	市 86 県 36	35° 13′ 23″	138° 35′ 42″	20040913 〜 20041027	約136㎡	東京電力株式会社中里線鉄塔建替工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大中里坂下遺跡	散布地	縄文	なし	縄文 土器（早期、中期〜晩期初頭)、石器（石鏃、打製石斧、磨製石斧、石匙、石剣他）	
		弥生 〜 古墳	溝状遺構	弥生 土器（後期）土師器（古墳前期）	

富士宮市文化財調査報告書第34集

大中里坂下遺跡

—東京電力株式会社中里線鉄塔建替工事に伴う発掘調査報告書—

平成17年４月20日

編集　富士宮市教育委員会

発行　富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22－1111(代)

印刷　みどり美術印刷株式会社

〒410-0058

沼津市沼北町２丁目16番19号

(0559) 21－1839